



12 Facing "Master's Doll" 機巧少女は傷つかない

MF文庫 J 12 08-12



機巧少女は傷つかない12 海冬レイジ

海冬レイジ 〇るろお

機巧少女は傷つかない12

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。日輪の手で一命を取り留めた雷真だが、目覚めた時夜々の命の刻限は過ぎており——「夜々はどうなった!?」「申し訳ありません。わたくし……夜々さんを……っ」一方、学院では王妃グローリアが新学院長に就任。学院は英国に掌握され、アスラを魔王にする謀略が動き出す。そんな中、姉を殺され復讐の念に駆られたロキは、一人反撃の機会をうかがっていた……！ 秘められし硝子の過去が明かされるとき、乙女たちは雪月花誕生の「意味」を知る——！ シンフォニック学園バトルアクション！

TVアニメ放送開始!

AT-Xにて 10月7日(月)20:30 から放送開始!

TOKYO MX、テレビ愛知、BS11でも放送開始予定!

10月放送予定!

シリーズ累計 127万部 (2013年9月現在)

「行くぞ夜々」

「はいっ!」

雷真

MF文庫 J

©2013 海冬レイジ・メディアファクトリー・機巧少女は傷つかない製作委員会

アニメ放送! 機巧少女は傷つかない 同時購入キャンペーン

文庫最新12巻+ライブコミックス最新7巻+ジーンメタリカ最新1巻のうち2冊を買ってスペシャルな「機巧少女」グッズを抽選でゲット!

特賞A 5名様

「機巧少女は傷つかない」特製時計
手作り時計のJHA時計作家ksによる「機巧少女は傷つかない」をイメージした「機巧少女特製時計!!」を5名様にプレゼント!

特賞B 30名様

TVアニメ「機巧少女は傷つかない」キャストサイン入り台本

特賞C 200名様

「機巧少女は傷つかない」オリジナルグッズセット
(缶バッジ、クリアファイル、ICカードステッカー)

【応募方法】対象商品(ライブコミックス「機巧少女は傷つかない」②(9月21日発売)、MF文庫J「機巧少女は傷つかない」12(9月25日発売)、ジーンコミックス「ジーンメタリカ」①(9月22日発売)の下部応募券を2枚切り取って、50円切手を貼ったハガキに貼ります。ハガキに必要事項(氏名、住所、年齢、電話番号)を記入の上、下記宛先までお送りください。※同タイトルの応募券を2枚貼っての応募はできません。【宛先】〒163-8691 東京都新宿区 郵便私書箱39番 メディアファクトリー「機巧少女は傷つかない」同時購入キャンペーン事務局

【応募期間】当賞品の発送は2014年2月末までを予定しております。当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。※お預かりした個人情報、本キャンペーンに関する連絡、抽選、賞品の発送にのみ使用し、それ以外の用途には一切使用いたしません。※応募券はコピー不可とさせていただきます。※不備があった場合抽選の対象外となります。ご注意ください。お問い合わせはメディアファクトリーカスタマーサポートへ。0570-002-001(月～金10:00～18:00)

【締め切り】2013年12月31日(当日消印有効)



12 Facing "Master's Doll" 機巧少女は傷つかない

海冬レイジ 著

Illustration るろお

MF文庫 J

MF文庫 J
か-08-12



機巧少女は傷つかない 12

海冬レイジ

機巧少女は傷つかない12

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。日輪の手で一命を取り留めた雷真だが、目覚めた時夜々の命の刻限は過ぎており——「夜々はどうなった!?」「申し訳ありません。わたくし……夜々さんを……っ」一方、学院では王妃グローリアが新学院長に就任。学院は英国に掌握され、アスラを魔王にする謀略が動き出す。そんな中、姉を殺され復讐の念に駆られたロキは、一人反撃の機会をうかがっていた……！ 秘められし硝子の過去が明かされるとき、乙女たちは雪月花誕生の『意味』を知る——！ シンフォニック学園バトルアクション！

MF文庫 J
VI
FACTORY

12

Facing
"Master's
Doll"

機巧少女は
マシンドール

傷つかない
Unbreakable Machine-Heart

海冬レイシ
Mushroom
るるお



半透明の薄布がゆるく巻きつけられ、
標本のように眠っている。その乙女こそ――

夜々だった。




「だって！
夜々はそんなに
悪くないのに……
姉さまが
やかましすぎるんですっ」

「あんなお姉ちゃん、
いない方がよかった？」

意地悪をしてそう訊くと、
夜々は口をつぐみ、
うつむいてしまった。



An anime-style illustration featuring two characters. On the right, a young man with dark, spiky hair and blue eyes is shown in a dynamic, forward-leaning pose. He wears a white long-sleeved shirt under a dark blue vest and has a determined, slightly shouting expression. His right hand is clenched into a fist with a black glove featuring a white 'X' pattern. On the left, a young woman with short, light grey hair and purple eyes is shown from a side profile, looking towards the man. She wears a dark blue dress with a purple shawl draped over her shoulders. The background is a soft, hazy mix of grey and blue tones, suggesting an outdoor setting. The overall style is typical of Japanese anime art, with detailed character designs and expressive poses.

「俺はもう誰もあきらめるつもりはねえんだ。
犠牲にするつもりも」

「解放しろ。
オレは謙虚で寛大だが、
卑劣な王には仕えない」

contents

Intermission 2 旅路の果て?p11

Chapter 7 きたりて、去るp14

Chapter 8 強さを知るp58

Chapter 9 生か、死かp99

Chapter 10 周到に謀るp142

Chapter 11 魔女と女王p189

Chapter 12 あなたが愛した人形 #2p227

Epilogue 相棒 #1p274



**Unbreakable
Machine-Doll**



12 Facing "Master's Doll" 機巧少女は傷つかない

MF文庫 J 08-12



機巧少女は傷つかない12 海冬レイジ

海冬レイジ 著

機巧少女は傷つかない12

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。日輪の手で一命を取り留めた雷真だが、目覚めた時夜々の命の刻限は過ぎており——「夜々はどうなった!?」「申し訳ありません。わたくし……夜々さんを……っ」一方、学院では王妃グローリアが新学院長に就任。学院は英国に掌握され、アスラを魔王にする謀略が動き出す。そんな中、姉を殺され復讐の念に駆られたロキは、一人反撃の機会をうかがっていた……！ 秘められし硝子の過去が明かされるとき、乙女たちは雪月花誕生の「意味」を知る——！ シンフォニック学園バトルアクション！

TVアニメ放送開始!

AT-Xにて 10月7日(月)20:30 から放送開始!

TOKYO MX、テレビ愛知、BS11でも放送開始予定!

10月放送予定!

シリーズ累計 127万部 (2013年9月現在)

「行くぞ夜々」

「はいっ!」

「雷真」

©2013 海冬レイジ・メディアファクトリー 機巧少女は傷つかない製作委員会

アニメ放送! 機巧少女は傷つかない 同時購入キャンペーン

文庫最新12巻+ライブコミックス最新7巻+ジーンメタリカ最新1巻のうち2冊を買ってスペシャルな「機巧少女」グッズを抽選でゲット!

特賞A 5名様 「機巧少女は傷つかない」特製時計 手作り時計のJHA時計作家ksによる「機巧少女は傷つかない」をイメージした「機巧少女特製時計!」を5名様にプレゼント!

特賞B 30名様 TVアニメ「機巧少女は傷つかない」キャストサイン入り台本

特賞C 200名様 「機巧少女は傷つかない」オリジナルグッズセット (缶バッジ、クリアファイル、ICカードステッカー)

【応募方法】対象商品(ライブコミックス「機巧少女は傷つかない」②(9月21日発売)、MF文庫J「機巧少女は傷つかない」12(9月25日発売)、ジーンコミックス「ジーンメタリカ」①(9月22日発売)の下部応募券を2枚切り取って、50円切手を貼ったハガキに貼ります。ハガキに必要事項(氏名、住所、年齢、電話番号)を記入の上、下記宛先までお送りください。※同タイトルの応募券を2枚貼っての応募はできません。【宛先】〒163-8691 東京都新宿区 郵便私箱39号 メディアファクトリー「機巧少女は傷つかない」同時購入キャンペーン事務局

【締め切り】2013年12月31日(当日消印有効)

【注意事項】当賞品の発送は2014年2月末頃を予定しております。当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。※お預かりした個人情報、本キャンペーンに関する連絡、抽選、賞品の発送にのみ使用し、それ以外の用途には一切使用いたしません。※応募券はコピー不可とさせていただきます。※不備があった場合抽選の対象外となります。ご注意ください。お問い合わせはメディアファクトリーカスタマーサポートへ。0570-002-001(月～金10:00～18:00)



機巧少女は傷つかない

Facing "Master's Doll"

不可侵の機械少女

海冬レイジ

Illustration
るろお

MF文庫
J

MF文庫
J
か-08-12



機巧少女は傷つかない12

海冬レイジ

マシンドール

機巧少女は傷つかない12

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。日輪の手で一命を取り留めた雷真だが、目覚めた時夜々の命の刻限は過ぎており——「夜々はどうなった!?」「申し訳ありません。わたくし……夜々さんを……っ」一方、学院では王妃グローリアが新学院長に就任。学院は英国に掌握され、アスラを魔王にする謀略が動き出す。そんな中、姉を殺され復讐の念に駆られたロキは、一人反撃の機会をうかがっていた……！ 秘められし硝子の過去が明かされるとき、乙女たちは雪月花誕生の『意味』を知る——！ シンフォニック学園バトルアクション！

MF文庫
J

12

Facing
"Master's
Doll"

機巧少女は
マシンドール

傷つかない
Unbreakable Machine-Heart

海冬レイシ
Mushroom
るるお



半透明の薄布がゆるく巻きつけられ、
標本のように眠っている。その乙女こそ――

夜々だった。



「だって！
夜々はそんなに
悪くないのに……
姉さまが
やかましすぎるんですっ」

「あんなお姉ちゃん、
いない方がよかった？」

意地悪をしてそう訊くと、
夜々は口をつぐみ、
うつむいてしまった。



「俺はもう誰もあきらめるつもりはねえんだ。
犠牲にするつもりも」

「解放しろ。
オレは謙虚で寛大だが、
卑劣な王には仕えない」



contents

Intermission 2	旅路の果て？p11
Chapter 7	きたりて、去るp14
Chapter 8	強さを知るp58
Chapter 9	生か、死かp99
Chapter 10	周到に謀るp142
Chapter 11	魔女と女王p189
Chapter 12	あなたが愛した人形 #2p227
Epilogue	相棒 #1p274



**Unbreakable
Machine-Doll**



Intermission 2

旅路の果て？



口絵・本文イラスト●るろお
編集●池本昌仁

「雷真……もう、覚悟を決めるときです……」
はかなく微笑^{ほほえ}んで、相棒は言った。

「今こそ、積年の想いを遂げさせてもらいます！」

雷真の上に飛び乗り、毛布をひっぺがし、下着をはぎ取ろうとする。
自分がどこにいるのかもわからないまま、雷真は毛布をつかんで抵抗する。

「ちょ——やめろバカ！ 俺は重傷^{おれ}だろ！ たぶん！」

「なら雷真は動かなくていいです。天井の染みでも数えててください」

「おまえ山賊——つて、前にもこんなことがあったような……？ とにかくやめろ！」

「もーっ、どうして拒否するんですか!? 夫の責任を果たしてください！」

「結婚した覚えはない！」

そう言った途端、夜々は黒目がちの瞳を潤ませ、両手で口を覆^{おお}った。

……いつもと違う反応だ。本当に傷ついているように見えて、雷真はあわてた。

「え!? いや、してないよな？ 記憶違い……じゃないよなっ？」

「ひどいです雷真……。いくら、夜々が用済みだからって……」

怒りで血が逆流する。

夜々が用済みだと？ そんな暴言、硝子にだって言わせはしない！

だが、夜々はしくしくと、当てこすりのように泣く。

「いいんです……知っているんです。雷真が夜々をほっぽって、日輪さんと浮気したこと……列車の中で、最後まで……」

「はあ!? そんなこと、してね——アレ!?」

そんな事実はないはずなのに、うつすら記憶のようなものが甦ってきた。

そう、あれはロンドンに向かう途中のこと。客室に日輪が現れて——

たたり、と嫌な汗が雷真の首筋を伝う。いや、まさか、俺に限って、そんな……。

なぜだか、肌のぬくもりを思い出す。トクン、トクン、と日輪の脈打つ鼓動や、指に集めた髪の手触り、ふにやりとやわらかな肉の感触——などなど。

いやー、いやいやー！ それはきちんと、衣服越しの感触だったはずだ。

だが、不思議なことに——日輪を近くに感じるのだ。

添い寝しているような。寄り添っているような。今も、となりにいるような。

(……そうだ、身固め！)

謎が解ける。列車のコンパートメントで、日輪は雷真を抱擁し、魔術防御を施してくれた。身固めは陰陽道の付与魔術で、身を護る効果があるという。

だから、彼女を近くに感じるのだらう。

雷真は胸を撫で下ろし、疑わしげな顔の相棒に言った。

「やっぱ俺はシロだ。ちゃんと思ひ出したぞ。いかがわしいことはしていない」

「うふふ……もちろん知っています……うふふ」

「嘘つけ！ おまえ、全然、信用してねえだろー」

「夜々は雷真を信じています。雷真はちゃんと、けだものだって」

夜々の瞳に輝きはなく、古井戸をのぞき込んだように真つ暗だ。前髪が一本、口に引つかかっている、鬼女めいた風貌になっている。

「日輪さんには出したんですから、当然、夜々もいただきます」

「出したって何だ!? つか、いただくって、どうやって……?」

「そんなの簡単ですよ?」

しゃらりと夜々は包丁を抜いた。……本当に、どこから取り出したのだろうか?

ふー、ふー、と荒い息をつきながら、切っ先を雷真の股間に向ける。

「直接、取り出せばいいんです♡」

「それは洒落になっ……俺が悪かったあああああ!」

——そこで、ようやく、目が醒めた。



Chapter 7 きたりて、去る



1

俺がいらないあいだ、夜々を護ってくれ——

ロンドンへ向かう車中、客室に現れた許婚に、雷真はそう願った。

日輪はうなずいてくれた。その代わり、恥じらいながら、こう言ったのだ。

「日輪は今ここで、一夜限りの妻になりとうございます」

「非常識すぎる——つか、結婚は迫らねえって言っただけだろ！」

「行きずりの女と結婚を一緒にしないでください。このくらい殿方のたしなみです！」

至近距離から雷真を見上げる。湯気が出そうなくらい、顔が赤い。

可憐だ。憎からず想う気持ちもあるし、夜々を護ってもらいたい、という打算もある。邪険にはできず、雷真はすつとほけることにした。

「あのな、日輪。おまえの言ってること、ガキの俺にはよくわからな——」

「雷真さまのこ、こ、ここっ、子種をくださいませ！」

「はつきり言うな！ 絶対だめだ！」

結局、雷真は日輪を突っぱねた。日輪の眼に、みるみる涙の玉が盛り上がる。

「やっぱり……雷真さまのお心に……日輪の居場所なんて……っ」

「そうじゃない。そうじゃなくてさ」

雷真はあごをしゃくって、扉の方を示した。

「あ——」

どうやら日輪も、彼女の存在を思い出したようだ。

扉の向こうに小紫がいるのだ。盗み聞きしているのは間違いない。

雷真は日輪の肩をぼんぼんと叩き、諭すように言った。

「おまえは俺みたいなろくでなしの妻になりたいと言ってくれた。その気持ちは嬉しいが、今はどうしてやることもできない。少なくとも、夜々を取り戻すまでは」

日輪はもう、重ねて迫るようなことはしなかった。ただ清らかに微笑む。

「そのときをお待ちしております。——どうか、ご無事で」

そうして日輪は式神〈間土里〉を召喚し、名残惜しそくに列車を離れた——

というのが真相なのだが、雷真の深層心理には夜々への引け目があったらしい。夢の中で去勢されそうになり、雷真は飛び起きた。

「よせっ、夜々！」

突き出した手が、むなしく虚空をかく。

無闇に広く、薄暗い空間が広がっていた。天井は汚れたガラスドームで、重厚な鉄骨が支えている。元は複合的な商業施設だったようで、店舗や劇場らしきものが並んでいるが、いずれも閉鎖され、ゴースタウンさながらだ。

周辺の床には呪言が書き込まれ、魔法円が構築されていた。

黒髪の乙女が呪式を書き込んでいる。一瞬、見間違うが、それは相棒ではない。

「雷真さま！ お気付きになられたのですねっ？」

「夜々じゃなかった……のか」

「ひうつ!? わ、日輪ですみませっ……ぐすっ」

「わ、悪い！ 感謝してる！ おまえが助けてくれた……んだろ？」

記憶が蘇ってくる。硝子を連れ戻すため、バツキングダム宮殿に突入した。その地下深く、結社の拠点らしき洞穴で、硝子に拒絶され、雲雀に斬られた。

意識を失うとき、揺めく闇に包まれた。あれは瘴気の塊であり、つまりは日輪の魔術だったのだ。察するに、転移魔術の式神だった……らしい。

付近に戦闘の気配はない。戦いの結末はどうなったのだろうか？

雷真のすぐわきに、人形の姉妹が寝かされていた。小紫は姉にしがみつき、眠っているだけのように見える。一方、いろいろの胸には血の染みが広がっていた。

雷真は飛び起き、いろいろの着物を左右に開いた。

「いけませんっ、雷真さま！」



日輪の白い手が伸びてきて、雷真の手首をきつく握りしめた。
 「た、確かにわたくし、おまえさんの百人や二百人、気にしないと申しましたけれど」
 「大奥か！ それは気にしろ！」

「わたくしの見ている前で睡眠姦だなんて……つ」

「おまえは夜々か！ いいから、傷を診てくれ！」

いろいろの胸骨を示す。乳房のあいだに切り傷が走っていた。

「……どう思う、これ」

「きちんと技師に見せなければ、断言はできませんが……」

日輪も同じ見解か——出血量のわりに、軽傷に見えるのだ。魔術回路が碎けたわけでもなく、乱れていたはずの脈拍が落ち着いている。

かえって、薄気味悪い。小紫は本当に無傷のようだが、こちらも安心できない。

「ところで、ここはどこだ？ パカ王子はどうした？」

「ここはロンドン南郊、バックinghamから十哩ほど離れた場所です。周辺に敵兵の気配がなく、廃された場所のようでしたので、ひとまず転移で身を隠しました」

「……そうか。俺たち抱えて逃げ出すのは骨だったよな。ありがとよ」

「そんな……。それと、おたずねの黒太子は敗走した……と思われます」

「敗走……!? あのパカ王子、かませがどうか言つといて、自分が負けてりや世話ねえぞ。つか、そんなあつさり負けるようには——」

そう、敗走ではない。彼自身が言っていた。撤退には相應の代償を求めろと。

思いつきで行動しているように見えるが、本当は狡猾で、周到だ。あの男はいつも必ず生き延びて、次に会ったときには前より大きな力を得ていた。

（あいつが逃げちまって、硝子さんはどうなったんだ？ 早く連れ戻さないと……）

何げなくふところの手をやって、はつとした。

「……硝子さんの煙管がねえ」

落とした？ いつ？ どこで？

理由のわからない不安が、雷真の胸を満たした。なぜだか、とても大事な……致命的な過ちを犯した気がする。焦燥に駆られるまま、急いで立ち上がる。

「さ……捜さねえと——！」

力んだ途端、ぱりつと胸の傷が開き、たちまち鮮血が包帯を染めた。

「どうか安静に！ 失せ物でしたら、わたくしが捜します！」

「くそ……この胸……どうなってる……？」

「深手ですつ。ただ、その、少し不可解ではあるのですが……」

「……思ったより浅かった……か？」

日輪は曖昧にうなずいた。自信が持てないようだ。雷真は苦痛に顔をしかめつつ、

「確認しときたいんだがよ……おまえの（身固め）が、浅くしてくれたのか？」

「……いいえ。身固めは（護り神）——守護の式神を愚かせるものです。わたくしが雷真

さまに憑けたのは、わたくしを呼び寄せるための、間土里でした」

つまり、日輪が救援にこられたのも、間土里の転移ということだ。

ではなぜ、傷が浅いのか。雲雀の腕ならば、雷真を二分割できたはずだが。

「勝手なことをして、すみません……ですが、もとより御許に馳せ参じ、ともに戦う覚悟でした。ともに戦って、そして——ともに死のうと」

「おまえ……何で、俺なんかのために……そこまで」

「なんか、などとは言わせません。日輪の心はもう、雷真さまの妻でおります！」

まったく視線に耐えかねて、雷真は目を伏せた。

「……俺はこの先、赤羽天全を殺す。血をわけた兄貴を殺すんだ。おまえはそんな外道の妻になりたいのか？」

「はい」

「おい……少しは、迷えよ」

日輪はたぶん、重大性がわかっていないのだ。肉親を殺すという意味が。

「逆に問います。雷真さまが心より大切に想っている誰かが、やむにやまれぬ事情で人道に背こうとしているとき、その者をお見捨てになりますか？」

「——」

「もうおまえなど知らぬと言って、絶交なさいますか？」

たとえばシャルが時計塔を壊したとき、雷真はシャルを見捨てたか？

「良人と見込んだ方が、その手を血で染めようと言うのです。ならば、わたくしもともに、この手を血で染めようございます」

——どうやら、覚悟が据わっていたのは、日輪の方だったようだ。

「そのつもり……でしたのに……っ」

日輪はいきなりその場に手を突いて、ひたいを床に押しつけた。

「申し訳ありません。わたくし……わたくし……夜々さんを護りきれず……!」

「……夜々がどうかしたのか？　つか、今……何日だ？」

ぞつとする。雷真は傷の痛みも忘れ、ガラスの天井を振り仰いだ。

「この曇り空……夜じやねえ！　昼なんだろう!?　あれから何日経った!」

雷真の怒声に驚き、小紫が目を覚ます。だが、氣遣ってやる余裕はない。

「夜々はとうなった！　俺の相棒は!」

日輪は答えず、ひれ伏しているだけだ。雷真は焦れて、建物を飛び出そうとした。激痛が脳髄を駆けのぼり、たまたま床に倒れ込む。

「ぐおっ……くそ……夜々……っ!」

「どうか、ご無理をなさらず……既に翌日です……もう、急ぐ必要はありません」

「どういう意味だよ……!」

「……それは、雷真さまが直に、その目でお確かめになった方がよろしいかと思えます。ですから、これより、夜々さんのもとへお送りします」

そつと魔法円を示す。そうか——これは転移のための準備だったのか。

行きのゴタゴタで線路が破壊され、鉄道はアテにならない。日輪がきてくれないければ、雷真にはまともな帰還の手段すらなかった。

「先ほどの洞穴から離脱する際、魔力をかなり使ってしまった……わたくしにはもう、雷真さまを機巧都市に飛ばすほどの魔力が残っておりません。大変心苦しいのですが……雷真さまのお力を借りまして、この〈祈祷式陣〉を起動します」

なるほど。儀式であれば、雷真も協力できる。

「わたくしと雷真さまの余力、距離と体重から確度を見積もりましたところ、お一人ならば、安全にお戻りになります。本当に申し訳ありませんが、雪月花はここに置いて行つていただくしか……も、もちろん、わたくしがこの身に代えまして！」

「ふざけんな。いろりと小紫は連れてくし、おまえも一緒に帰るんだ」

雷真はちらり、と小紫を見た。寝起きだが、状況はおおよそ察しているらしい。不安げな小紫の瞳は、捨てられた仔犬を思わせて、いたいけだ。

「心配すんな小紫。俺はもう誰も置いて行かぬえ」

優しく声をかけ、小紫の銀剣をそつと引き抜く。

「ら、雷真？ 何するつもりっ？」

震える声を聞きながら、冷たい刃を己の右腕に当てた。

肩から手の甲まで、複雑な刺青が施されている。

グリゼルダが施してくれた〈アリアドネの糸〉。魔力循環を制御する一種の〈回路〉であり、出力の半分をあきらめる代わりに、制御を容易にしてくれる。これがあればこそ、未熟な雷真でも紅翼陣を操ることができた。

それを今、捨てる。

雷真は腕に刃を立て、ひと思いに肉をこそぎ落とした。

小紫と日輪が「ひつ」と悲鳴をあげる。どばつと血があふれ、床に血だまりができる。ただでさえ低い血圧が下がり、目が回った。

今まで通り魔力を集中し、紅翼陣を使おうと試みても、上手くいかない。

雷真は満足して、血振りした銀剣を小紫に返した。

「さて……それじゃ……戻るか」

「無茶です雷真さま！ そんな傷で……どうして、そのようなことを!?」

「まあ、聞け。さっきの計算でいくと、二倍の力を出せば、もう一人余計に運べる。そこから倍ほど気張つたら——ほら、二人ぶん余裕ができる。計算びつたりだ」

血でぬめる腕をつかみ、ぐつと力を込める。

「〈アリアドネの糸〉を壊した。今なら、本物の紅翼陣ができる」

「ですが……以前、それでお命を危うくしたと、シャルロットさまが……！」

「あいつ、ほんとおしゃべりだな」

苦笑してしまふ。雷真の知らないところで、そんな話までしていたのか。

かつて、^{マルコフ・ロウ}「絶対王権」の歌が機巧都市に満ちたとき——エドマンドを倒すには、それを上回る支配力が必要だった。実際に戦う前に、試し撃ちのつもりでひねり出した紅翼陣はしかし、雷真の魔力循環系を乱し、大出血を招いた。

「アリアドネには世話になったが、これから先は自力で歩いて行くしかない。それに、俺はもう誰もあきらめるつもりはねえんだ。犠牲にするつもりも」

「……すみません……わたくしが、至らぬばかりに」

「あんな、日輪。確かに俺は頭にきてる。けど、おまえに向けた怒りじゃない。自分の無力が腹立たしいだけだ。だから、謝るな。そして、一緒に帰ろう」

血まみれの手を差し出す。日輪は表情を歪め、すがるように、その手を取った。

「小紫、悪いがいろりを担いでくれ」

「う、うん！」

不安げだった顔が引き締まる。小紫はすぐに行動し、いろりを背負った。

雷真は印を結んで氣息を整え、全身に魔力を行き渡らせる。

……大丈夫。できる。師の杖に助けられ、歩き方は覚えたはずだ。

（紅翼陣に三つの関門あり——）

常人に十倍する魔力を蓄え、重ねること。それを束ねて、普段通りに扱うこと。そして、その大魔力を極限にまでしぼり込み、糸としてつむぎ出すこと。

天に願う。俺に才能などというものがあるのなら、今こそ芽吹いてくれ。

誰もあきらめなくていい——それだけの力をくれ！

あの背中に追いつけるだけの、紅翼を——

となりで同じように印を組み、日輪もなけなしの魔力を高めていく。

やがて想いがひとつに重なり、雷真の両手から魔力の糸が放たれた。

九本——いや、十本！

魔法円が発光し、真昼の屋外のように明るくなる。大地を揺さぶるほどの膨大な魔力。暴れる力を日輪が制御し、特大の（間土里）を召喚した。

雷真、日輪、小紫、そしていろりの四人が、闇の中に引きずり込まれる。

（夜々、今行く！）

となりすら見えない暗闇の中、雷真はただひたすら、相棒を想った。

2

学院陥落から一夜明けて、機巧都市に表向きに平穏が戻りつつあった。

軍の迅速な事後処理により、人的・物的被害はただちに報告され、適切に処理された。学生たちは当面の危機を脱したことを喜んでいたり、今後は軍の警護がつくことになり、結社の再襲撃を警戒する必要もなくなった。近隣住民にとっても歓迎すべき事態であり、市街はすっかり祝祭日のような雰囲気だった。

だが、新たな学生総代——アスラは憂い顔だった。学内はどこもかしこも軍人だらけで、軍の自動人形が巡回している。抵抗する者は誰もいない。不満に思う者は、既に学院を自主的に去った。

(……君の姿も見かけないな、剣帝)

屋上での戦いを思い出し、アスラの気分がますます減入る。

(君は彼女のことを知っただろうか。遠からず、耳に入るだろうが……)

「だめだな、こいつら。ぴくりとも反応しねえ」

物騒な声が聞こえてきて、アスラはそちらを振り向いた。

いつしか、医学部の裏庭に差し掛かっている。金網を張り合わせた簡素な檻が設けられ、中に十数頭の獣——自動人形ガルの群れが閉じ込められていた。

学生が二人、がしがしや金網を蹴っている。

「おい、起きろ。肉だぞー、肉！」

「……無反応だな。振り向きもしない」

一人が抱えたトレーの上には、ローストした肉の塊がのせられている。肉はアスラの鼻にも香ばしいが、犬たちは突つ伏しているだけだ。

「——彼ら、食事を摂ろうとしないのか？」

思わず、声をかけてしまう。

近付いてみると、顔見知りだった。先日の学内闘争でアスラ側についた者たちだ。

「こんにちは、アスラさん。(多重なる騒音)の犬ですよ」

「昨日も食わなかったんだ。どうも、気落ちしちまってるみたいで」

「休眠状態かもしれません。使い手がもう……いないので」

沈黙が訪れる。学生に死者を出したのは、軍と学院、両方にとって痛恨の極みだ。

「あるいは、環境の激変に適応できないのかもしれませんが。何か飼い主の匂いをするもの、遺品などがあれば、と思います」

「わかった。グリフォン女子寮の跡地を探させる。……すまないが、このまま面倒を見てやって欲しい。後日、学生会から謝礼を出そう」

それだけ言って、足早にその場を離れる。

(学生会だと？ 僕はどの口で、そんなことを……！)

罪悪感でめまいがする。フレイを死に至らしめたのは、アスラではない。だが、学生が争うよう仕向けたのは、アスラだ。アスラが(赤と白)の抗争を仕掛けなければ……。

確信が揺らぐ。果たして自分は、正しい選択をしたのか？

(……甘えるな！ 迷うな！)

すべてが遅い。今さら迷って立ち止まれば、犠牲者が報われない。世界をよりよい方向に導くためには、進み続けるしかない。

だが、これでは……同じではないか？

残党狩りと称し、アスラの父母や姉妹を殺した(敵)の理屈と——

「浮かぬ顔ですね、学生総代」

優しい声をかけられ、アスラは我に返った。

通りの向こうから、幕僚三名を侍らせて、美貌の女将軍が歩いてくる。

アスラは胸に手を当て、忠誠を誓う騎士のように、ひざまずいた。

「ご機嫌麗しく存じます。グローリア——新学院院长」

「そなたは迷っているようですね。これからが肝要だというのに」

鋭い。アスラの動揺を見抜き、釘を刺すように言う。

「城壁は既になく、設備の大半が失われ、反対派の不穏動きが目につきます。急ぎ復旧し、不穏分子の反抗意欲を殺ぐ——そのためには学生の協力が不可欠です」

「……はい、承知しております」

「午後の会議は遅れぬように。防衛構想の行います。ゲートの代替になるような、堅固なシステムを立ち上げたい」

「防衛——ここには師団の方々がいらつしやいますし、このままでも……」

「そなたとも思えぬ言葉よ。指導者たる者、もつと先を見据えねばなりません。いつまでも師団をここに置くわけにはいかぬ。ここは大陸から遠い」

——それで、何の不都合がある？

俊才のアスラには、その答えが直観できた。大陸を包む戦火のビジョンが脳裏をよぎる。だが、気付きかけたことに、気付かなかったふりをする。

「合わせて、内政の詰めも要ります。当面、国政をこちらに移すのですからね」

「首都機能の一部を？ 殿下は、帝都にはお戻りにならないのですか？」

グローリアは語らなかつた。ロンドンで問題が起つたか、学院を動かたくない理由があるか、あるいはその両方か。少なくとも、ラザフォードの《極秘研究》とやらを手中にするまでは、王妃がここを離れることはなさそうだ。

「元学院院长——魔書レメゲトンは今、どうなっているのでしょうか？」

そう問うと、グローリアは笑顔をやがめ、憎らげに言った。

「封じてはありますが、取り上げてはいません。調べさせたところ、あれは協会と学院の協定のもと、政治的に預けられたもの。法的には手が出せぬ」

「では、とても安全とは言えません。ラザフォード氏の身柄はどちらに？」

「控えなさい。それは軍の機密、学生が知るべきことですか？」

「僕は学生総代、学生の安全を確認する責務があります。氏が自由であれば、必ずや学院の脅威となりましょう。氏は十九世紀最強と謳われた、偉大なる先達です」

「そうでしたね。しかし、《二十世紀最強》ではない」

自信たっぷりに、グローリアは微笑んだ。

「《終末の書》も彼自身も要塞級で拘束されています。教授総代パーシヴァルも同様に。そして今や、彼らの味方は一人としていません。御覧なさい」

細いあごをしゃくって、自らの背後を示す。

幕僚たちの向こうに、魔術師にも負けない凄^{すご}みをまとう、秘書官アヴリルが立っていた。サーベルを腰からぶら下げ、車椅子^{いす}を押している。

「ラザフォードを監視していた武官です。彼女の働きにより、ラザフォードの悪事は筒抜け——擁護派が何と言おうと、正論で切り崩せます」

かねてより、ラザフォードの身辺は探っていたというわけか……。

アスラは目を見張った。アヴリルがグローリアの部下だったことに、ではない。秘書官が押す車椅子に、見知った乙女が座っていたから。

純白の清楚なドレスに身を包み、薄く化粧している。かつて地味と評された容姿は、着飾ることでその意味を変え、清潔で楚楚とした魅力にあふれていた。

お嬢さまふうの装束に本人は居心地が悪そうだ。戸惑った顔できよろきよろしている。姉を失ったばかりで、明らかに血色が悪い。昨日から一睡もしていないだろう。

「彼女は、シャルロット・ブリューの……」

「ええ、妹アンリエットです。わたくしのもとで養育することになりました」

「——ですが、彼女はブリュー家の者です」

「もちろん知っていますよ。ウィルリントン伯——エドガー・ブリューとわたくしは旧知の間柄、友と言ってもよいでしょう。友人の遺志を受け継ぎ、わたくしが淑女^{しゆふ}として教育するのです。何の不思議がありますか？」

グローリアは目を細め、可愛いベツト^{かわい}を見るようにアンリを見た。

「魔剣^{マジム}はやはりブリューの者が扱うべきでしょう。あの気難しい竜も、彼女なら——」

「ですが、その……彼女自身は納得したのですか？」

「するでしょう。わたくしは姉を捜してやると言いました」

エドガーを始末したのなら、グローリアはアンリにとって、父と姉、両方の仇^{かたき}となる。そのアンリを手の内に置こうというのか……。恐るべき胆力だが、思い返せば、この自分^{みづかみ}。

——英国を恨んでもおかしくない者を重用している。

不安げなアンリを見ているうち、アスラの胃が重たくなった。

姉も父も奪われ、仇の手で利用され、彼女はこの先、どんな人生を歩むのだろう。あるいは改造されるのか。王妃お抱えの研究機関（GLR）には、危険な精神操作や人体改造の秘術があると、まことしやかに噂^{うわさ}されている。

ヘイゼルやアスラと同じ、魔女の手駒にされるのだろうか。

「顔を上げなさい、アスラ」

もったいなくも王妃自ら、アスラのおごに手を触れ、顔を上げさせる。

「天はそなたを選んだのです。シユメル王シヤラタの血を継ぐ最後の子として」

アスラの胸中に逆巻く嵐を知ってか知らずか、グローリアは甘ったるく続けた。

「そなたの怒りと悲しみ、想像するにあまりある。ですが、そなたは憎しみを敵ではなく、世界の矛盾に向けました。わたくしが愛するのはその高潔な魂です。罪に染まってはなりません。魔城^{まじやう}と化した学院も、同輩の死も、そなたが気に病むことではない」

「……氣に病んではおりません。そのような弱い心は捨てました」
 「ならば、よい。研鑽を怠らぬことです。そなたは間もなく、魔王になるのですからね。
 その晩には、真に平和な世界を、安寧の時代を築きましょう。ともに手を携えて」

「御名にかけて。グローリア殿下」

「ふ……その呼び名、改めてもよい頃合いでしょう。以後は陛下と呼びなさい」

アスラだけではなく、幕僚たちも、アヴリルも、ぎよつとした様子でグローリアを見た。
 アンリは聞こえていかなかったらしく、びくつとして皆を見回した。

「この国は女が統べてこそ、上手く回るのでしょ」

佩剣ストラトキヤスターに手をのばし、満足げに撫でさする。

「いよいよ新たな時代がくる。この変化、もはや止めることはできません」

ほほ、と機嫌よく笑い声をあげる。その美しい横顔が、アスラの畏怖を誘った。
 首筋が寒い。学院にきて初めて、故郷の熱気を恋しく思った。

3

「真くん！ 雷真くん！ しっかりして！」

誰かに揺さぶられ、思考を取り戻す。気がつけば、転移の魔術は解けていて、雷真は血まみれで座り込んでいた。

季節外れの夏服に白衣を羽織っただけの、薄着の少女が目の前にいる。

「……って、イオ？ おまえ、イオだよな？ 何でここに——戻ってきたのか！」

イオネラは沈んだ表情で、しかし、かろうじて微笑んだ。

「うん。元氣……してた？」

「おまえが元氣ねえぞ。どうした？ つか、ここは……俺はどこに出たんだ？」

倉庫だろうか。無駄に天井が広く、がらんとした殺風景。潮と煤煙が混じったような、懐かしい香りがする。機巧都市のどこか……らしい。

雷真は自分の背中に手を回し、肩のあたりをまさぐった。——破れていない。土壇場の紅翼陣は、きっちり成功しようだ。

生まれて初めて、十本の糸を操り——十全の魔性を発揮した。

だが、達成の余韻に浸っている暇はなかった。

「雷真くん……ごめん」

今にも消え入りそうな声で、イオネラがつぶやく。

「駄目だったの……私の技術じゃ……っ」

「……夜々……どこだ！」

イオネラを押しわけ、行く先もわからないまま、駆け出そうとする。

倉庫の突き当たり、入り口とは反対側に、地下に降りる階段が見える。夜々のビジョンが一瞬浮かび、直感的に、その下にいるのだと察した。

だが、イオネラとそっくり同じ顔の少女が立ちほだかり、進路を塞ぐ。彼女にはこりともせず、機械的に一礼した。

「もうお忘れでしょうが、イオネラさまの自動人形エヴァンジェリンです」

「……忘れてねえよ、エヴァ。顔も、名前も」

魔術回路《絶対王権》と、魔力ブースト機構《無限連鎖反応》を搭載した人形だ。どうやら、通してくれるつもりはない。雷真はイオネラを振り向いて、怒鳴った。

「おい！ 夜々に会わせてくれてもいいだろ！」

「まだ、だめ……！」

「なぜだ!?」

「雷真くんに、その準備ができてないからだよ！」

叫び声がこだまする。その反響が消えると、倉庫の中に静寂が満ちた。

雷真は少し冷静になり、ようやく、あたりに目を向けた。

がらんとした空間に、飾り気ゼロの直線的なテーブルが置かれている。粗末なベッドが二つあり、力尽きた日輪と、眠ったままのいろりが寝かされていた。姉のかたわらでは、泣きべそをかいた小紫が、悲しげにこちらを見ている。

——つらいのは、雷真だけではない。

雷真は気を落ち着けて、改めてイオネラを振り向いた。

「……話してくれ」

雷真の変化が伝わったのか、イオネラはうなずき、こんなふうに関心した。

「落ち着いて聞いてね。夜々ちゃんは、まだ死んでない」

「あ……？ けどおまえ今、『駄目だった』って」

「おかしいな希望を持たないように、そう言ったの。——エヴァ、雷真くんの処置を」

まだ出血が続く右腕と胸を、エヴァは麻酔なしで縫合し始めた。

「痛くて耐えられないようでしたら、ご遠慮なく我慢してください」

「優しくする気がないなら言うな。……イオ、続きを」

「夜々ちゃんのこと、雷真くんはどこまで知ってる？」

「何も知らない。だが、多少は……察しがついている」

「夜々ちゃんが壊れた原因に、心当たりは？」

「ある。さつき——もう昨日なのか——硝子さんに言われたんだ。このあいだから俺は立って歩ける体だったのか、どうして死なずに済んだのか、ってさ」

言われて思い返せば、シャルの父エドガーが流星を降らせた夜も、ライコネンの火焔を浴びたときも、戦闘直後の痛みは酷いものだった。

「骨を折られたと思ったが、寝て起きたら打ち身になってた。そんなの考えられねえ……から、もともと折れてなかったんだと思ってた。俺には紅翼陣がある。魔力の集中で身を護るなんて、よくやるしさ」

「魔術抵抗とかだね。合理的推論だと思うよ。それで？」

「だが、実際は重傷を負っていたのなら……そこから回復したのなら……」
 「夜々ちゃんが、《生命》をくれた？」

やはり、そうなのか。イオネラは語調をやわらげ、いたわるように言った。
 「自分を責める必要はないよ。順番は逆——最初に奪ったのは夜々ちゃんの方だから。君から奪った命を、ちよつぱり返しただけ」

——そう言えば、この学院にきて間もない頃は、逆に傷の治りが遅かった。

「使い手の命を奪う人形は話に聞か……与えるなんて、できるのか？」

「わからない。人形が魔力を放つなんて普通は無理……だけど、魔術の世界に《絶対》はないから。ヘモグロビンが酸素をつかむみたいな理屈で、できるのかもしれない」

「こつちから、夜々に命をくれてやることはできないか？」

イオネラは涙ぐみ、うつむいた。

「ごめん……無理なの……だって、私には……やり方がわからない！」

細い肩が小刻みに震える。今だけは、天才でも教授でもなく、ただの少女に見えた。

「……金剛力の回路が弾け飛んだのは、なぜなんだ」

「それがはつきりしないの……超過負荷だとは思うけど……」

「使い過ぎたってことか？」

「生命力の供給を断ったせいで、動作不良を起こした……んだと思う。人間で言うところの動脈硬化みたいな……。回路本来の柔軟性が失われて、ますます傷む悪循環……夜々ちゃんに

は痛覚があるから、すごく痛かったと……思う」

雷真は自分自身を殴り飛ばしたくなった。

なぜ気付いてやれなかった？ 夜々が隠していた痛みに！

「俺に返す余力があるなら、自分のために使ってくれりゃよかったのに……！」

「……そんな器用に、思い通りに使えるものじゃないんだと思う。雷真くん、これまでに見たことあるよね？ 夜々ちゃんの、『どうにもならない』力の片鱗」

雷真の脳裏に、鮮烈な映像が浮かび上がった。

「夜々の——角か——」

ひたいにあれが輝くとき、夜々は普段に数倍する性能を発揮した。だが、自分の意志で出し入れできるものではなく、勝手に発現するものだった。

「あれはたぶん、君の生命力を凝集したもの……だと思ふ。最後に見たのはいつ？」

「はつきり見たのは確か……バカ王子が、機巧都市をタイダロスで襲ったときだ」

「私を助けてくれた、あのときだね。そのあたりで、夜々ちゃんも気付いたんじゃないかな。《角》の力は雷真くんの命だって。使ってしまうと、また奪うことになる。これ以上、奪っちゃいけない……って。だけど、《角》の成長は止まらず、どんどん次を要求する。

雷真くんから調達できないなら、取れるところから取るしか……ない」

——夜々自身から、ということか。

「夜々ちゃんは禁忌人形……生きている部分が……あるからね」

本人の寿命を縮めた原因は、こちらか。回路の破損とは微妙にずれている。
雷真の背後で、小紫が震え出すのがわかった。イオネラはつらそうに小紫を見つめ、
「夜々ちゃんはずっと、角と戦っていた……んだと思う。それはたぶん、設計者の意図と
は違うこと……」。花柳斎先生、余計な戦いをするなつて、言わなかった？」

「……言っていた」

つい先日、致命された。だが、雷真は戦った。よりにもよつて、魔王と……！

俺はどこまで馬鹿なんだ。自分のことばかり考えていたから——だから、夜々の痛苦に
気付いてやれなくて——自分勝手に夜々を利用して、その挙げ句がこれじゃねえか！

心の平衡を欠く雷真を、刺すような痛みが襲った。

「——つてえ！」

雷真の胸の傷を、エヴァが小針でぶすぶすと、無茶苦茶に縫っていた。

「手がすべりました。この程度の痛みで泣くとは、意外とだらしのない男ですね」

「……涙くらい出るだろ。条件反射だ」

彼女なりの氣遣いだったのか。エヴァはふつと優しく笑つて、立ち上がった。

「そういうことにしておきましょう。イオネラさま、処置は終わりました」

「……ありがと。それじゃ、雷真くん……夜々ちゃんに会わせてあげる」

十分な〈心の準備〉はさせた、ということだ。

イオネラが地下への階段を降り始める。雷真もその後に続き、バニラのように甘い香り

の漂う、不思議な部屋に通された。用途のわからない器材や本棚、工具が並べられ、中央
に布をかけられた箱……のようなものが鎮座している。

イオネラが布をはぎ取る。その下にあつたのは円筒形の水槽だ。材質はガラスだろうか。
淡い光が下からとまり、中のものを照らしている。

半透明の薄布がゆるく巻きつけられ、標本のように眠っている。その乙女こそ——

夜々だった。

高い天井のそのまた向こうで、巨大な魔力が膨れ上がった。

硝子は八角形の式盤をにらみ、魔力の反応を確かめていた。式盤は占術に用いる魔具だ
が、確かな技術で用いる場合、検知器に近い確実性がある。

（回路の反応がなかった……。まさか、あれを失くしたの、坊や……？）

「——どうやら、上にいたのは雷真ですね。いざなぎのお姫さまも一緒に通つていいが、彫りは浅く、

細面。化粧をすれば、酔客は口笛を吹いて喜ぶだろう——

そんな現実逃避めいた空想をしながら、硝子は長椅子に腰掛けている。

天井にまで宗教画が描かれた、壮麗な礼拝堂だ。ただし、バックinghamの地下ではない。まったく別の場所だというのに、同じように豪華な広間が造られていた。

上のフロアで魔力の放出がやみ、不自然な静寂が訪れた。

「ほう……消えよったわえ。わしらを追うてきたわけではないの」

黄金の髪、金の瞳のアストリッドが笑う。

小悪魔めいた美貌がまぶしい。見た目は一五そこそこの小娘だが、硝子よりずっと長い歳月を生きた魔女だ。修復中の左腕は瘡氣をまとい、金属的な光沢を放っている。こちらはこぶし大の水晶玉を持ち、地上の様子を観察していた。

「あれがイザナギの姫か……魔性は祖母譲りかの。この広いロンドン市で、敢えてここを避難場所を選ぶとは。知らぬ間に、わしの瘡氣を感じたか」

くすくす笑う。可愛らしい仕草と、醜惡な内面の落差に、硝子は吐き氣を覚えた。

そして、同時に懸念も覚える。この魔女——極東の事情に詳しくないか？

魔女はいざなぎ流を知っている。思い返せば、日輪は結社の標的となったこともある。

あのとき、日本では〈お館〉が襲撃されたという。

抱いた疑いはおくびにも出さず、硝子は普段通りの口調で訊いた。

「うかがっておりますでしたわね。ここはどこですの、金薔薇さま？」

「シドナムという土地よ。上の建物は水晶宮。万博の後に移設された——のじゃが、今や往時の美しさはなく、さびれて見る影もない。軍に払い下げが決まっておる」

軍事施設として再利用するつもりらしい。いや、移設時から既に、その計画があつたのか。だからこそ、地下に結社の拠点（しん）が築いてある。

「いわくつきの物件なのね。私たち、いつまでここにいればよろしいの？」

「じきに迎えがくる。ぬしが大戦の引き金を引く日も間もなく——楽しみじゃの？」

「そうね。とても楽しみよ」

平然と答える。そんな硝子の真後ろへ、アストリッドは一瞬で位置を変えた。

雲雀も察知できなかったようで、わずかに目を見張った。アストリッドは後ろから顔を寄せ、姉に甘える童女のように、ささやきかける。

「のう、花柳（かやう）殿。ぬしの人形、半日もこの上にあつたのじゃ。昨日バックinghamで拾う手もあつた。その気になれば、取り戻せたのではないかえ？」

「……あれはもういらないわ。言うことをきかない人形なんて、木偶（でく）にも劣るもの」

「ふふ……その意見には賛同するがの」

「私の戦力なら、お気遣いなく。腕の立つ用心棒もいるのだし。逃走先が落ち着き次第、新しい人形を造るといたしましょう。引き金はその子に引かせるわ」

「建造には、どのくらいかかる？」

「そうね、半年もあれば」

「待てぬ」

「……では、急ぎましょう。四か月ほど」

「到底、待てぬ」

アストリッドは笑っていたが、声はひどく冷淡だった。

「開戦は年明け早々。そして冬が終わる前——魔蝕の年が終わる前に、趨勢を決める」

「……あわただしいこと。そんな簡単に、世界大戦が終わるかしら？」

「教父の予見は知っておろう？ 玉座のかたわらに、神性機巧はある。学者どもはそれを魔王の玉座と言った。銀薔薇はこの英国の玉座と思うておる。じゃが、わしの考えは違う。神性機巧は神の御業ぞ？ ならば、当然——」

甘く、猛毒を含んだ言葉をつぶやく。

「この世を統べる覇者にこそ、相応しい」

「世界を手にした者が……神性機巧も手にすると？」

アストリッドは口角を上げた。肯定したも同然の態度に、硝子は絶句する。

（順序があべこべだわ。列強は大戦に備え、神性機巧を欲しているのに……）

この魔女は、凡人とは見えている世界が違うようだ。世界大戦で戦果を上げたいがゆえに神性機巧を欲する——なんていう列強の高官たちは、魔女にとっては敵視の対象でしかない。それは利用すべき道具、あるいは食すべき餌なのだろう。

魔女は世界大戦すら利用して、神性機巧を得ようと言うのか。

息がかかるほどの距離から、アストリッドがささやく。

「そう身構えるな。制限さえ守れば、暗殺の手段は問わぬ。好きにやればよい」

「……気がよろしいのね。試すようなことをおっしゃるくせに」

「わしはぬしを気に入っておるのよ。ぬしが抱えた闇は、妖しく、美しい」

硝子から離れ、ステップを踏むような足取りで、獅子人形の方に戻っていく。

「ああ、早う迎えがこぬかの。この数日で、わしも瘴氣を使い果たした……」

忌まじまじげに、修復中の左腕を眺める。昨日より黒の面積が小さくなっている。修復の済んだ部分が増えたということだが、そのぶん瘴氣を減じているらしい。

眼帯のレンズ越しに確認すると、再生された部位は完全に（人体）だった。硝子も精瑠を用いれば、肉体を再現することはできるし、治療魔術は細胞分裂を活発化させる。だが、完全な複製を可能とするこの魔術、とても普通とは思えない。

「教会へ帰還し、補充せねばの。今回は百人、（羊）をつぶさねばならぬ」

さすがの硝子も、勝手に収縮する瞳孔だけは、制御できなかった。

単純な変換法則だ。瘴氣で肉が精製できるのなら、瘴氣を精製する材料は——

思わずほとばしりそうになる殺氣を、突然の揺れがささぎった。

結果が軋みをあげる。尋常ならざる事態に、アストリッドの眉がびくりと動いた。

「セトの守性結界が貫かれた——ラザフォードか？」

「おあいにく。わたくしですわよ」
という声とともに、すんと床が抜けた。本当に、なくなった。ぽつかりとあいた大穴の底から、おとおお……、とうめき声が響いてくる。

奈落の底から黒い人影が浮き上がる。それは一瞬で色彩を取り戻し、麗しい乙女に変わった。ビスクドールを思わせる容姿の、黒薔薇セフィラだ。

「根性曲がり、難儀な遮蔽結果をこさえてくれますわね。黄泉を経由したせいで、余計な魔力を使わされましたわ」

「婆あになると前置きが長い。何用じゃ？」

「いっちょいち……っ！ 用があるのは貴女じゃねーですわよ糞ババア！」

長距離を転移してきたのか？ 黄泉を経由して？ 黄泉とは何だ？

アストリッドにも驚かされたが、この魔女の魔術も凄まじい。古今東西の知識を貪欲に吸収した硝子にも、仕組みが全然わからない。

ふと、二人の薔薇と、雲雀の視線が自分に集中していることに気付いた。

「御用は私？ 何かしら？」

「貴女の腕を見込んで、頼みがありますの。顔を貸してくださいさる？」

にやり、とアストリッドは見透かしたような笑みを浮かべた。

「わしに隠れて何の内緒話じゃの？ 言うておくがの黒薔薇、紅薔薇を壊すような真似は決して赦さぬ。推薦人がぬしとは言え、既に薔薇の席を持つのじゃからな」

「ほほほ、それはこちらの台詞ですわ。瘴気を減じたその体で、大層な口のききよう——何でしたら大陸まで送ってあげましょうか？ 黄泉をくぐれば、すぐですわ」

二人の薔薇のあいだに、緊張感がみなぎった。

「……いらぬ世話よ。よからう、紅薔薇を連れて行け」

それで、話はついてしまったようだ。奈落の底から巨大な骸骨の腕が突き出して、硝子をおろしづかみにする。さすがに度肝を抜かれた様子で、雲雀が刀に手をかけた。

「……こりゃとんでもない化物ですね。花柳斎先生、これはどうします？」

「何もしないで。——行くわ」

黒薔薇がうなずき、巨大な骸骨を操って、硝子を奈落の底へ引つ張り込む。まっさかさまに、落ちる。どこまでも、落ちる。

転移魔術の一種だろうと察しはついたが、正直、気持ちのいい体験ではなかった。やがて視界が開けたとき、そこには硫黄と噴煙に覆われた、異様な世界が広がっていた。

黒い火山岩の大地に、赤錆とも血液ともつかないものが付着している。

「ここが黄泉の国——ですの？ 本当に？」

「それは（秘された真理）、軽々に答えてしまえるものではありません」

セフィラはそっけなく応えた。それはそう、魔術の秘密を明かす道理はない。

一瞬、淡い期待を抱いてしまった自分を硝子は恥じた。もし、死後の世界なんてものが、見たままを信じるのは魔術をたしなむ者の思考ではない。常識的に考えれば、ここ

は黒薔薇が生み出した異空間。神出鬼没を可能とする、時空操作の一種だろう。

硝子の思考を見透かしたように、セフィラは投げやりに言った。

「これが本物の地獄であらうと、魔術で造ったハリボテであらうと、どうでもよろしいの
ではなくて？ 我がアブラカサスの血族はこの術で栄華を極め続けるのですし、この異界
ではわたくしが王——この意味、おわかりになりますかね？」

下手な真似をすれば殺すと言っている。最悪、置き去りにされる危険もある。
硝子は大人しく従うことに決め、されるがまま、大骸骨に運ばれて移動した。

大骸骨は荒野を駆け抜け、甘い香りの漂う、だだっぴろい大河に向かう。

大河のほとりに、一人の少女が待っていた。頭から黒マントをかぶり、ドクロのついた
杖を持っている。一二、三歳くらいに見えたが、マントの下は学院の制服だ。

「あ！ お待ちしておりました、おばあ様——」

むんず、と大骸骨が少女をつかみ上げる。セフィラは青筋を浮き立たせ、

「おばあ様と呼ぶなど、あれほど……！」

「ごめんないっ、おば——お姉さま——っ！」

「ああ、その呼び方で思い出しました。この不良娘、金薔薇の孫に尾を振って……！」

「それは別件！ お赦ください！ スケルトンの仲間入りは嫌です——っ！」

硝子の視線に気付き、セフィラはこほん、と咳払いをした。

「失礼。これはわたくしの手の者、学院に潜伏させていた妹ですの」

……ずいぶんと図々しい紹介だった。

骸骨が一同を岸に下ろす。何気なく川面に目をやって、硝子は愕然とした。

真珠色の髪の毛の乙女が水に浮かんでいる。Dワークスの《白神子》！

フレイだ。血の気は失せ、豊かな胸も上せず——つまり、呼吸も心拍も止まっている。

かたわらには、背中を裂かれたコリィ犬が、同じく死骸となって浮かんでいた。

昨日の戦いで命を落としたか……。黒薔薇が学院から死体を回収してきたらしい。硝子

は周囲の風景のように荒涼とした気分で、無感動にフレイを見下ろした。

「黒薔薇さまも人が悪いわ。こんなものを私に見せて、何が目的？」

「察しはついているのでは？ 貴女の生体機巧術で、治療して欲しいんですの」

「……私は神さまじゃないわ。死んだ者を甦らせるなんて、不可能よ」

「まだ死んではいません。停めてあるだけ」

——意味がわからない。訝る硝子を見て、黒薔薇は妖しい笑みを浮かべた。

悪魔的に微笑んで、誘いかける。

「この娘の命、救いたいとは思いません？」

5

「ごめんな、夜々。おまえをこんなにしちまって……」

水槽の表面に手を置き、雷真は力なくつぶやいた。

霊的な力を帯びた水の中に、夜々の遺体が浮かんでいる。

いや、その表現は正確ではない。これはまだ『遺体』ではないのだ。

数時間前に聞いたイオネラの説明が、頭の奥で再生される。

『ものすごく簡単に言うと、夜々ちゃんの生物時間を停めてある……らしいの』

『らしい？ 生物の時間を？』

『冷凍保存みたいなもの……なのかな。まだ解析できてな——ええっと！』

イオネラは手を振ってごまかし、しょんぼりとうつぶした。

『ごめん……私には何もできなかった。雷真くんが戻るまで、もたせられなくて……』

『今の説明なら、もたせてくれたんだろ。冷凍ってことは、解凍したらどうなる？』

『この〈水〉から出して……私に保証できるのは……一分』

一分——たったの一分!?

『水の中は、一種の〈異界〉になってる。普通の魔力は通らないし、魔術回路の接続手術なんて……どうやったって無理。処置するには、水から出すしかない……けど』

ここに金剛力の魔術回路があったとして、一分で埋め込みを完了できるか？

誰にそんなことができる？ 夜々は機械ではなく、はめ込むだけでは終わらない。

イオネラが『おかしいな希望を持たないように』と言った理由がわかる。先に『まだ生きてるよ』と言われていたら、もっと深い絶望を味わっていただろう。

雷真は回想をやめ、ガラス容器にひたいを押しつけた。

『すまない、夜々。せめて俺が、硝子さんを連れ帰っていれば……!』



「……それは違います」

背後から声がかかる。小紫に支えられるようにして、いろりが立っていた。体重のほとんどを小紫にあずけ、浅い呼吸を繰り返している。

「どっ、どのみち……心臓が限界に近かったのです……生きながらえたとしても……残り時間はわずかでした。雷真殿が、お氣にされることは……ありません……っ」

嗚咽があふれ、いろりは口を覆った。代わりに涙が抑えきれず、ぼろりと大粒の水玉が落ちる。いろりは小紫から身を離し、深く頭を下げた。

「ありがとうございます……。雷真殿のおかげで……夜々は幸せでした」

「……やめてくれ」

「本当に、ありがとう……ございま……っ」

「やめろ！ 俺が何をしてやれた!? 全部俺のせいじゃねえか！ 俺が無茶ばっかやって

こいつはいつだって、はい、はいって、付き合ってくれて！」

言っているうちに、こっちまで泣けてきた。

「俺が、夜々を殺しちゃったんじゃねえかよ……！」

「それでも……夜々は、幸せでした」

充血した目をしばたかせ、泣き笑いで言う。

氷漬けにされても文句のないところだ。それだけに、いろりの言葉は胸に染み込ます。うつつと、のぼっていた血がひく。

自分自身への怒りは消えない。だが、捨て鉢な気持ちは失せている。

「……俺さ、自分をどうでもいい奴だと、何の価値もねえ存在だと思ってた」

だから、危険に飛び込むことができた。それは勇気ではない。蛮勇ですらない。

「けど、これからは自分も大事にするよ。相棒がずっと護ってくれた、大事な命だ」

姉妹に笑いかける。姉妹は互いに微笑みをかわし、うなずいてくれた。

「それが、よろしいかと思えます」

いろりが太鼓判を押す。雷真は己の頬を両手で叩き、気合を入れた。

「よし！ それじゃ、やるぞ！ 硝子さんを連れ戻し、夜々を助ける！」

かくん、と姉妹のあごが外れた。小紫が遠慮がちにつぶやく。

「えっ……雷真？ その結論、だいじょうぶ？ 頭でも打った？」

「俺は馬鹿だが、今は正気だ。夜々はまだ死んでない——イオはそう言った」

「そうだけど、水から出したら、一分もたないって……」

「そこだ。ほら、あの、金薔薇が使ったっていう大魔術」

いろりと小紫が、同時に「あっ」となった。

魔術回路（万物流転）。一説に、それは時間の流れを制御するという。

「魔術の世界にはそういう抜け道がある。理屈に合わない裏技がごまんとな」

それも、今ある手段がすべてではない。魔術の進歩は日進月歩。今はまだ実用化されていない技術も、じきに発見され、確立されていく。

「だから、俺はあきらめない。そもそも硝子さんが戻ってくれりゃ、あつさり助かるかも知れないぜ。硝子さんは世界一の人形師なんだからさ」

敢えて、軽く言う。姉妹を力づけたい一心で。

「もし硝子さんにもできないってんなら、俺が手段を見つけてやる。魔王になって、うんと勉強してな。だから、それまで——手伝ってくれるか？」

「もちろんです！」「私だって！」

いろいろが前に出る。姉に負けじと、小紫は雷真の胸に飛びついてきた。

それから茶目っ気を出して、からかうように言った。

「だけど、雷真が研究するんなら、すつこく勉強しなくちゃだめだね？」

「うっ……それは、まあ、そうだな……」

「わたしたち、その頃まで元氣かな？」

「こここれ、不吉なことを申すな！ 雷真殿が力づけてくださったのに！」

雷真の下手な氣遣いなど簡抜けだ。それは、わかり合えているということでもある。

冷え切っていた胸が温かくなる。雷真は氣持ちを切り替え、状況を整理した。

まず、ここはリヴァール市内、教授会が隠し持つ《隠れ家》のひとつだ。学院は王妃の支配を受け入れ、ロキ、シャル、フレイは行方不明。アンリは無事のはずだが、今は機巧師団の手にあるという。

「そういや、いろいろ。あの《石》はどうした。俺たちが学院の地下から盗ってきた——

《ニンゲン》とかいう奴の部屋にあった」

「あれでしたら、お言いつけ通り、硝子に渡しました」

「そのとき、硝子さん、何か言ってたか？」

「いえ……ですが、そう言えば、顔色が変わったように思います」

あの硝子が、見てわかるほどの狼狽を見せたのなら、よほどのことだ。

あの石を制御板から外した途端、黒い巨人は暴れ出した。火垂は「安全装置」と言っていたが、あるいはもつと貴重な、重大な意味のある物体だったのでは？

「そういうあの日、おまえら、ずいぶんコソコソしてたよな？ 硝子さんが撃たれたこと、俺に言わなかったし」

「も……申し訳ありません……！」

「責めてるわけじゃない。ただ、今後は隠し事はナシでいこうぜ。硝子さんを撃つたのは協会の連中だって聞いた。それは本当か？ なぜ撃たれた？」

いろいろが小紫を振り向く。硝子に口止めされていたはずだが、小紫は正直に答えた。

「昨日、列車の中で聞いた通りだよ。硝子はね、禁忌人形を製造した罪で、連れて行かれそうになったの。でも、硝子は従わなくて……それで、威嚇射撃されて」

「その禁忌人形ってのは、おまえたちのことか？」

姉妹ははっとしたようだ。小紫はこめかみに指を当て、

「……雪月花じゃないかも。私を捕まえようとしなかったもん！」

雷真の脳裏に、エドマンドが連れていた乙女型自動人形が思い浮かぶ。エドマンドの命とあらば、平気で殺戮を行うあの人形こそ、花柳斎の「臙富士」だ。

昨日、エドマンドは何と言っていた？

「俺が親父殿を暗殺しちまったのがバレたみたいだね」

「あの野郎……臙富士で……やりやがったのか……！」

魔術回路（天手力）でやったに違いない。その痕跡を協会に捕捉されたのだ！

いろいろの白い肌が、ますます白くなる。

「で、では、協会の見立てでは、硝子が臙富士を流し、国王暗殺を助助したと……!?」

「硝子さんがそんなことするか——とは言えなくなっちゃったよな。よりにもよって硝子さん、結社にくだつて逃亡中だ。疑うなつて言う方が無理だぜ」

協会の目には「花柳斎は臙富士を提供する見返りとして薔薇の地位を得た」と映る。

「わかってきたぜ。協会に追われてたんなら、かくまってくれるのは結社だけだ」

「何をおっしゃるのです。この機巧都市には日本軍の情報部も詰めています」

「情報将校の武器は頭脳だ。灰十字の戦士さま相手じゃ、全然頼りにならねえよ。あの日、俺の側には雪月花がそろつた。硝子さんのところには？」

雲雀が到着したのは夜だ。ぎりぎり、護衛が間に合っていない。

小紫は「うーん……」と不満げな声を出した。

「軍が頼れないなら、ほかを頼ればいいよ。たとえば……学院とか！」

「その学院は、今どうなってる？」

小紫も、いろいろも、息をのんだ。学院は今、機巧師団の支配下だ。英国と協会が王子の搜索で連携している今、「共犯者」の硝子にとつては敵地と言える。

「思うに、硝子さんは前から結社に誘われてたんだ。俺がバカ王子の勧誘を受けたみたいだ。で、にっちもさっちもいなくなつて、やむなく結社に……」

「ですが、結社が硝子を誘う理由がわかりません。それに、日本軍がアテにならないとは、やはり思えません。硝子はずっと樺中将を頼っていましたし」

「あのじーさんは敵が多いぜ。英国駐在の少将閣下が敵なら、どうだ？ さっきのアレにつながると思わねえか？」

いろいろの胸を指差す。いろいろはさつと頬を染めた。

「雷真殿つ、なな何もこんなときに……ですが、しし仕方ありません。気分転換が必要とおっしゃるでしたら、不肖このいろいろ、「アレ」につながることも了承——」

「何の話してんだ！ さっきの石の話！ 硝子さんの顔色が変わつたつていう……あれがとんでもなく重大なブツで、情報部に渡したくなかつた——なら？」

姉妹は呆然と雷真を見た。驚きすぎたのか、何も言ってくれない。

「渡したくないから、逃げた。逃げる場所がないから、結社にくだった。硝子さんが何も言ってくれなかつたのも、それで説明できる。もしそのことを俺たちに言っちゃったら、俺たちにも軍の捜査が及ぶ。だから、おまえたちを遠ざけて——」

「やめてください！」

たまらなくなったように、いろりは顔を背けた。

「すべて雷真殿の空想です！ 硝子は夜々を捨てて行つたのです！ 私たちを……！」

「そんな言い方するな。硝子さんは今でも、俺たちの硝子さんだ」

「もうやめてください……そのような……未練がましい妄想は……！」

「いろり、昨日の早朝、俺を思いっきり殴つたら」

「えっ？ あのつ、まことに、あいすみませ——」

「硝子さんがおまえを殴ったとき、あのときのおまえと同じ顔をしてた」

夜々の胸が破れた直後、錯乱しかけた雷真の頬をいろりは打つた。あのとき、いろりはまるで自分の方が痛いような、そんな顔をした。

硝子も同じだ。それが見間違ひだつたとは思わない。——思いたくない。

「硝子さんはあんな連中とつるんで。とても誉められたことじゃないが、俺もつい昨日、バカ王子とつるんで王宮襲つたしな、俺には硝子さんを責める資格がない。そして、義理はある。硝子さんが困ってるなら、俺は助ける」

「……この期に及んでなお、硝子を信じるとおっしゃるのですか？」

「俺を拾ってくれたのは硝子さんだぜ？ この命、とくに硝子さんに預けてる」

「そんなこと言つて、いつも勝手に捨てようとするけどね——」

小紫が混ぜ返す。その丸い頬に、涙の筋がきらきら光っていた。

いろりは困惑しながらも、心動かされた様子で、雷真に訊いた。

「ですが、連れ戻すと言つても……硝子はとりつく島もない様子でした……」

「ああ。だから、硝子さんのこと、もっと知ろう」

昨日の失敗で学んだ。硝子を救うには、実力行使ではだめだ。

「おまえたち、硝子さんと付き合ひ長いだろ。知ってること、全部教えてくれ」

「……私も多くを知りません。硝子は全然、自分のことを語りませんので」

「なら、詳しい人に聞くとしよう。たとえば——さか梅中將に」

「えっ!? ですが、中將は、日本にいらつしやるのでは……？」

「気軽におしやべり、つてわけにはいかねーな。だが、いざとなりや手段はある」とびきり危険な手段だが。

笑つてしまふ。ようやく、自分らしさが戻ってきた気がする。

「だから、俺たちが硝子さんを助けようぜ！」

その点に関しては、反対意見が出ない。姉妹は涙を振り払い、力強くうなずいた。示し合わせたように、三人そろつて水槽を見上げる。

心なしか、水槽の中の夜々の寝顔も、やわらいだように思えた。



Chapter 8 強さを知る

1



物心ついたとき、硝子はその男と二人暮らしだった。

親子——なのだろう、世間的には。だが、硝子は男を父と呼んだことはない。近所の人や、時おり訪れる客人にならって、男を「先生」と呼んでいた。

最初の記憶は、ずいぶんとおぼろげだ。

男は疲労で落ちくぼんだ眼窩の奥から、ぎらつく瞳を向けていた。

「わかるか、俺が？」

壊れ物に触れるような声だった。あいにく、何を言われたのか、硝子にはわからない。

男の瞳は見る間に精気を失くした。職人らしく骨ばった手で、己の顔を覆う。

「……だめか。……だよな。……わかっていた。……最初から」

それきり、興味を失くしたように、背を向ける。

幼い硝子には、男が何に失望したのか、わからない。

ただ幼な心に、私ではだめなんだ、と思った。

男は高名な人形師だった。

広々とした屋敷には女中人形が大勢いて、何やかやと世話を焼いてくれる。大名の姫のように扱われながら、硝子は人形たちが煩わしかった。

その日、うるさい人形たちから逃れ、門の陰で涼んでいると——

「狂士郎先生は、ご在宅か？」

大きな影が日差しをさえぎる。いかつい体軀の軍人が、硝子の前に立っていた。

顔なじみの中尉だ。硝子は丁寧に腰を折り、敷地に招き入れた。

「ようこそお越しくださいました、榊さま。どうぞ」

書斎へ案内する。酒臭く、日の当たらない暗がり、男は今日も何かを書き散らかしていた。硝子には目もくれず、客人だけを見て、冷笑する。

「おう、榊。てめえも暇だな。ほんくらすぎて、軍に居場所がねえのか？」

言葉はトゲトゲしいが、男の声がちよっぴり弾んでいるのを、硝子は敏感に悟る。硝子に対しては、ただの一度も、そんな声になったことはない。

男は本の山を乱暴に崩して、下から将棋盤を引っ張り出した。

「何べんこようと骨折り損だぜ。俺は兵器をこさえるつもりはねえ。国家なんてあやふやなもののために働くのもごめんだ。俺は俺が顔を知ってる奴のために造る」

「では、俺のために造ってくれ」

「青二才がナマ言ってんな。てめえの給金で俺の人形が買えるかよ」
 二人が将棋を指し始めたのを潮に、硝子は一礼して退出した。

障子を閉めたところで、中から櫛の音が聞こえた。

「よくできた娘だな」

——誉められた。硝子は誘惑を感じ、いけないながらも、聞き耳を立てる。

「きちんと面倒をみているのか？ あの娘が笑ったところを見たことがない。昼間から酒ばかりやって、世話を人形任せにしているのでは——」

「あれが笑ったところなんぞ、俺も見ただことねえよ。ま、できそこないだな」

言葉が胸に突き刺さる。逃げ出したいと思ったが、足は動いてくれなかった。

「はちり、はちり、という駒の音に交じり、二人の会話が漏れ聞こえてくる。

「世界がどうなっているのか、貴方は知らぬのだ」

櫛の低い声が、さらに低くなった。

「西洋の主流はとくに機巧魔術——いざなぎのように個人の才に頼るやり方では、組織化された魔術兵には敵わぬ。優れた自動人形なくして、この先の戦には勝てぬ」

「うるせえな……何でそんなに戦がしてえかね？」

「国を護るためだ。徳川三百年、日の本は太平にあぐらをかきすぎた。その間に、西洋人は武力をたくわえ、属州を広げてきた。この国を、民を護るには、力がある。極東一円を支配下に置き、確固たる地盤を築かねばならぬ」

「結構なご高説だがな、そんなの糞食らえなんだよ。こつちから戦争吹っかけて何が自分の国を護るためだ糞野郎。俺は戦にゃ手を貸さねえ」

「ではなぜ貴方は人形を造る？ 何のために、あれほどのものを」

「あれほどのもの？ ありや全部、駄作よ。あいつらにや命がねえ。結局のところ、人間の真似をしているだけだ」

……そのどこが、気に入らないのだろう？

「大体、俺は人形造りにゃ飽きたんだ。今は本を書いている。読んでみるか？」

「……飽きたとおっしゃるなら、専用の工廠を建てるよう軍に掛け合おう。貴方の設計と指揮で、工員たちに量産させるのだ。それならば、どうだ？」

「ふざけんな！ 他人が造ったできそこないに、俺の銘を入れろってのか!？」

「では、貴方が造ってくれ。過去の品を駄作と言うなら、傑作を造って、俺にくれ！」

——結局、この日も議論は平行線だった。

櫛が帰ったあと、珍しく男の方から声をかけてきた。

「おい……これ……やる」

ぶつきらばうに単語を並べ、三味線を突き出す、

鮎色に光る、なめらかなボディが美しい。よほどの職人が手がけたのだと、幼い硝子にも理解できた。そして、持ち主が大事に使っていたことも。

「弾いてみる」

——無茶な要求だ。そもそも、どうしてこんな贈り物をくれるのだろうか？

昼間、櫛に説教されて、態度を改める気になったのだろうか。わからないが、かまってもらえたことが嬉しくて、硝子は言われるまま三味線を手に取った。

男の顔色をうかがいながら、三味線を膝に抱き、バチで弦を叩く。

りんと涼やかな音色が響き、硝子の心を震わせた。

の勘なのか、遊んでいるだけで、何となしに奏法を理解した。

そこからの十数分は、ほとんど記憶がない。

ただ楽しくて、嬉しくて、興奮していた。生まれて初めて、何かに夢中になった。流行歌の旋律をなぞってみると、一発で音が取れる。硝子は得意になった。男も喜んでくれたのではない、期待を込めて見上げると――

男は苦りきった顔で、失望していた。

「……できねえか。ま……そうだろうな」

えつ、と思つた。私はできた。できた――でしょう？

――ふと、隣家の老婦人から聞いた話を思い出した。

「あの人も、どうしてあんなうちまったのかねえ。鏡子さまが亡くなるまでは、ちよいと気の利いた、粋な男で通つたのにねえ」

「鏡子……？」

「ええ、そう。それは綺麗な、とても綺麗な、奥方様だったのよ」

婦人は不憫そうに硝子を撫で、優しく言ってくれた。

「あなたにはちゃんと、面影が残っているわねえ……」

すとな、と何かが腑に落ちた。

男がなぜ、硝子を視界に入れないか。できないことを、やらせるか。簡単なことだ。男が求めているのも、愛しているのも、硝子ではない。

だとしたら、この男が酒に溺れているのも、人形造りをやめたのも――
全部、私のせいなのだろうか？

後日、硝子は男の書斎に出向き、正座して切り出した。

「奉公に出ます」

「はあ？ いきなり何を言いやが――なぜだ!?」

いきなり沸点を超える。かつてない剣幕に、硝子はびくつと首をすくめた。

しかし、勇気を振りしほり、自分の考えを述べる。

「先生は、お酒が好きでいらつしやるので……」

「だから何だ！」

「人形を造らないのなら……私が酒代を……稼げればと」

男が德利を叩きつける。德利は畳で跳ね、硝子の膝で碎けた。しばし、二人の意地がせめぎ合った。

「……ガキに金の心配をさせちまうようじゃ、俺もヤキが回ったな」

男は疲れきったような顔をして、硝子に背を向け、書き物に戻った。

「いいぜ。好きにしろ。どこへでも行っちゃえー」

それっきり、もう振り向いてはくれなかった。

そうして硝子が入ったのは、華やかな芸妓の世界だった。

お座敷で歌舞音曲を見せ、酌をし、遊興に華を添える仕事だ。酔客を相手にする以上、不安がないわけでもなかったが、この仕事は三味線に触れていられる。

今や硝子の財産は、男にもらった三味線と、《鏡子》譲りの美貌だけ。

硝子は万事に勘がよく、芸はめきめき上達した。姐さまたちにも可愛がられ、座敷に上がるようになってからは、客あしらいもすぐに覚えた。修行は厳しいものだったが、同じ年頃の娘たちも多く、話し相手にも困らない。男のもとにいたときより性格が明るくなり、それに比例するかのように、容貌も日増しに美しく、垢抜けていった。

器量と知性、確かな芸で、硝子は花柳界をのし上がっていく。

後輩たちにも慕われ、上客が引きも切らない。界限で知らない者がいないほどの人気を得て、日々に幸福を感じ始めた頃——事件が起こった。

2

のぼりかけた満月が美しい、ある秋の宵の口。

店の門前に、あの男——狂士郎を見かけたのだ。

「紅薔薇？　どうかしたんですの？」

西洋人形のように可憐な、黒薔薇の顔が視界を埋める。

「……いえ。お返事を考えていたのよ」

硝子はこちらうじて平静を装い、足もとの水面に視線を落とす。

フレイの服は水で透けている。半裸のニンフを思わせる美しさだが、生氣はなく、呼吸はもろろん、魔力の流れも止まっている。

「死んではいないとおっしゃったわね。とてもそうは見えないけれど」

「我がアブラクサス家に伝わる秘法《忘却の流れ》レーテの水です」

「その名前、確か神話の……飲むと生前の記憶を失くし、転生に備えるのだとか」

「そう、存在情報を失くすんですの。ひとたびレーテの流れを渡ってしまえば、二度と戻れない——しかして川を渡らぬ限り、存在情報は維持される。ゆえに、この娘はまだ死の

水際にとどまっている——魔術の逆説を応用した、生体固定の秘薬です」

硝子の脳裏に、ホルマリン漬けの生物標本が思い浮かんだ。

つまり、そういう理屈で構築された霊薬エリカクということか。さすが死霊術オクロフイのエキスパートを標榜するだけあって、生化学の奥義にも通じている。

「霊薬を解除すれば息を吹き返します。この娘は生きたままレーテの水に浸かったのですから。そうでしょう、ドロシー？」

かたわらの少女を振り向く。多少びくつきながら、ドロシーはうなずいた。

「は、はい。だけど、心臓も壊れかけっぱいし……水から上げたら、すぐ死ぬわ」

「ですってよ。でもまあ、あちらよりはだいぶマシですわね」

「あちら——とは何だ？」

硝子の疑問を察したはずなのに、黒薔薇は気味の悪い笑みを浮かべただけだった。

硝子は眼帯のレンズを切り替えて、フレイを監視してみた。内部で細かな血管が傷つき、破損は全身に及んでいる。助けるとすれば、精溜で代用血管を造るしかない。

（私はお医者さまではないのだけれど……）

自嘲する。実に、今さらだ。臓器も骨格も、さんざんもてあそんできた。

助けられるものなら、助けてあげたいと思う。知らない仲でもないのだし……。だが、黒薔薇の意図が読めず、それが不気味だ。

硝子は一計を案じ、セフィラではなくドロシーに水を向けた。

「なぜこの子を拾ってきたの？ お嬢ちゃんくらいの腕前で、銀薔薇さまの目を盗むのは至難の業——身の危険もあったでしょう？」

「そりや大変だったわよ！ このドグサレ、無駄に重し！ 大体こいつ、あたしに大恥かかせてくれたやつじゃないの。国中の名士の前で、あんな無様な負け方……っ」

ドロシーは地団太踏みそうな勢いで言った。そうして怒りをあらわにすると、なるほど、顔つきも気性も、祖母セフィラに似たものを感じさせる。

「なぜ、放っておかなかったの？」

「それは、だって、おば——」

ちらっと祖母を見る。黒薔薇の顔は冷たく凍りついてた。ドロシーは大あわてで、

「ち、違うの！ えーと、えーと——あたしの死霊ちゃんたちはまだ負けてない！ このおっぱいお化けの心臓に力負けしただけ！ 技術ならこつちが上！ それを世間にわからせるまで、ポツと出の黒刀なんかになんかに負けられちゃ困るのよ！ これでいい!!」

半泣きで言葉と並べ立てる。要するに——すべて黒薔薇の差し金だ。

「なぜですの、黒薔薇さま？」

「わたくしは慈悲深い魔女ですの。あと、『さま』は余計ですてよ。同じ薔薇ですもの」
白々しい。硝子がにらむと、黒薔薇は聞き直ったように本音を言った。

「ええ、ええ、お察しの通り。こんな小娘、わたくしが善意で助けるとお思い？」

「……どう利用するおつもりかしら？」

「ほほほ！ そのようなこと、言えるわけがありませんわ」

「そう……でしょうね」

黒薔薇^{ばら}にとって、硝子^{しやうこ}は決して「味方」ではない。利用できるかどうか、見極めている段階^{だんぱん}だろう。利用できないのであれば……。

「ただ……そうですね、これだけは教えて差し上げてよ」

ふっと黒い瞳^{ひとみ}を翳^{かげ}らせて、黒薔薇^{くろばら}はかなげに微笑^{ほほえ}んだ。

「わたくしにもかつて、友人と呼べる者がいたのですわ。リリイは抜群^{はくぐん}の資質^{ししつ}を持つ……とても思^{おも}いかな魔女^{まよ}でした。愛^{あい}は人を愚^{おろ}かにする」

愛^{あい}、と言ったのか。あまりにそぐわない言葉に思^{おも}えて、しかし不思議と惹^ひきつけられて、硝子^{しやうこ}は無言で続きを待った。黒薔薇^{くろばら}はぐらかすように笑って、

「薔薇^{ばら}の魔女^{まよ}も、たしなむ程度^{ていど}には、愛^{あい}を知っているということですね。ゆえに利用もできるのですけれど。——さあ、どうなさいますの？」

黒薔薇^{くろばら}の笑顔^{えんご}が凄^{すご}くを増す。硝子^{しやうこ}が応^{こた}えられずにいると、黒薔薇^{くろばら}はさらに顔を寄せた。

「ねえ、紅薔薇^{べにばら}。わたくし、無理^{無理}に、と言っているわけではありませんのよ？ 貴女^{あなた}には何^{なに}の利益^{りやく}もないお話^{おはなし}ですものね？」

……実質^{じしつ}、脅迫^{きようぱく}だ。この異界^{いがい}に置き去りにされるのはぞつとしない。

「ですが、わたくしの知遇^{ちよ}を得ておくことは、貴女^{あなた}の利益^{りやく}になるのでは？」

右手^{みぎて}を差し出す。炎^{えん}のような闇^{やみ}が噴^ふき出し、果実^{くわんじ}のような物体^{たいぶつ}に変わった。

(これは……！)

驚愕^{きやうがく}する。本当に、本物^{ほんぶつ}か？ 本物^{ほんぶつ}だとして……くれるというのか？

「わたくしたち、存外^{ぞんがい}、仲良^{なつよし}くできるのではなくて？」

硝子^{しやうこ}は冷静^{れいじやう}に計算^{けいさん}を働^{はたら}かせた。今の硝子^{しやうこ}には、黒薔薇^{くろばら}に対抗^{たいかう}できるほどの武器^{ぶき}がない。

これを得ておくことは、大きなアドバンテージになる。それに——

この先^{さき}、フレイに苦難^{くなん}が待っているのだとしても。

ここで命^{いのち}を落とすよりは、ずつといい。それは可能性^{かようせい}をつなぐということだ。誰^{だれ}かが助けてやれるかもしれない。たとえば、どこかの、命知らずな子どもたちが。

……思^{おも}えば不思議な縁^{ゆかり}だ。かつてフレイの愛犬^{あいけん}を救ったことも、この日のための前哨戦^{ぜんしょうせん}だったのではないかと思^{おも}えてくる。

「やるわ。水の仕様^{しやうがく}を教^{おし}えて頂戴^{ていだい}。それと、助手^{しすけ}が欲しいわね」

硝子^{しやうこ}の返事^{へんじ}に、黒薔薇^{くろばら}は微笑^{ほほえ}んだ。思い通りにことが運^{はこ}んだ、という表情^{へいしやう}だ。

「助手^{しすけ}はドロシーにやらせます。どうぞ、お好きに使うがよろしいわ」

「では、ドロシー。必要なものを言うから、持^もってきて。まずは蒸留水^{じやうりゅうすい}——」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！ 何^{なに}であたしが——っ」

硝子^{しやうこ}がひとにらみただけで、ドロシーの顔^{かほ}から血^ちの氣^きが引いた。

「いいこと、お嬢ちゃん。これから人の命^{いのち}を扱うのよ。今度^{こんど}口答^{くた}えしたら、たとえ黒薔薇^{くろばら}さまのお孫^{おひな}さんでも容赦^{ようしや}はしない。痛^{いた}いのは嫌^{きら}でしょう？」

「は、はい……お姉さま……♡」
酔^よったように頬^ほを赤^{あか}らめ、憧憬^{けいけい}の瞳^{ひとみ}で硝子^{しやうこ}を見る。……別の意味^{べつのいみ}で身の危険^{きけん}を感じたが、

扱いやすそうにも思えたので、硝子は深く突っ込みます、フレイに向き直った。
こんなことが、罪滅しになるとは思わなければ——
貴女の生命、この花柳斎がつないであげる。

3

機巧都市の郊外、海に近い立地に、白亜の病院が建っている。

その五階、入院病棟の一室に、野太い怒鳴り声が響いた。

「いつまで待たす氣イや、けったくそ悪い！」

猛っているのは体格のいい日本人の少年、昴だ。となりのベッドには、ほぼ寝たきりの六連が横たわっている。どちらも日輪の従者であり、いざなぎ流の魔術師だった。

二人とも満身創痍で、特に六連は重傷だ。

「阿呆が、連絡も寄越さんと……何してけつかんねん！」

「まーまー、お嬢はいざなぎ宗家のおひーさんですよ。ご無事でいたはるて」

「婚取る前に無断外泊やお……!? 自覚ないにもほどあるわばええええ！」

「……あー、そっちですか。けど、雷真はんなら、ええんでしょ？」

「そら、あいつ以外考えられんけど……けど……それとこれとは話が別やあああ！」

「ははー、男心やなあ」

昴はひとしきり苦悩した後、怒りの矛先を雷真に向けた。

「あいつもあいつや！ 学院がこんななんつとんのに、どこで油売つとる！」

「そっちも心配いりませんで。雷真はんは魔王倒さはったお人や。……まあ、そのとばっちりで、僕らまで指名手配みたくなってますけど」

「何が〈魔王殺し〉や……ほんつつつま、ハタ迷惑なやつちゃ……！」

雷真は現在、協会の追跡を受けている。市警と英国軍も捜索に協力しており、雷真と仲がいいと見なされた者も、逃亡幫助ならびに共犯容疑で手配中だ。

大人しく学院に出頭すれば、大したおとがめも受けずに済む。だが、日輪がそうしない以上、この二人が寝返ることはあり得なかった。

「もうええ、自分でお嬢捜してくるわ。夜々ちゃんの方にいるかもわからん」

「無理しなはん。昴も全治二か月ですよ。大人しゅう寝ときー」

「そうそう。役立たずは寝ていなよ」

やわらかな、それでいて厳しい声が割り込み、昴も六連もぎくつとした。

銀髪のナースが部屋に入ってくる。ラザフォードの娘アリスだ。

「僕の接近にも気付かなかったくせに、出歩くなんてマヌケの極みだね」

——確かに、普段ならば、式神でたやすく察知できたはず。軍の逆探知を恐れ、哨戒用の式神を展開できていない。出歩くのは自殺行為だ。

「僕の厚意を無にするつもりかい？ かくまうのは大変なだけだね？」

「えつちそうに……！　そう言うおまえはバレてへんやろな？」

「僕の《虚像》は教授ですら欺ける。よっぽどでなければ、見つからないよ」

「ならそのプロッケン使おて、捜してくれ。お嬢はどうなった？」

「君たちの大事なお姫さまなら——」

目線で背後を示す。アリスの後ろから、ひょこつと日輪の頭がのぞいた。

昂はどすどすと駆け寄って、日輪の首根っこをつかむ。

「お嬢！　ド阿呆！　何ですぐ顔見せん！」

「ひっ！　か、かんにん……！」

昂はなおも怒鳴ろうとしたが、日輪の目尻に涙のあとを見つけて、静かになった。

「……何や、それ。倫敦で何があった？」

「うち……阿呆や……何の役にも……立たれへん……！」

「うわーん、と泣いて飛び出していく。アリスはあきれ顔で嘆息した。

「泣き虫な姫君だね。追いかけていないのかい？」

「……泣かしといたれ。それでスッキリすることもある。シャルロットちゃんも消息不明

てゆうし、泣きたくもなるやろ」

「昂……大人にならなかつたやね……！」

「コラ六連！　何で俺が子どもみたくなつとんねん！」

「病院で騒ぐなよ。そんな元気があるなら、昨日戦えばよかったのに」

「ぐぐ……上から言いくさって……！　俺らかて好きで寝とったわけや——」

「あははー、僕ら、えーとこなしどしたね。なっさけな！」

「笑い事ちゃうわあうぐおお……っ」

昂はベッドに突っ伏した。エドマンドに裂かれた傷が、まだ完治していない。

「騒いでないで、とにかくゆつくり養生しなよ、半死人はさ」

「ゆつくり……やと!?　このまま泣き寝入りか!?」

「頭は生きてるうちに使いなよ。あの大馬鹿野郎が泣き寝入りなんてするかい？」

皮肉げな、しかし、どこか誇らしげな、そんな微笑。

アリスが誰を信じているのか、どこまで信じているのかを理解して、昂も笑った。

「……そやつたわ。何をどうする？　腹黒い策謀、ぎょーさんあんのやろ？」

アリスはやれやれといったふうにかぶりを振った。

「君は本当に馬鹿だね。——まだ考えてないに決まってるだろう」

「おい六連、こいつ殴ってええかな？　ええよな!?」

「あきまへんで。学院長の娘はんですよ」

アリスは胸の下で腕組みをして、淡々と不利を語った。

「まず、世間を納得させるだけの大義名分があるよ。それがなければ、ただのテロリスト——戦術以前の問題だからね。次に戦力比をどうするか。城壁はなくなっただけど、あちらは人機一万以上の大部隊——実質、城攻めなみに難しい仕事だ」

対するこちらは、弱った魔術師がほんの数名。

「せめて魔剣が残っていればね……シャルロットもだらしがない」

「おい、そんな言い方せんでも——」

言いかけて、それに気付く。アリスの爪が肘の肉に食い込んでいる。

戦闘終結の直前まで、アリスはシャルとともにいたのだ。自分だけが無事であることに、内心は忤怩たるものがあるだろう。

多少は気の毒に思う気持ちもあつて、昂は声のトーンを落とした。

「魔剣があれば、どうにかできるか？」

「なければどうしようもない。あれは僕らにとつての最大火力だ。——そこで」

アリスは戦略家の顔になり、淡々と告げた。

「君たちに搜索をさせる。君たちの魔術は広範囲の情報収集が可能で、隠密性にも優れている。発見されそうになった場合、破棄も容易だ」

だから、養生しろと言ったのだ。きたるべき日に備えろと。

「いざなぎ流かて精霊術とそう変わらん。大つびらに使えば、絶対バレルえ」

「大つびらでなければ？」

「範囲しぼつて、ちまちまやってけば……けど、それやと時間がかかる。機巧都市は五十万人都市、一軒一軒しらみつぶしにやつとつたら……」

「いいえ、やります。わたくしたちで、捜します！」

力強い声とともに、日輪が病室に入ってきた。

目もとが腫れてている。アリスは茶化すように言った。

「子どもみたいにびーびー泣いて、少しは気が晴れたかい？」

「申し訳ありません、アリスさま。もう平気です」

丁寧に頭を下げた後で、きりりと締まった顔を見せる。

「夜々さんを護れなかったのは、わたくしのしくじりです。しくじりは手柄で埋め合わす

——それがいざなぎ流です」

「……思ったより、骨つばいお姫さまだね。なら、搜索は君たちに任せる。最低限、剣帝は捜し出してもらおう。それから、シャルロットとフレイだ」

「かしこまりました。ですが、もし……もう現世にいらつしやらないときは……？」

「賭けをしようか？ 僕は生きてる方に賭けるけど、君は？」

悪戯っぽくウインクする。日輪ははつとしたように口を押さえ、

「……賭けは成立しません。わたくしも、生きている方に賭けます！」

二人は見つめ合い、同時に笑い出した。

その様子を、六連がにやにやしながら眺めていた。

「……キモイぞ六連。何笑つとん？」

「あの組み合わせ、相当こつついんとちゃいます？ 日本魔術師の最大派閥いざなぎ流の次期当主と、一九世紀最強の魔術師ラザフォードはんの一粒種ですよ？」

日輪^{ひる}は学院トップクラスの魔力総量を持つだけでなく、多彩な式神を操れる。おそらくはあのマグナスよりも、一度に扱える魔術が多い。

アリスは日輪より『劣った』魔術師かも知れないが、日輪にはない発想力、戦略、戦術の才がある。あるいは日輪以上に、式神の能力を生かせるかもしれない。

たった二人の、まだ年若い少女に過ぎない。歴戦の魔女たちに比べれば、まだまだ頼りない存在だ。それでも、アリスが知性を、日輪が実行力を提供するならば――

期待させるものは、あるのではないか？

昂は頬をゆるめ、肩をすくめた。

「ふん、まだまだ頼りないわ。俺らが支えてやらんと」

「そんなんゆーて、お嬢にべったり惚れたはるくせに」

「やっかましー！ いてまうぞコラ！」

ほのかに見えた光明はまだ、地獄に垂れた〈蜘蛛の糸〉と言ったところだ。

これを切らずに、つなげるか。

不快な脂汗がにじむのを感じながら、昂は己の頬を打ち、気合を入れた。

4

空気の湿った地下通路で、双子の姉妹が足踏み^くを繰り返していた。

「どどどどうしようっ！ 勢いで助けちゃったけど！」

「わわわわかんない！ これ絶対やばいよね！ 叱られちゃうよね！」

すがるように背後を振り向く。そこには、騎士人形が二体、無言で控えている。

二体は忠実だが、命令されたことしかやらない。まるで発言しないので、二体がどんな性格で、何を考えているのか、実は双子にもよくわからない。わかっているのは、あちらも元は双生児ということだけだ。

騎士たちが何も言ってくれないので、双子は再び、足もとの乙女に視線を戻した。

壁にともった魔具の照明で、金髪がキラキラと輝いている。

激闘で塵をかぶり、頬は煤けている。トレッドマークの帽子はどこかにいつてしまった。仰向けになってもまったく形状が変化しない、偽物の胸が哀愁を誘う。

昨日の戦い、シグムントが魔抗ワイヤーに拘束され、シャルが墜落したとき、双子は林に隠れ、震えながら成り行きを見守っていた。

そもそも様子なんて見にこなければよかったのだが、シャルの去り際の言葉――『元気だね』の真意が気になって、つい、見にきてしまったのだ。

落下するシャルは、どう見ても意識を失っていた。見なかったことにするのがベストのはずだが、双子はとっさに騎士を飛ばし、シャルを救った。

その後はもう無我夢中。吹き荒れる砂塵にまぎれ、かつて根城にしていた地下を目指した。おかげで今も生きた心地がせず、せわしない足踏みを繰り返している。

双子の靴音がうるさかったのか、シャルが意識を取り戻し、長いまつ毛を上げた。

「うん……？ 貴女たち……ヴァイツェッカー姉妹？」

「暴竜のせいだよ！」「絶対やバイインだから！ 責任とって！」

「いきなり何よ!? こここのなの!？」

シャルは飛び起きて、それから息をのんだ。どうやら、風景に見覚えがあるらしい。

「学院の地下——大空洞に続く地下通路ね？ そうでしょう？」

記憶がつかなくなった。あわててあたりを見回し、暗闇に叫ぶ。

「シグムント！ どこ!?」

——こだまが返ってくるだけだ。シャルはたちまち青ざめた。

「私だけ……？ また……私のせいで——シグムントが……っ」

「わわっ、落ち着いて！」「魔剣の竜は無事だよ、たぶん！」

「どうして言い切れるのよ！ 状況を説明して！」

双子はしぶしぶその場にしゃがみ、シャルに問われるまま、状況を語って聞かせた。

「それじゃ、まだ機巧師団が居座ってるってこと？ 学院長はどうしたの？」

「わかんない」

「アリスは？ 私と一緒にいたはずよ」

「わかんない」

「夜々はどうなったの？ エリアーデ教授の手術は……？」

「何のことか、わかんない」

「……何にもわかんないのね」

「何その言い方っ！」

双子の声が綺麗にそろう。

「私たちがいなかったら、暴竜はつぶれたカエルみたいになってたんだから！」

「もしくは軍に生け捕りにされて、変なゴーモンとかされてたんだから！」

「そ、そうよね。ごめんなさい。ありがとう。貴女たちは命の恩人よ」

双子は同時にのけぞった。ひそひそとお互いにささやき合う。

「この暴竜、何かキモイね？」「ね。にせものじゃない？」

「丸聞こえよ！ 素直にお礼言ってるのに、何がキモイのよ！」

シャルは怒り出したが、自業自得だということも重々承知しているらしい。すぐに怒りを引つ込め、よろけながら立ち上がった。

壁伝いに歩き始める。双子は驚いて、シャルの前に回り込んだ。

「どこ行くつもりっ？」「そっち危ないよ。地上だもん！」

「どいて……戻らなくちゃ。シグムントの様子、わからないでしょう？」

「だめだよ！」「兵隊が一杯いるんだよ！」

「見つからないように努力するわよ。でも行かなきゃ。アンリが心配だし、アリスだって放っておけない。それに、家族の心臓——大事な〈宝物〉を察に残してきたの。軍に処分

される前に、取り戻さなくちゃ……」

「だけど暴竜……もう、魔力切れでしょ……」「どうして、そこまで……？」

「貴女たちこそ、どうして私を助けてくれたの？」

質問で返され、双子は言葉に詰まった。シャルはくすつと微笑んで、

「まあ、貴女たちのことだから、特に考えなんてないわよね」

「馬鹿にしてるーっ！」

「怒らないで。打算も計算もなしに誰かを助けられる——そういう人間が私は好き。貴女たちのそういうところ、とても素敵だと思うわ」

二人は赤面した。そして、ひそひそとささやき合った。

「絶対キモイよね、この暴竜……」「やっぱり、にせもの……!?」

「好きって言ってるのに、あんまりじゃない!? ニセモノ造って騙すほどの相手じゃないでしょ貴女たち！」

「ひっ、ひっどーい！」

上げ底っ、黙りなさい幼児っ、暴れん坊っ、などと罵り合う。

互いに悪口を言い尽くし、せいぜいと息を切らす。ややあつて、双子は言った。

「暴竜を助けたのには——」「ちゃんと、理由があるよ」

それぞれの後ろを振り向く。槍を立てた騎士人形が二体、やはり直立不動の姿勢で控えている。双子の心に甦るのは、かつてシャルと戦ったときのことだ。

「魔剣の竜をあんなおつかない姿にして、私たちをねじ伏せたとき——」

「この二人を、暴竜は殺さなかったでしょ？」

半身を切り飛ばしはしたが、とどめは刺さなかった。

「一度は命を救われたんだもん」「私たちも借りは返すよ。一度だけね！」

照れ隠しに、ペー、とそろって舌を出す。シャルは目を丸くして双子を見た。

「それとそっくり同じこと……私も前……」

最後まで言わず、急に身を乗り出して、双子の手を握る。

「ねえ！ 貴女たちとは、ちゃんとお友達になりたいわ」

「……え？」

「お友達になりましょう。名前は何ていうの？」

双子は照れて縮こまった。しかし、まんざらでもなく、シャルに耳打ちする。

「素敵な名前ね」

双子の顔が「にへっ」とゆるんだ。お互いに肘で小突き合い、照れをまぎらす。だが、双子がじゃれ合っているうちに、シャルはもう地上に向かっていた。

「だめだってば！」「私たち、何のために危ない橋を渡ったのっ？」

「騒がないで。感づかれるわ」

はっとして口を押さえる。既に地上が近い。

数ある出入口のひとつ、コロセウム近くの林から地上に出る。八十メートル程度の距離

に、機巧師団の一部隊が布陣していた。

夜会会場の監視、といったところか。伝令が頻繁に行き来していて、出歩くのは危険だ。だが、そのおかげで軍の状況が推測できたのは、皮肉な幸運と言えた。

漏れ聞こえてくる伝令の声から、機巧師団は学院に長期滞在することがわかった。

「居座るつもりね……考えてみれば、できすぎた話だわ。学院の城壁は壊されて、結社の襲撃に耐えられない。学生同士がいざこざを起こしたばかり。今『学生の保護』を名目に軍を駐留させても、誰も——魔術師協会でさえ——文句は言えない」

シャルの横顔が険しくなる。

「だとすると、地下も危ないわね。すぐに調査隊がくるはず」

「なんで？」

「知らないの？ 貴女たちのリーダーだった、ローゼンベルクは知ってたみたいだけど。まあ、知らない方がいいわ。変なゴーストとか、嫌なんでしょう？」

双子はこくこくと激しくうなずく。

「私も詳しくは知らないんだけどね。魔術成果の取り合いなんて、好きにやつてればいい。だけど、夜会の方は……このままじゃ、まずいことになりそうね」

「まずい？」「何が？」

「王妃さまはこのまま学院を支配するつもりだわ。英国が学院を直接統治なんて、夜会の公正さを放棄するようなもの。アスラを勝たせるつもりがミエミエじゃない」

それに——

「ライシンの参加資格が失われるわ！ だってあいつ、〈魔王殺し〉とかって……！」

シャルは顔を上げ、決意を秘めた声で言った。

「やつぱり私、行かなくちゃ。仲間と合流して、学院を解放する」

双子は呆けてしまう。魔剣もなく、魔力もなく、なのに敵地に突っ込むとして。無謀な愚行だが、暗愚ゆえの行動ではない。使命感が己に命じた気高い決断だ。

「暴竜、そんなに……」「下から」「番目が大事なの？」

「み、見損なわないで！ そ、それはもちろん、あいつにはいろいろ借りっぱなしだけど、だけど、あいつだけが問題じゃないわよっ」

胸元に手をやり、目を伏せる。

「みんなのおかげで、私は強くなれたわ」

たぶん、彼女の胸中には、いくつもの顔が浮かんでいる。双子ですら知っているのだ。学院一の嫌われ者だったシャルが、今ではヴァリアントレックスと呼ばれている。

「強い者、富める者こそ奉仕すべき——それが〈高貴なる者の義務〉よ。私はプリュー家のシャルロット、いつでも誇れる自分ではないと思うから」

だから、行く。この学院のために。胸は偽物でも、覚悟は本物だ。

「……なんて、ちよっと、かっこつけすぎかしら？」

はにかんだように、ちろっと舌を出す。双子は魅了されたようにシャルを見つめていた

が、やがて同時に口を開き、十字砲火のように言った。

「だったらなおさら、あせっちゃだめ!」「慎重に進めないと、すぐやられちゃう!」

シャルはばちばちとまばたきした。

「……すごく意外だけど、貴女たちって、わりと……理知的なの?」

「でしよでしょ?」「お姉さんだってわかった?」

えへん、と胸をそらす。その仕草が可笑しくて、シャルの緊張が少しだけゆるんだ。

「貴女たちの言う通りね。少し時間がかかっても、敵の内情を探り、手段を練り、そして実行するべきだわ。——これからも、助言をくれる?」

「うーん……どうする? 手伝っちゃう?」「そうしちゃう?」

双子は顔を見合わせ、うなずき合った。

「後輩のために、ひと肌脱ごう!」

そうして、三人の少女と二体の騎士は、密かに地下通路の奥に戻って行った。

5

「ねー、それで、具体的にはどうするの?」

小紫が無邪気な顔で訊く。健気にも、普段通りにふるまおうとしている。

その想いに答えたいと思いながら——雷真はまだ手の内を見せず、逆に訊いた。

「何かいい考えはあるか?」

雷真がノーブランクだと思ったのか、いろりと小紫は肩を震わせ始めた。

「あ、待てー!泣くな! 手はあるんだ! 危ないだけで!」

「雷真殿……硝子をどうか……どうか……えうう……っ」

「すぎるな! 大丈夫だ。俺たちにはほら、アテになる仲間もいるしさ!」

いろりをあやしつつ、部屋の入入口をあごで示す。こちらの会話が一段落するのを待って、イオネラが入ってくるころだった。

雷真は直前までの苦悩をまったく見せず、明るく言った。

「ありがとよ、イオ」

礼を言われるとは思っていなかったのか、イオネラはきょとんとした。

「夜々の命を拾ってくれたな。おまえのおかげで、希望が見えたよ」

「雷真くん……私の話、ちゃんと聞いてた? 夜々ちゃんは……もう……」

皆まで言わせない。雷真は背後の水槽を示して、微笑んだ。

「おまえのおかげで可能性の糸は切れてねえ。この装置、おまえが造ったんだろ?」

イオネラが言葉に詰まる。だが、白衣の胸をぽんと叩いて、

「ま、まあね。私を誰だと思ってるのかな? 花柳斎先生の一の子分だよ!」

「自称だけどな」

「じゃ、一番弟子」

「それは詐称だ」

「大ファン！」

それは間違ではない。本人が以前、言っていた。花柳斎が著した本はすべて取り寄せ、読破している。実際に夜々の腹を開けてみて、さらに詳しくなっているだろう。

「そのおまえですら、夜々は治せなかったのか」

「うん……私が読んだ本とは根本的な構造のところで、だいぶ違ってね。わかりやすく言う、メチルとエチルくらい違うのね」

「悪いが、全然わからん」

イオネラは責めるような目をした。もっと勉強しなさい、ということか。

「もちろん、人形師だって魔術師だから、技術のすべてを本に書いたりはしないよ。でも、制作のコンセプトって言うのかな……理念のところ、かなり違うんだよね。私が読んだ本では、先生はもっと冷酷っていうか、人形を使い捨てにしているところがあって」

——それは、硝子の方針とは違うのか？

「人形に生命なし」「省みる甲斐なし」とか、悪ぶった書き方をするのね。そこがアウトローっぽくて、若かりし頃の私に刺さったんだけど！」

「今も小娘だろ。硝子さんは、そうじゃないんだな？」

「うん、雪月花の修復力がいい例。夜々ちゃんの精瑠は本で見たのと違って、細胞分裂で何度でも修復できる。明らかに『死にくい』ように作っているの。例の（生命を奪う）

システムだって、雷真くんを犠牲にして、人形を強化してるわけでしょ？」

なるほど、まるで真逆だ。どちらが本当の硝子なのだろう？

雷真はあごに手を当て、先ほど思いついた疑問をぶつけた。

「なあ。仮に（一分）って制限が無視できて、手術に時間が取れるとして——どうすりゃ、夜々を元通りにしてやれる？」

「何はともあれ、心臓の穴を塞ぐのが先決だね」

「金剛力があつた場所だな？ 回路があれば塞げるか？」

「うん。だけど、びつたり形式の一致する、オリジナルの金剛力じゃないとダメ。たとえば、いろりちゃんの水面鏡（うめがみ）を入れたりすると——」

「拒絶反応？」

「ううん、抗原抗体反応。最悪アナフィラキシーショックを起こして、即死する」

金剛力の魔術回路は、夜々の体の一部なのだ。

（くそ……それを失くしちゃうなんて……！）

壊してしまったものは、仕方がない。今、雷真にできることは——

機中將に連絡をつけ、硝子の背景を聞かせてもらおう。

それから、散り散りになった仲間たちを集結させ、学院を奪還する。

雷真の言葉を聞いて、小紫は不思議そうな顔をした。

「学院、取り戻すの?」

「約束したろ。いざとなりや、俺が魔王^{おれ、ワイルドマン}になって、夜々^{やや}を治してやる」

「そっか……そうだね!」

「ですが、雷真殿は……」

いろいろがおずおずと口を挟む。

「(魔王殺し^{ブラッド・キル})」として協会にいらまれています。魔王の座をいただけるかどうか……」

「それも大丈夫だ。師範が討ち漏らしたって言ってる以上、ライコネンは絶対生きてる。

あいつを見つければ、協会も俺の手配を取り下げてくれるだろ。——つと、そーい、イオ、おまえの刑事裁判とか、協会の査問^{さもん}ってのは、どうなったんだ?」

「——ふふっ!」

ようやく普段の彼女らしさを取り戻し、イオネラは天真爛漫^{てんしんらんまん}な笑顔を見せた。

「雷真くん、やっと私のことも心配してくれたね!」

「ず……ずっと心配してたぞ?」

ちよつと後ろめたい気持ちになる。イオネラはほがらかに笑って、

「不問とまではいかなかったけど、ひとまず自由の身だよ。ただ、ラザフォード学院長がこのまま失脚^{しつかく}しちゃうと、ちよつとまずいね」

言われて、あの事件の結末を思い出す。ラザフォードに研究成果の一部を差し出すことで、イオネラは学院の庇護^{ひご}を取り付け、協会の風当たりをやわらげたのだ。

「……なら、やつぱ学院は奪還^{たつぐわん}しなくちゃな。あの狸親父^{たぬきおやじ}は地下に置いとくより、表舞台に置いといた方が安全な気がするし」

「そうしてくれば、僕としてもありがたいけどね」

いきなり第三者の声が割り込む。一同が声の方を振り向くと、倉庫の入り口の方から、銀髪の乙女が歩いてくるところだった。

アリスは途中で小走りになり、まっすぐ雷真の胸に飛び込んだ。

傷の痛みと驚きで硬直する雷真の鎖骨に、そつと頬^ほずりする。

「ああ、僕のライシン……無事でよかった……!」

「僕の」はやめろ。つか、その「よかった」は言葉通りに受け取っていいんだよな?」

「どういう意味だよ、この唐変木^{からへんぎ}!」

アリスは雷真の胸倉をつかみ、乱暴に引き寄せた。

かすかに潤んだ瞳で、じつとにらみつける。

「昨日、僕は言ったはずだけどね?」行動を起こす前に連絡を超越^{よここ}させてさ……!」

「いでっ!?」そこ縫^ぬったばっかでででで痛えって!」

機械義肢が生み出す怪力に耐えかね、雷真はアリスの腕を振り払った。

代わりにその手を握り、誠意を込めて謝る。

「心配かけて悪かった。——シンはどうした?」

「……突撃したまま職場放棄^{しつばくほうし}なんて、とんだ不良執事だね。クビにしてやろうか」

軽口を叩く。だが、彼女の目元に落ちた翳を、今の雷真は見逃さない。察するに、昨日の戦闘ではぐれたのだ。アリスを逃がす筈になったと推察できる。

「……さっきの続きだけだよ、おまえの親父、どうなってる？」

「王妃殿下に捕まったときは違うよな？ 今回は用心してただろ？」

「金薔薇に捕まったときとは違うよな？ 今回は用心してただろ？」

「そうでなきゃとちめてやる場所だけだね。……出てくるのをアテにした作戦は立てないよ。パパを計算に入れるのは、もう懲りたからね」

自嘲する。シンがとなりにいないせいか。アリスはひどく寂しそうに見えた。

「その、何だ……元氣出せよ」

「……今の『元氣出せよ』は、額面通りに受け取っていいのかい？」

「おい何で確かめた？ 俺も似たようなこと言っただけ！」

アリスは雷真の首に手を回し、上目遣いで見上げてきた。

「下手な慰めなんか言わなくても、僕を元気づけるのは簡単だよ？」

「……おい。何だ、この体勢」

「わかってるくせに♡」

べろり、と唇を舐める。みずみずしい輝きを見て、雷真はこくりと生唾をのんだ。イオネラが飛び上がり、白衣を脱ぎ捨てる。

「あつ、ずるい！ 雷真くん私にも！ 私にもチュ♡」

「まだしてねえ！ つか何で脱ぐ!? どこに所望してる!？」

イオネラを阻み、アリスを引きはがそうとしていると、不意に床に霜が降り、部屋中が真っ白になった。雷真は青ざめた顔で、冷氣の発生源を振り向く。

「……落ち着け、いろり。何を怒ってんだ」

「おお怒ってなどおりません。でですが、夜々が戻るまでは、私が責任を持って雷真殿の破廉恥なふるまいを阻みます」

「破廉恥なのは俺じゃねえよな!？」

「……清纯派ぶって、さりげなく夜々を持ち出すあたりが狡い女だね」

アリスが苦笑を浮かべ、するりと雷真の首から離れた。イオネラもまた、決まり悪そうに脱ぎかけの白衣を直す。

雷真は二人の頼れる仲間を見つめ、たずねた。

「なあ、おまえらの人脈とか機巧技術で、日本に連絡つけられねえかな？」

「それは——短時間で、という意味かい？」

「ああ。できれば、電話くらい手軽なのがいい。会話がしたいんだ」

「えー、地球の反対側だよ？」

イオネラは腕組みをして、思案顔で考え込んだ。

「そこまで大規模な通信インフラ、魔術を使ってもなかなか……中継器を空に飛ばして、ブーストかけるとか？ 儀式で空間ゲートを固定しておく？ あとは——」



「ひとつ、手っ取り早い方法があるよ」

アリスがさらりと言う。簡単そうな口ぶりとは裏腹に、表情は硬い。

「エリアーデ教授の言う通信用〈転送ルート〉——世界規模の高レベルインフラを持つてる連中がいるんだ。彼らに頼んで、借りるがいいさ」

「……やっぱ、それしかねーか」

奇しくも、雷真と同じ結論だ。イオネラもすぐに察し、大きく首を上下させた。

いろいろと小紫だけがわからない。いろいろが怪訝そうに訊いた。

「あの、連中とは……？」

雷真が明かした名前を聞いて、姉妹は真ッ青になった。

6

およそ十年ぶりに再会した男は、すっかり変わり果てていた。

硝子が男のものを去ってから、ずいぶん荒れた生活をしていたようだ。髪は白髪ばかりで、たくましかった肉体も細り、ギラギラと妖しい輝きを放っていた瞳は、今や死んだ魚のようだ。身なりはみすぼらしく、着古した着物はもうペラペラ——

酒にもすっかり弱くなった。男は二合で正体を失くし、だみ声で言った。

「おう、もう一本つけろ！」

「もう、おしまい。今夜はお帰りなさい」

硝子^{しょうこ}があしらうと、男は赤ら顔をゆがめ、ろれつ^{ろれつ}の回らない舌で怒鳴った。

「客が寄越せ^{よこせ}と言つてんだぜ。出さねえ方があるか！」

「お客さまなら大事にするわ。だけど、旦那は金子^{かねこ}をお持ちには見えないわね」

「客を値踏み^{ねづみ}みしやるか……。なら言つてやるが、俺は高名な人形師^{ねがし}さまだぜ？」

きゅつ、と硝子の胸が締めつけられた。もともと高慢で、野放図な人格ではあったが、こんなふう^{こゝろ}に、自分の名声を鼻^{はな}にかけるような男ではなかった。

硝子の沈黙を許可と受け取つたのか、男は左手で鉄瓶を引たくり、直接、口にくわえて飲んだ。――品のないふるまいが、硝子の胸をさらにえぐる。

あふれた酒があごを伝う。それを着物でぬぐい、男は荒んだ笑みを頬に刻んだ。

「俺がひとつ人形をこさえりや、華族の遣いが殺到したもんよ。ぜひに先生の作を売つてくさいと、頭を下げてな。鈴なりだつたぜ」

「……豪気ね。だつたら人形を造つて、稼いでからいらして頂戴」

「嫌だね。……人形造りはやめたんだ」

「なぜ？ そんな偉い先生が、どうして飲み代にも困っているの？」

男は濁った眼を畳に向け、ふてくされたように言つた。

「……飽きたからだよ」

「飽きた？」

「人形なんざ、くだらねえ。俺が造りたかつたのは、そんなものじゃねえ」

「まあ、おかしな方！ まるで駄々っ子^{だだっこ}ね！」

硝子は笑つた。本当に可笑^{おか}しかった。

こんな男を自分は怖れ、その愛を求め、苦しんでいたのだろうか？

「だけど、お代は頂戴^{ごうがい}しますわ。せめて一体なりと、造つていただかないと」

「そいつは無理な相談だ」

荒んだ笑みを浮かべ、袖に隠した右手を出す。

男の利き手は、もうなかった。

「酒代が返せなくてなあ。馬鹿^{ばか}どもが、もつたいねえことをしやがつたもんさ」

硝子は絶句した。機^{はり}は一体、何をしていたのか。彼の悲嘆はいかばかりのものだろう。この男の機巧技術は、帝国の将来を約束するものだったのに……。

「……何とも、お気の毒ね」

「同情なんざいらねえよ。どのみち利き手があったところで、俺はもう、ともにノミも握れなかった。酒が切れると指が震えるんだよ、ははっ！」

お手上げだ、というふう^{こゝろ}に両手をあげて、男は鉄瓶を放り出した。

「俺はもう……おしまいだ。お白州でも、死体置き場でも、連れてつてくれ」

「……お屋敷の女中人形はどうしたの。あれを売れば」

「とっくに売っちゃったよ。全部。屋敷ごとな」

「信じられるか？ 俺は人間を売ったこともある。自分の手でこさえた子どもだぜ。あんなガキを売り飛ばして……俺は……どうしようもねえ……！」

「……その子は、自分で奉公に出たんじゃない？」

「同じことだ。支度金は俺の酒代に消えたんだからな。つかよ……そんなのはまだ序の口……俺がその餓鬼に……へへ……何をしたのか……聞かせてやろうか？」

焦点の定まらない眼が小刻みに動く。それから五分——いや、実際にはもっと短かったのか。男が語った話は、ひと言ごとに、硝子の心を引き裂いた。

ようやく、わかった。男が硝子を邪険にしていた理由も。男が何をしたのか、彼がどうして壊れたのか。何を怯え、何を求め、何の罪を犯したのか——

男が人形造りをやめたのは、飽きたからではない。

絶望したのだ。仮説が間違っていたから。おぞましい罪を犯してまで立証しようとしたものが、失敗したから——間違っていたから！

「これでわかったら。俺は狂ってる……狂ってるんだ！」

げらげらと笑い出す。硝子の胸に、どうしようもない激情が込み上げ——
気がつくつと、ぱしんつ、と鋭い音が響いていた。

硝子が、男の頬を打ったのだ。

畳の上を転がり、呆然と見上げる男に、冷たく告げる。

「そこで、お待ちなさい」

きびすを返し、座敷を後にする。

「ちよいと姐さん！ 何があったの？」

騒ぎを聞きつけて、可愛がつっている後輩が寄ってくる。硝子は足を止めず、自分の寢床へ向かいながら、一方的に告げた。

「瑠璃、貴女には言っておくわ。私、今夜限りでここを出る」

「え——どうして!？」

「静かに、お客に聞かれるわ。——そんな顔しないで。落ち着き先が決まったら連絡するから。体を大事にするのよ？」

涙ぐむ妹分を置き去りにして、私室の押入れから、ずしり重い箱を取り出す。それを抱えて取って返し、再び男の待つ座敷に戻った。

男は赤くなった頬をさすりながら、まだ放心していた。その眼前に、どんとと乱暴に箱を下ろす。弾みでふたが外れ、大量の一円札が飛び出した。

呆ける男に、高圧的に言う。

「これだけあれば、材料も、工具も、設備も、整うでしょう」

「……何だと？ つか、こりゃ……何だ？」

硝子は着物の袖をまくり、自分の両腕を見せた。

「この通り、私にはまだ両手がある。震えずにノミを握れる」

「待てよ……おまえ、何を言ってる……？」

「くれてやると言ってるのよ！ お金も、私も！ 私が貴方の業を受け継ぐわ！」

「はあ……？ 何でそこまで……俺なんぞに——」

何かに気付いたように、男はあたりを見回した。

今さらながらに、自分がどこにいるのか、思い至ったように。

そして、すっかり酔いの醒めた顔で、初めて硝子の顔をまともに見た。

「おまえ……硝子……？」

「ええ、そう！ そして、このお金は——」

札束をつかみ、男の顔に投げつける。

「この十年、貴方がずっと突っ返していた——私の仕送りよ！」

男はまだ呆けている。硝子は焦れて、男の胸倉をつかんだ。

「無理やりにも受け取らせる。このまま犬死になんて、許されるはずがない……簡単に

死ねると思わないで！」

硝子は男を揺さぶりながら、激情のままに宣言した。

「貴方が築き上げたものすべて、私が奪ってやる！」

そうして、停まっていた時間が動き出し、再び二人の暮らしが始まったのだ。



Chapter 9 生か、死か

1



きょうろ

狂士郎との新生活を始めるにあたり、硝子は郊外に庵を買い、手を入れて工房とした。

旦那衆が客にいたので、大工も金物も、たやすく整ってしまう。

困難を極めたのはむしろ、肝心の人形造りの方だ。

「何べん言わせりゃ気が済むんだ！ 魂のこもった木型でなけりゃ、まともな精瑠に変換されねえんだよ！」

「魂って何よ!? そんなものの、嫌になるほどこめてるわ！」

「そうじゃねえ！ 何でできねえんだ！」

「わからないわ！ やって見せて！」

ノミや短刀が宙を舞い、互いの怒号が飛ぶ。それは戦場のような日々だった。

だが、硝子は心地よさも感じていた。この男と生の感情をぶつけ合い、対等の口をきいたことなど、少女時代には一度もなかったから。

そうして、幾星霜が過ぎたのか——

狂士郎は老境に差し掛かっていたが、硝子はなお美しく、艶やかに咲き誇っていた。庵はいつしか屋敷となり、庭では鳥や猫、魚や甲虫が遊んでいる。

それら小動物は、硝子が造った自動人形だ。目利きの傀儡師であっても、一見は本物と見間違えよう。それほど人形を、硝子は造れるようになっていた。

庭に遊ぶ人形たちを見て、榊が感嘆の息をつく。

「花柳斎の真骨頂よ。鳥も、獣も、蝶も、この娘も、生きておるようだ」

「このくらいで驚かれては張り合いがないわ」

そう言った硝子の姿がほやけ、見慣れない乙女に変わる。

——つまり、これも人形だったのだ。高度な眩惑魔術を内蔵している。

乙女の後ろ、何もない空間から硝子が現れる。榊はしばし、呆然とした。

「……桃源郷だな、ここは。驚嘆したぞ、狂士郎の娘よ」

相手を崩す。笑うと顔にしが寄り、流れた歳月を硝子に思い起こさせる。

壮年に入った榊は、着実に昇進を重ね、大佐にまで昇っていた。先の戦、大陸で大きな武功を打ち立て、間もなく將軍になると聞いている。

「狂士郎がああなつたときは絶望したが——これほどの弟子が育った。これで再び時代が動く。その技術、今こそ軍に売れ」

「ええ、もちろん。金食い虫の精溜をまともに扱えるのは軍だけだもの」

この先、精溜を發展させ、《神の子》にまで至るには、軍の協力が必要不可欠だ。

榊は暗れ暗れとした顔で、豪快に笑った。

「そうか——では、契約書を交わそう——ときに、雅号はどうする？」

硝子は込み上げる歓喜を噛み殺し、その名を告げた。

「決まっているわ。《花柳斎》よ」

「なるほど、二代目ということだな？」

「いいえ、私が花柳斎。私こそが、唯一無二の花柳斎よ。あの人も認めていること」

誇らしい気分で、奥の座敷を振り返る。

あの広間で、男は日がな一日、居眠りばかりしている。いつしか、硝子の手業に口出しすることもなくなった。自分の役目は終わったとばかりに。

「精溜は私の手で完成を見た。花柳斎は私が名乗るべきよ」

「……ふむ、それもいいだろう。こちらは何かと都合がいい」

榊が口の中で何か言ったが、硝子は興奮していて、気に留めない。

今こそ、狂士郎に言っただけだ。貴方のもはすべて私がもらったわ、と。

名も、業も、知も、誉も、彼のすべては私のものになった。

（ねえ、どんな気分？ 貴方が夢見たものを実現できるのは、もう私だけよ）

男が本当に造りたかったものを実現し得るのは、硝子だけだ。

だから、男がもし、すまなかったと言ってくれたなら——

あるいは、よくやったと誉めてくれるなら——

(貴方のために、造ってあげてもいいのよ。すべてを貴方に返しても……)

ふと、甲高い警笛が鳴り響いた。

軍人の櫓が即座に反応し、庭から屋敷へと突っ込んでいく。

何が起こったのか、わからない。銃声が響き渡る段になって、賊が侵入したのだとわかる。今さら警報結界が作動し、魔力の格子が床から突き立つ。しかし、トラップにかかるのは櫓の部下ばかりで、肝心の賊を捕らえない。

するりと檻をすり抜けていく影を、硝子は一瞬、視界にとらえた。

黒々とした体は、陽炎のように揺らめいている。あれは、いざなぎ流の――

式神のように見えた。では、曲者は陰陽師……？

とにかく、櫓を追って屋敷に戻る。と、つん、と鉄さびの臭気が鼻を突いた。

「くるな、硝子！」

櫓の警告は間に合わない。既に硝子は奥の間に入っている。

そこは一面、血の海だった。巻き上げられた御簾に、血しぶきが飛んでいる。狂士郎の腹には大穴があき、おびただしい血液があふれ出していた。

「狂士郎！ おい！ 気を強く持て！ おい！」

櫓があればどこまで取り乱すのを、硝子はこれまで見たことがない。

硝子は櫓を押しつけ、父を抱き上げた。……抱きしめることしか、できなかった。

父はほんやり硝子を見て、かすかに唇を震わせる。

「――何よ!? 何が言いたいのか!」

耳を近付ける。だが、父はうつすら笑っただけで、何も言わずに息を引き取った。

葬儀が終わるまで、硝子は抜け殻のように呆けて過ごした。

葬儀の手配をしてくれたのは櫓だ。何から何まで、つつがなく。葬儀が終わり、弔問客が帰り、片付けも済んでしまうと、屋敷は廃屋のようにがらんとした。

奥の間で放心する硝子の前に、櫓が正座して、頭を下げた。

「すまぬ。俺の失態だ」

その言葉で、忘れていた感情――怒りが甦った。

「……貴方のせいって、どういうこと? どういう意味よ! 思えば、ずいぶんと用意がよかったわね……。あの兵隊さんたち、どこから湧いて出たの!」

「落ち着け。すべて、うぬを護るためだ。うぬと、狂士郎を」

「知って……いたの? 誰かが踏み込んでくると……その可能性があると……!?」

それで、近隣に警護の兵を配していたのか。

頭に血がのぼる。知っていたのなら、なぜ教えてくれなかった!

「……若い時分より、俺は一貫して機巧魔術の必要性を訴えてきたつもりだ」

「知ってるわ! それが何!」

「だが、軍には機巧魔術を快く思わぬ連中もいる。一握りの人形使いしか扱えぬ兵器など、

信じるに足らぬ——むしろ危険だと主張する輩がな」

硝子は愕然とした。修行に夢中で、世間が見えていなかった。一般人はもちろん、ほかの魔術師にとっても、花柳斎人形は恐怖の対象となる。

「機巧魔術を否定する連中は、大艦巨砲——通常兵器の拡張をこそ望んでいる」
なぜなら、それはいざなぎ流と共存できる。いざなぎ一門の優位性を否定しない。

……いや、待て。冷静になれ。

憎しみに囚われそうになる自分を、硝子は戒める。敵を見誤れば、こちらが消される。もしいざなぎ一門が謀ったことなら、式神を見られるような失態を犯すか？

硝子は疲労のにじむ顔で、吐き出すように言った。

「俺が……急ぎすぎたのだ。花柳斎を畏れる者を、抑えきれなんだ……が、うぬの研究は奪われずに済んだ。そこだけが、不幸中の幸いか……」

「幸いなんて言わないで！ 要は、軍の内紛？ そんなことのために……!？」
激情に駆られるまま、思わず煙管を取り上げて、硝子のひたいに投げつけた。

硝子はよけようとせず、金属の火口が眉間を割った。

「くだらない！ くだらないわ！」

「……くだらなくはない。愚かなことでは、あったがな」

垂れる血をぬぐおうとせず、硝子は事務的な口調になって、一方的に言った。

「うぬにはしばらく軍の護衛がつく。俺が心から信を置く者たちだ」

「今さら……護衛なんて、いらぬ……っ」

「駄々をこねるな。もはや、うぬ一人の命ではない。護衛がいらぬと言うのなら、一刻も早く、己で身を護れるようになれ」

硝子は唇を噛んだ。花柳斎人形は確かに高性能だが、やはり使い手の技量に左右される。硝子が凄腕の魔術師であつたなら、あるいは……。

「優れた知覚を有し、敵に先んじて行動できる人形を造るのだ。うぬを警護できる強さ、隠形や欺瞞の術、そしていかなる敵をも殲滅できる、強大な攻撃能力を持つ人形を。うぬが力を見せつけるほどに、名声がうぬを護る。かつては誰もが狂士郎を恐れ、うかつな手出しをしなかった」

硝子は顔を歪めた。それじゃあ、まるで——

(……私が弱かった、せい？)

煙管で割られたひたいに、硝がそつと手を触れる。

血に汚れた指を二本、重ねて前に伸ばす。将棋の駒を持つ手つきだ。目の前に将棋盤があるかのように、ぱちり、と空想上の駒を置く。

硝には盤面が視えているのだろうか。硝子はこらえきれず、ひと筋、涙を流した。
父と暮らすようになってから、それは初めての涙だった。

「……う？」

自分がどこにいるのかわからず、フレイは首を傾げた。

天蓋てんがいつきのベッドに座っている。枕元にリボンを見つけたので、ひとまず、普段通りの髪形に結う。体が重くて、上手く動けない。よくよく見れば、腕も脚も包帯まみれ。点滴の導入管が固定されていて、今も栄養が送り込まれている。

ぼふ、と長い鼻先がベッドにのせられる。ブロンドの美女を思わせる、毛並みの美しいコリー犬だ。鼻先を撫でてやると、コリーはしきりにフレイの手を舐めた。

「リビエラ……みんなは、どこ？」

リビエラは鼻を鳴らして、お座りしただけだ。——彼女にもわかっていない。

背中の装甲板が失われ、皮膚が露出していた。そこだけ毛が短く、ちくちくする。欠損部位が、復元されている。こんなことができるのは……。

「……カリユーサイ先生？」

「あーら、やつとお目醒め？」

ノックもなく扉が開き、小柄な少女が入ってきた。

後ろに骸骨を連れている。その少女を見て、フレイはびくつとした。

「う！ ドロシー・マクガフィン……！」

高度な死霊術ホウレイジュツを扱う《十三人》の一人。オルガにくつついていた少女だ。

骸骨が点滴を交換してくれる。フレイはびくつきながら、ドロシーの言葉待った。

「ふん、顔色は悪くないわね。しぶとい女……胸がでっかいと抵抗力も強いわけ？」

ドロシーが毒づく。フレイはこてん、と首を倒した。

「……貴女が、助けてくれたの？」

「だだ誰があなたなんか！ 死神を引き止めたのはおばあさまだし、体をどうにかしたのはお姉さまだし——ああ、あの凛々しい眼差し！ 素敵！ ああーんっ♡」

ドロシーは恍惚こうこうとして、くねくねと身をよじった。

フレイの困り顔に気付き、咳払いをしてごまかす。

「ま、まあ、あたしが助けたと言えないこともないわね。せいぜい感謝しなさい。あたし、あなたを一月も世話してやったんだから」

「ありがとう——うっ!」

ワntenポ遅れて、仰天する。

「一月……も!」

窓の外を見やる。斜めに差し込む光は冬特有の鈍い日差しだ。置き時計は正午くらいを示しているのに、太陽はもう傾いて、暖色を帯びている。

先ほど体を重く感じたのは、ひと月の安静で、筋肉が衰えていたからか。不安のタネを次々に思い出し、フレイはたまらなくなつた。

学院はどうなった？ ライシンは？ ロキは？ 夜々ちゃんは……!?

「お、お、教えて、ドロシー！」

「何をよ——って、慣れ慣れしく呼ばないでよ!」

「みんなは、どうなったの？ 学院はまだ、ある？」

スルーされて、ドロシーは不愉快そうな顔をしたが、質問には律儀に応えた。

グローリアが新学院院长になり、アスラが新学生総代に就任したこと。四分の一近い学生が学院を去ったこと。それから、シャルが戦死扱いになっていること。

戦死と聞いても、フレイは動揺しなかった。シャルはフレイよりずっと強いから、大丈夫に違いないのだ。それは指名手配中という雷真も同じ。そもそも、手配されていることが、生きている証だろう。だから、心配なのは——

「ロキは……どうしてるの？」

「さあね。アスラにボコにされて、人形を失くしたって話だけ——いい気味！」

めまいがした。ケルビムを破壊された……あのロキが？

フレイの動揺を面白がって、ドロシーはさらに意地悪を言った。

「まだ捕まっていないって言うけど、時間の問題よね。剣帝のやつ、そのうち学院に突っ込んで、黒刀に返り討ちにされるわよ」

「う……？ どうしてロキが、黒刀と戦うの？」

「そりゃブチ切れるでしょ。大好きなお姉ちゃんを殺されたと思ってるんだし？」

そうか。フレイがまだ生きていることを、ロキは知らないのだ！

フレイは取り乱し、ベッドを飛び出そうとした。衰えた足に力が入らず、転げ落ちそうになるのを、リビエラの背中が支えてくれる。

「ちょ……馬鹿じゃないのっ？ そんな体で動けるわけないでしょ！」

ドロシーが怒鳴る。フレイは「おや？」と思った。

「自覚持ちなさいよバカ！ あんた、死ぬ寸前だったのよ! 今だって重傷よ! そんなこともわかんないで、どこ行くつもりよ！ バカバカ！」

罵声の裏に潜む感情を、音に敏感なフレイはすぐ気付く。

じつと見つめていると、ドロシーは居心地が悪そうに目をそらした。

「……な、何見てんのよ。そんな、犬みたいな目で」

「ドロシー、お願い。私を、学院に連れてって」

「あーはいはいそういうことね——って、はあ!」

ノリがいいのか悪いのか、ドロシーはまた怒り出した。

「大人しく寝てなさいバカ！ ってゆか、ここフランスだし？ わかる？ 英国じゃないのよ？ あたしに大恥かかせたヤツに、そこまでしてやる義理はねーわよ!」

言い返せない。フレイは悲しくなって、涙ぐんだ。

「う、ロキ……っ」

「ちょ……あーもー、泣かないでよ……っ」

「うつ、うつ……」ちらつ。
「しょ……しょーがないわねー」

あつさり折れる。だが、ドロシーが安請け合いする前に、別の声が飛んできた。

「許しませんよ、ドロシー。勝手に話を進めるのは」

別の少女が入ってくる。東洋人のような、つややかなストレートの黒髪が美しい。人形のように愛らしい容姿だが、彼女を見てドロシーは震え始めた。

「お……お赦してください、おばあさま——」

ぴきつ、と少女のこめかみに血管が浮き出す。少女の影から巨大な《骸骨の腕》が飛び出して、ドロシーをわしづかみにした。

「この痴れ者……またおばあさまと……っ！」

「ごめんなさいっお・ね・え・さ・まー！ いたたた痛いっ、痛いのー！」

ドロシーの悲鳴に驚き、リビエラがベッドに飛び上がった。震えるリビエラをあやしながら、フレイは黒髪の少女にたずねる。

「貴女は……誰？」

「お礼が先ではなくて？ Dワークスの実験動物」

「う……ごめんなさい。助けてくれて、ありがとう」

相手は満足した様子で、つつましい胸に手を添え、不敵に笑った。

「聞き覚えもありましょう。わたくしはセフィラ・バルゼル・アブラカサス」

呪文のような名前を舌の上で転がして——フレイは言葉に詰まる。

「黒……薔薇……!？」

「当然、知ってますわよね。おまえの身柄は今、この黒薔薇の手中にあるんですの」

可憐な微笑を見せる。その麗しさが、名を聞いた今では無性に恐ろしい。

「聞きなさい、娘たち。先ほどの英国渡りの件ですが——許可します」

「ええっ!? よ、よろしいんですの、おば——お姉さま？」

「もちろん。わたくしは善い魔女ですもの。フレイとやら、おまえはおまえが望む通りに、彼の側にあるがよろしいわ。時が満ちる、そのときまで」

彼——とは誰のことだったのか。

黒薔薇は含み笑いを漏らし、瞳を妖しく光らせた。

「最後に笑うのはこの私。貴女の思い通りにはさせませんわよ、糞ババア！」

むつとする策謀の臭い。だが、フレイの心はもう海の向こうにあった。

一刻も早く、ロキと合流したい。無茶をしていなければ、いいのだけれど……。

「仮校舎の施工はすべて完了、講義も再開されました」

「送電線、復旧しています。市庁舎との連絡も問題ありません」

「新ゲート敷設のメドが立ちました。間もなく着工です」

幕僚たちから続々と上がってくる報告を、グローリアは学院長公邸で聞いていた。

「……はかどっていますね。よくやってくれました」

「ありがたきお言葉」

幕僚たちが誇らしげに腰を折る。だが、グローリアは不満だった。

（おかしい……どこか）

何かが、気になる。だが、その正体がかめない。

教授も学生も抵抗の素振りはなく、むしろ進んで復旧作業に力を注いでくれる。彼らは不眠不休の働きぶり、二心あるとは思えない。

この一か月でこちらの態勢は磐石となった。一万二千の師団が飢えないような、確かな兵站が確保されているし、兵はそのまま学院復興の労働力にもなっている。警備と捜索の両方でも確実に機能し、学院は日ごと往時の姿を取り戻していく。

だが、グローリアが身柄を押さえたいと思っている者が、一人も捕まっていない。

金薔薇の孫オルガ、魔剣の主シヤルロット・ブリュー、魔王殺し赤羽雷真、市街に潜伏中の剣帝ロキ、ラザフォードの娘アリス——

彼らの能力は侮れない。大人顔負けの実行力に加え、強い意志を持っている。これまでに彼らがしてきたことを考えれば、何らかの行動を起こす——はずなのだが。

グローリアはソファにゆったりと腰を下ろし、幕僚の一人に問いかけた。

「アンリエット・ブリューはどうなっていますか？」

「ここにおります、陛下」

虚空に亀裂が走り、門扉のごとく割れ、奥から少女が現れた。

白いドレスを身にまとい、薄化粧している。作法にのっとって一礼。ふるまいも容貌も洗練されていたが、機械のように無表情で、人間味が感じられなかった。

グローリアは軽く息をのみ、かたわらの幕僚にささやいた。

「今の転移——人形なしでやるとはね。心臓は、もう？」

「いえ、交換しておりません。現状、《解放剤》の定期投与のみです」

「それで、ここまでとは……。さすがはイライザの孫、そしてエドガーの子……」

それを微笑みでまぎらせ、グローリアはアンリに語りかけた。

「見事です、アンリエット。そなたはよい精霊使いになりました」

「お褒めにあずかり、恐悦至極にございます」

（……そのぶん、心を失くしてしまったようです）

これでは自動人形と大差ない。だが、戦闘能力だけならば、既にヘイゼルより使いどろがある。グローリアは再び幕僚に顔を寄せ、また小声で訊いた。

「精神状態は安定しているようですが、運用に支障はないのですか？」

「はい。むしろ扱いやすいと思います」

「結構。ですが、魔劍^{マジム}の竜は納得しないでしよう。人格調整の必要があります」
「仰せの通りにいたします」

そんなやりとりになど、アンリは興味もない様子で、ただ虚ろな瞳をグローリアに向けている。グローリアは自らアンリの手を取り、となりに座らせた。

（皮肉ですね、エドガー。あの女が産んだ娘を……わたくしは愛らしいと感じる）
髪を撫で、肩を抱き寄せ、人形のように愛でながら、考える。

この娘にこれだけのことをされているのに——シャルロットは奪還にこないのか。
やはり不気味だ。なぜ、動かない？

（動けないのであれば、こちらの買いかぶりだったという、それだけの話ですが）
あるいは機巧都市を脱出し、尻尾を巻いて逃げたのなら……。

考えているうちに、先月のエドマンド撤退がますます不可解に思えてきた。
赤羽雷真^{アカハズラマコ}が何者かに連れ去られたと同時に、エドマンドも退却を選択した。グローリア

の迎撃をはねのけ、これからというところで。あまりに見切りが早すぎる。
（……嫌な状況ですね。相手が、最善の手を指さねば、読み違うこともある）

熟練者が素人に負けるのは、大抵それが理由だ。

やはり、不穏分子は一掃しなくては。彼らには、早々に行動を起こし、馬脚をあらわしてもらいたい。そのためにも——そう、動かぬならば、動かせばよい。

「新聞社に連絡を。号外を出させます」

突飛な命令だったはずだが、幕僚は疑問を挟まず、ただちに承った。

「文面はいかように？」

「（女王）即位戴冠の儀を明日、この機巧都市にて行うと」

さすがに、幕僚たちも驚きをあらわにした。

急すぎる。エドマンドの身柄も拘束できていないというのに。しかも、この機巧都市で行うと言うのだ。前例や手続きを無視しすぎている。

それだけにメッセージ性が強い。すなわち、王立機巧学院の全権をグローリアが握る、という宣言だ。各国の反発は必至、賢老会議は紛糾するだろう。

それが狙いだ。これでもなお動かぬならば、アスラを魔王^{ワイマン}にするとやってやる。
それでも動かぬならば——いや。

（そのときには戦争が起きているでしょう。そして、それもまた一興）

世界大戦に突入すれば、対外戦争の常として、国内世論はグローリア支持に傾く。そう
なれば、不穏分子たちなど封殺できる。一石二鳥とはこのことだ。

ジャガーノートの投入には、開戦後しばらくかかるだろうが、投入さえできてしまえば、
もはや大英帝国に敵はなく、オリエント以东はすべて第二のインドとなる。

そのときこそ、グローリアは（皇帝）を名乗る。

一瞬、気が遠くなった。世界帝国の玉座に座す、麗しき女帝——それはたまたまなく甘美
な空想だ。世界統一の偉業を成せば、グローリアの名は未来永劫、人類史が続く限り語り

継がれていく。エリザベス、ヴィクトリアの名も霞む。

グロリアは無表情のアンリを抱き寄せ、口の中でつぶやいた。

薔薇の師団も、この世界も、わたくしが手に入れて見せましょう——
どこまでも続く、野心のままに。

4

フレイが死んだと言われても、ヘイゼルは何も感じなかった。本当に何も。罪悪感もない代わりに、達成感もない。

（まだ剣帝を倒してないから？ そう……きつと、そう）

自分を納得させて、今日も学院長公邸へと向かう。

薄暮どき。夕陽に染まる学院長公邸を、裏手から見上げる。

公邸はグロリアの居所であり、今や政務を執り行う建物だ。警備が厳重で、呼ばれなければ近付くこともできない。ヘイゼルは林に身を潜め、ぼんやり窓を見上げた。

ここからなら、公邸のホールをのぞくことができる。時折り窓に映るのは、魔術や舞踏、礼法の鍛錬をする少女の姿——

「……アンリエット」

最初にここで彼女を見つけた日、アンリはすぐに隠れてしまった。三日目には、ぎこち

なくだが、微笑んでくれた。

アンリにも不安があるはずだ。姉の生死はわからず、頼みに思っていた者は皆学院から消えた。養育の名目で王妃の手元に置かれ、かこの鳥として飼われている。

主を待つ犬のような気持ちで見上げていると、アンリが窓際に寄ってきた。

精霊術で感知したのだろう。じつと見下ろし、目視でこちらを確認。しかし、何の感慨もない様子で、再び窓際を離れていく。

一切、表情の変化がない。路傍の石を見たって、もう少し感動があるだろう。

ヘイゼルのことなど、もう覚えていないのだ。あるいは、自分自身のことさえ。

（ふん……いい気味ね、暴竜。おまえの妹は、もう戻らない）

ヘイゼルは胸中で毒を吐く。——本当は、少し泣きたい気分だった。

アンリエット・ブリューには、密かに特別な感情を抱いていた。通じ合えるというか、傷を舐め合えるというか、要するにその……友達に、なれるんじゃないかと。

鼓膜の奥に、幼い日に聞いた、父の声が甦る。

「この子にはまるで才がない。私には不要なものだ」

あの頃、父の視界にヘイゼルはいなかった。ヘイゼルは数多い婚外子の一人にすぎない。だが、手術を受けたいと言うと、父は一転して微笑みかけてくれた。

それからの日々は、夢のようだった。

「素晴らしい」「おまえは特に優秀だ」「どの個体にも勝る」「私の最高傑作だ」

震えるような歓喜は、最初の絶望を知っているから。

だから、ヘイゼルにはわかる。力を求める気持ちも。己に失望することも。

ヘイゼルの任務はアスラと同様、魔王位を目指しつつ、王妃の〈目〉として学院を内偵すること。王妃はブリュー家にご執心なので、あの姉妹を監視する機会も多かった。

学院でアンリを見かけたとき、〈地味な子〉の葛藤が手に取るようにわかった。

アンリが抱えている鬱屈を、理屈ではなく肌で感じた。——ヘイゼルもまた、同じ痛みを知っているから。

（貴女も力を得て……魔法の道具になるのね）

むしろ、心を失くしてよかったのではないかと思う。心など邪魔になるだけだ。

自嘲を浮かべ、きびすを返したとき、もう眼前に刃があった。

まったく気配を感じさせず、誰かが追っていたのだ。体を投げ出し、刃をかわす。黒刀を抜く間もなく、切っ先が顔に突きつけられた。

「……驚いた」

目の前にいるのはロキだ。少し痩せたか。だが、衰えてはいない。逆に研ぎ澄まされている。一か月の潜伏生活が、彼にスカウトの実地訓練を施したようだ。

見たところ、武器はブレード一本。Dワークスの機械天使が持つ武装だ。

魔法繊維のマントを身につけているが、気休め程度の隠密性しかない。つまり、こんな貧弱な装備で、軍の警備網をかくぐり、ヘイゼルの位置をつかみ、襲撃を仕掛けてきた

ということだ。ここは公邸のすぐ側——学院の最重要区画なのに！

自分に同じことができるだろうかと考えて、ぞっとした。

「何をしに、ここまで……」

「フレイはどうした」

ヘイゼルは思いきり挑発的に、嫌らしく笑ってやった。

「馬鹿な質問。フレイは死んだ」

ロキの紅い瞳——ヘイゼルと同じ色の双眸に、どす黒い殺気が宿る。

「……いい顔。それと同じ気持ち私を感じた。お父さまが捕まったときに」

養父の逮捕と姉の死を同列で語る——彼にとって、それは極めて重い罪だろう。ロキは抑揚の消えた声で、形式的に質問を重ねた。

「死体を確認したか？」

「もちろん。確かに死んでいた」

嘘をつく。ヘイゼルも気絶していたので、死体は確認していない。

「死体はどこにある。案内しろ」

「……あきらめが悪い。死んだものは死んだ」

ブレードの表面に火炎が走る。前髪を焦がされ、焦げ臭い匂いが漂った。

脅しても無駄。……場所は知らない。死体がどうなったかも」

これは嘘ではない。ロキの瞳がわずかに収縮した。どうやら、その可能性を察したよう

だ。すなわち、フレイは——生きているのではないかと。

彼の気が散った一瞬に、ヘイゼルは黒鞘を跳ね上げ、ブレードを弾いた。

「父なる王の声を聞け——この一撃は剣帝を殺す！」

黒刀に内蔵された〈勅命詔書〉^{ロイヤルデクレット}を起動。強烈な暗示がロキの精神を浸食した……はずだ。もはや、止めることは不可能。ヘイゼルは勝利を確信し、正面から斬りかかった。

その一撃を、ロキは素手で受け止めた。

「——!?」

父仕込みの〈魔鞘〉^{マジック}を用いた一発だった。石畳すら切り裂く刃を、ロキはつかんで止めている。見れば、輝く気流のようなものがロキの手を保護していた。

（この収束、魔防……私以上の密度で！）

「こんな程度の手品を破れず……オレは姉貴の〈家族〉を……！」

ロキがひとりごちる。ほんの一瞬、瞳が哀しげに揺れた気がした。

「ち、父なる王の声を聞け！ おまえは手を放す！ 私を解放する！」

ヘイゼルは必死に魔力をしばったが、ロキは一向に王命に従わない。

勅命詔書はハイリスク・ハイリターンの実験的な魔術だ。音声がトリガーになっているため、認識されなければ効果を発揮しない。そうした「防衛されやすい」限定条件だからこそ、代わりに強大な威力を示し、ロキほどの魔術師にも有効だった。

その弱点を突かれている。だが、手段がわからない。ロキはどうやって音を阻んでい

のか。たとえば——念動で耳栓をした？

「くたばれ」

ロキがブレードを振りかざし、内部に仕込んでいるらしい、火炎魔術を起動する。その瞬間、ロキの魔力循環に微妙な乱れがあるのを、ヘイゼルの天眼がとらえた。

ロキの鼓膜に、穿孔がある！

鼓膜が破れていれば、聴覚は無効。ここまでの会話は読唇術……いや、彼ほどの魔術師が使う天眼ならば、音波の認知も可能だろうか。

いずれにせよ、自分で鼓膜を破ったに違いない。その覚悟が恐ろしい。

ヘイゼルは死を予感した——が、ロキは攻撃を中断し、飛び退いた。衝撃波が飛んできて、ロキが立っていたあたりをスタスタにする。

「——ほう。師団にもそうはいませんよ、今のをかわせる兵は」
公邸のテラスから、王妃グローリアが歩いてくる。

右手にぶら下げた幅広の剣が、まだ魔力の残滓を漂わせていた。

「あきれた腕です。魔術も用いず、どうやって潜り込んだのか……。入念な下準備あつてのことでしょうが……若さが出ましたね。血気に逸り、誘いに乗った」

ふところから新聞紙を取り出して、捨てる。

本日発行の号外新聞だ。大見出しには「妃殿下將軍、いよいよ戴冠！」とある。グローリアはヘイゼルとロキを交互に見て、目を細めた。

「ブロンソンはよい研究者でした。これほどの才を持つ者を幾人も生み出したのですからね。フレイの死には、わたくしも胸を痛めましたよ。生きていれば、この国の明日を支える、優秀な魔術師になったでしょうに」

ロキはブレードの切っ先を上げ、グローリアに狙いをつけた。

「白々しいことを言うな。殺すぞ」

「無礼なこと。ですが——」

あたりに視線を向ける。

既に周囲は軍の魔術師に包囲され、自動人形が臨戦態勢になっていた。

「その烈しさ、嫌いではありません。我が軍門にくだりなさい」

「……なに？」

「そなたほどの魔術師、殺すには忍びなく——ぜひとも欲しい」

王妃の瞳には熱にうかされたような興奮があった。……悪い癖だ。グローリアは優れた兵器や技術、人物に執着し、とにかく手に入れようとする。

魔具一本で、軍の包囲網は破れない。ロキは当然、

「断る」

ヘイゼルは呆氣に取られた。この状況で、時間稼ぎすらせず、即答するのか？

「……わたくしに吝嗇の趣味はありません。十二分の対価を支払いますよ？」

ロキは嘲笑った。侮蔑的にグローリアを見る。

「笑わせる。オレが欲しいものを、あんたに提供できると言うのか？」

「ふふ、姉を戻してやることはできませんが——この子なら、どうです？」

手を上げ、合図を送る。空間に扉のような亀裂が生じ、少女が転移してきた。

「お呼びでしょうか、女王陛下」

アンリエット・ブリュー！

相変わらず感情の動きがなく、瞳は虚ろで、冷たく、何も見ていない。

そのアンリの首元に、グローリアは剣を置いた。喉に刃が当たっているのに、アンリは反応せず、されるがままになっている。

からみつくような視線をロキに向け、グローリアは誘った。

「そなたがわたくしのものにならぬと申すなら……わかりますね？」

視線が交差する。ロキはブレードの柄を握りしめ——

無言で地面に投げ捨てた。

「ひゃあんっ！」

と、自分でも赤面してしまうような可愛い声が、シャルの喉から飛び出した。
「冷たいわよロッテ！ もうちょっと火力を上げて！」

『私はボイラーじゃないわよ！ ほんっと、精霊遣いの荒い……っ』

文句を言いながらも、ロツテはたき火から炎の精を呼び集め、降りそそぐ水の温度を上げてくれた。地下水が適度に温められ、広間が湯気が立つ。

壁を変形させて目隠しにしただけの個室で、シャルはシャワーを浴びている。なめらかな玉の肌が水滴を弾き、きらきらとシャンデリアのように光った。

「あーつかれたー！」「シャルー、ごはん盗ってきたよー」

がやがやとやかましく、少女たちの声がする。シャルはぎくりとした。

「あれー？」「シャル、入浴中？」

「そ、そうよ。絶対、のぞかないでよ！」

『のぞかないもん』

『のぞいたら絶交よ！』

「のっ、のっ、のぞかないもん！」

のぞく気だったのか。シャルは嚴重に胸を隠し、早々に入浴を終えた。

髪を拭きながら広間に戻ると、テーブルに遅めの昼食が用意されていた。

生ハムとレタスのサンドイッチ、揚げ芋と魚のフライ、マッシュポテト——復旧された学生食堂から、昼食の残りを失敬してきたのだ。

食前の祈りを捧げ、三人の少女と騎士人形二体が食事を始める。

「残り物わびしー！」「自分で注文したい！ トマトソース、いい匂いだった！」



双子が口々に不満を言う。シャルはふふつと笑って、
「食べ物に文句つけてると、バチが当たるわよ」

「シャルは平気なの？」「何で？」

「人はパンのみにて生きるにあらず。私、粗食には慣れたの」

シャルの家庭環境に思い至ったのか、双子は憐憫のこもった眼差しを向けた。

「シャル、可哀相……」「成長期に栄養が足りなかったんだね……！」

「どこ見て言ってるのよ！ 消し飛ばされたいの！？」

胸を隠してツツコミを入れた途端、シャルは悲しい気分になった。

——いや、胸のことではなく。シグムントの不在を思い出したのだ。

思えば、シグムントと離れて一か月も過ぐすなど、生まれて初めてのことだ。

かつてのシャルなら、三日だって耐えられなかった。そう考えると、この双子とロッテに感謝の気持ちわいてくる。そして、もちろん、あの二人にも。

（夜々……不思議ね。ケンカばかりだったのに、今すぐ貴女に会いたい。アンリや、日輪や、フレイや、アリスにも。それから——）

雷真の顔が思い浮かんで、あわててかぶりを振る。

（あつ、あいつはいいわよ別に！ おまけよ、おまけ！）

「きゃんっ、冷た！」「シャル、水飛ぶ！」

「あ、ごめんなさい……。貴女たちも浴びる？ 私、お湯を出せるようになったの」

体内でロッテが嫌そうな顔をしたが、シャルは気にせず、双子に微笑みかけた。

「嫌になるわよね、まともなシャワーもないなんて。サバイバル実習のおさらいを、学院ですとは思わなかったわ」

広間を見回す。壁や床に呪式を書き込んで、魔術的に隠蔽してある。手順も手段も学院で学んだものだ。ただし、この方面では軍がエキスパートであり、グローリア本人が地下探索に訪れたら、すぐさま見破られるだろう。

幸運にも、このあたりが搜索されたことはない。グローリアの興味はもっぱら大空洞の方に向いているらしく、そちらにだけ調査隊が派遣されていた。

「お風呂は後でいいよ」「先に、今日の作戦会議を始めよう！」

お腹が落ち着いたところで、日課の話し合いが始まった。

シグムントをいかに奪回するか、という相談だ。それぞれが持ち寄った情報をもとに、日々計画を精練している。と言っても、ここ二週間はまるで進展がない。

（いよいよ、どん詰まりって感じね。この先は不利になる一方……）

グローリアの体制固めは着々と進行している。学生たちも、教職員も、一か月前のことなど忘れてしまったかのようで、かつての落ち着きを取り戻しつつあった。

「妃殿下の支配が既成事実化しそうだわ。早くシグムントを取り返さないと……」

「どうやって？」「王妃さまの部屋に忍び込む方法は？」「封印を解除できる？」「警護はどうかわすの？」「武器はある——」

「ああもう左右から言わないで！　さんざん話し合ったじゃない！」

話し合った結果、名案は出なかった。出ていたら、とつくに実行している。

むしろ、調べれば調べるほどに、不可能に思えてくるのだ。普段なら、雷真かアリスの知恵を借りるところなのだが……。

（私が考えないとダメよね。この二人、そういうのは頼りにならないし）

「あー失礼なこと考えてる！」「私たちを馬鹿にしてる！　コドモ胸のくせに！」

「それ何語よ！　胸は関係ない——っていうか、子どもは貴女たちでしよう！」

いつも通り、ぎゃあぎゃあと言いつつ合う。何とも不毛だ。

「と、とにかく、留守を狙うしかないわ。王妃さまに怪我でもさせたら国賊扱い確定よ。

英国に居場所がなくなるわよ」

「今さらだよー」「シャルはもともとそうだし。これから泥棒するんだし」

「魔剣は代々ブリューの財産よ！　武力で奪い取るなんて許されないわ！」

「なら、堂々と返してもらいに行けばいいんじゃない？」

「こ、交渉の通じる相手じゃない……と思うわ」

震え声でつぶやく。先月の戦いで、シャルは機巧師団の自動人形を大量に破壊している。修繕費を要求されたらと思うと、戦慄を禁じ得ない。

「王妃さまの留守を狙うとして——問題は封印よ。シグメントは鳥かごに入れられていた。かごは（檻）の中に安置されている。檻は銀行の金庫みたいに堅固なやつで、重さは目算

で数百キロ。材質は高純度の魔抗鋼。

障害を数えているうちに、絶望感が高まってくる。双子も考え込んでしまった。

「こじ開けるのは無理だよね。解除キーがいるでしょ」

「なら、王妃さまをゴーストしちゃおう？」

「勝てるわけじゃないでしょう。っていうか、それこないだ却下したわよ」

双子はめげず、さらにアイディアを出し合う。

「王妃さまに魔剣を持ち出してもらえばいいんじゃない？」

「頭いい！　たとえば——火事を起こすとか？」

「それも却下したやつ！　注目が集まりすぎるわよ！」

「じゃ、こっそり忍び込んで——檻ごと持ち出せばいいよ！」

「それいい！　魔術が効かないなら、ノコギリで切り離しちゃおう！」

「それも却下したわよね？　ひと晩かかるし、音だつてするし、超重いし！」

「もーっ、シャルってば文句ばっかり！」「シャルも考えなよ！」

「かつ、考えてるわよ……思いつかないだけで……」

言ってて哀しくなってくる。シャルは人差し指を立て、申し訳程度に提案した。

「じゃ、じゃあ、現地でシステムを解析して、解除キーを割り出すのはどうかしら？」

「な、なら……呪式を書き換えるとか？」

「解除キーもわからないのに!」「システム解析もできないのに!」
立て続けに言われて、シャルはヘコんだ。シャルは学力の大半を努力で稼ぐ秀才タイプであり、閃きとか発想力は人並みなのだ。まして緊張を要する敵地で、封印魔術の呪式を見抜き、改竄するなど、とても不可能だろう。

シャルは半ベソをかいて思案する。檻を壊すには封印が邪魔で、封印には魔術が効かない。銃や爆弾で破壊しようにも、調達にも設置にも時間がかかるし、物理攻撃だけで破壊できる確証がない。魔術師にとつては、魔術の方が圧倒的にアテになる。

雷真なら、こんなときどうするだろう。あいつは確か、『逆』から考えて——
ばあん、と分厚い扉が開いたような気がした。

「そうよ、逆……逆からなら……!」

思いつきは急速に形を取り始める。あるいは、天啓だったのか。この天啓が今日くだったことは、偶然ではないのかもしれない。と言うのも——

「ねえ。その包み紙……号外? ちよつと見せて!」

りんごを包んでいた新聞紙が、今日発行の号外だった。

「えつと、『グローリア妃殿下が女王に即位される運びとなった。この輝かしき式典は、明日、我らが機巧都市にて執り行われる。——」

文面を目で追ううちに、シャルの指が震え始める。

「ドイツ、フランス、オーストリアなど主だった国々は歓迎の意を表明。女王は今後も

引き続き学院長を兼務する」——って冗談じゃないわよ!」

新聞を叩きつける。ここは王立機巧学院、女王になつてしまえば、人事も予算も思うがままだ。こんな乱暴な計画、本当に実現するのだろうか?

「そう言えば、地上は賑やかだったよ」「何かおめでたい空気だったね」

双子が納得したように言う。シャルは自分でもわかるくらい、洪面になった。

「のんきすぎよ……世界大戦の遠因になるかもしれないつてのに……!」
もはや、一刻の猶予もない。

シャルは覚悟を決め、双子を交互に見つめて言った。

「ありがとう。貴女たちのおかげで、家族の心臓は取り戻せたわ」

「そ、そのことならもういいよ」「……どうしたのシャル、急に」

「貴女たちは学院を離れて。私は今から、シグムントを取り返しに行く」
語調に悲壮な決意を感じ取ったようだ。双子の血相が変わった。

「危ないよ!」「絶対、軍に見つかっちゃう!」

「覚悟の上よ。大丈夫、軍より先に仲間が見つけてくれる」

「そんなの、わからないよ!」「もし、見つけてもらえなかったら——」

「大丈夫。みんな、無茶ばっかりやる連中なの。この新聞を見て、あいつらがじつとしているはずはない。私だけ出遅れるなんて、絶対に嫌!」

双子はごくりと息のみ、確かめるように訊いた。

「信じてるの?」「そこまで? あいつらを?」

「……ええ。不思議ね。私、こんなにも運命を委ねてる。自分以外の誰かに」

シャルの口元が、自然とほころぶ。

「学院に入ったとき——ううん、もつと前から、私はひとりぼっちだと思ってた。なのに今、自分や、家族や、この国の運命を、他人に委ねて——」

「他人じゃないよ」

双子の声が同時に響く。二人はほっぺたをくっつけ合って、シャルに言った。

「友達なんでしょ?」

「……そうね。その通りだわ」

「なら、私たちも手伝う!」「私達だもん!」

「そ、そうだけど……この記事をよく読んで。ドイツは即位に賛成なのよ」

ここで双子が王妃に背くのは、本国への敵対行為にならないか。

双子は自信たっぷりに、シャルより微妙に豊かな胸を反らした。

「私たち、シャルたちが勝つと思うもん!」

「勝つ方に味方した方が、国益に適うもん!」

つまり、信じてくれるということか。

シャルは双子の自動人形を見上げた。この二体はラスターカノンすら弾き返せる、対象のベクトル操作に特化した完全統制振動を秘めている。

シャルの中にはロツテもいる。意地悪を言いながら、支えてくれる守護精霊が。

——なぜだろう。状況は絶望的なはずなのに、とても心強い。

「ありがとう。なら、貴女たちの力を貸して。シグムントを奪い返す方法を思いついたの。その騎士の力を使つて——」

そのとき、シャルの言葉が邪魔するように、頭上から重低音が響いてきた。

荒れ狂う魔力の波が、地下通路を揺さぶる。

「この地響き……早速、戦闘だわ!」

6

姉はまだ、どこかで生きているのではないか?

おぼろげな希望が、この一か月、ロキの命をつないでいた。野良犬に等しい潜伏生活に耐え、味のわからない食事を摂り、屈辱の中で生き永らえてきた。

そして今、ようやく姉の手がかりを得たというのに。

魔女グロリアが、アンリを人質に取って、目の前に立ちほだかっている。

一か月ぶりに見たアンリは、グロリアの操り人形と化していた。

ロキは必死に頭脳を回す。人格を破壊されたのか。それとも、制御装置のようなものがあるのか。魔術による人形化か。いずれにせよ、アンリの自我は極端に弱い。

アンリは姉の数少ない友人だ。この場で始末されては、姉に合わせる顔がない。やむなく、「**〈形見〉**」のブレードを捨てて。グロリアはゆつたりと微笑み、「賢明です。ハイゼルともども、わたくしに仕えなさい——」

一気に問合いを詰める。素手で殴りかかってくるとは思わなかったのか、グロリアの反応は鈍い。それでも十分な速さで、幅広の剣でロキを迎え撃った。

がきんつ、と金属同士が噛み合う。

ハイゼルとグロリアがそろって目をむく。ロキの手にブレードが戻っている！

理屈は簡単、捨てたと見せて、念動で引き寄せただけだ。〈約束された子ども〉の魔力総量と、ロキ自身の魔力の湧えがそれを可能にする。

力任せに押し込み、アンリから遠ざける。グロリアは皮肉げに笑った。

「……アンリエットを救いたくはないのですか？ そなたの友人でしょうに」

「解放しろ。オレは謙虚で寛大だが、卑劣な王には仕えない」

「……無礼な子どもよ。このグロリア、社交界では四つの形容で知られています。若く、麗しく、情熱的で——何より苛烈であるとね！」

ぐつと魔力を膨張させる。ロキもまた、魔力を高めて攻撃に備えた。

（悪いな、姉貴……あんたを捜すのは、もう少し後だ！）

今ここでアンリを奪い返す。そうすれば、仲間たちが学院を取り戻そうとするとき——その日は必ずくる——彼らの助けとなるだろう。

魔力をブレードに注ぎ込む。ブレードが灼熱し、炎を噴き始めた。

「笑止……そんな即席の魔具一本で、わたくしに歯向かうなど」

カッと目を見開く。魔力の塊が飛び、ロキはあっけなく弾き飛ばされた。

——強い。一対一でも分が悪いのに、あいにく、一対一ではない。

ロキの着地を狙い、ハイゼルが背後から斬りかかってくる。かすめた刃は地面をえぐり、土くれごとロキを打ち上げた。

木の葉のように舞うロキに、アンリが風を叩きつけてくる。

まさか、アンリにまで攻撃されるとは。逆巻く暴風がロキを巻き込み、庭木をへし折る。この威力、シャルの精霊術マジックという勝負だ！

その隙に、さらにグロリアの斬撃がきた。聖剣ストラトキャスターの一発が魔防を破

り、ロキの全身を粉々に引き裂く——寸前。

ふと、懐かしい少女の背中が見えた気がした。

風に泳ぐ髪が。白い衣装が。両手を広げてロキをかばう、少女の後ろ姿が——

……目の錯覚だ。実際にロキを護つたのは、白い盾だった。

細密な彫刻が施された金属の盾。グリゼルタのステイグマに似ているが、中央に回転式拳銃の弾倉のような、特異なパーツが組み込まれている。

繊細な見た目に反して、それはストラトキャスターに難なく耐えた。

脅威を察し、グロリアが距離を取る。ハイゼルもまた、じりつと後退した。

「つふー、きわどいタイミングだったけど、怪我はないよね？」

軽い口調で誰かが言う。白衣姿の少女が一人、公邸の屋上で手を振っていた。

天才エリアーデ教授だ。イオネラは両手で拡声器を作り、

「どーお、それ？ 先月は断られちゃったけど、今はすごく欲しいでしょ？」

ロキは宙に浮く盾を眺めた。実に癒だが——確かに欲しい。

「私は王妃さまより気前がいいからね。ロキくんが私の軍門にくだって、その子の教育係を引き受けてくれるなら、十二分な対価を払っちゃう♡」

「対価……？」

「ちゃんと、ロキくんが一番欲しいものをね！」

悪戯っぽくウインクして、首を引つ込める。入れ替わりで誰かが現れ、あろうことか、虚空に身を躍らせた。真珠色の髪で、無駄に大きな膨らみを持つ少女——

背後でヘイゼルが息をのむ。そのおかげで、自分だけが起きている、都合のいい幻覚ではないと理解できた。

ロキは盾に跳び乗り、そちらに飛んで——

姉を、空中で受け取めた。

姉はロキの頭を抱え込み、無闇なやわらかさで窒息させようとする。

その体温。湿った呼吸。重さ。やわらかさ。

実感として理解した途端、涙腺にきた。このオレが……実戦の最中だと言うのに！



「……重いぞ、バカ姉貴」

「うっ!？」

「どこまでも駄目な姉貴だ。……心配する身にもなれ」

フレイは微笑み、もう一度、ロキを抱きしめた。

「さあ、上がってきて! とにかく、高いところへ!」

イオネラが叫ぶ。ロキだけでなく、ヘイゼルとグロリアも我に返った。

包囲の軍が今さら行動を始め、ガンガン撃ってくる。ロキは姉を抱きかかえたまま、盾を操って射線をかわす。すぐ側で公邸の外壁が砕け、石の破片が飛んだが、姉の前面装甲でばよんと跳ね、事なきを得る。

ひとまず屋上に逃れ、そこでイオネラを回収。両手に一人ずつ少女を抱え、ロキはさらなる高所を目指した。墓石のような重要機巧保管施設が、ちょうど近くにある。

あそこなら、地上からの攻撃が届かない。そちらに向かいながらロキは怒鳴った。

「なぜフレイを連れてきた! 荷物になるだろう!」

「う……ごめんなさい……」しょぼん。

「あ、あなたには言っていない!」

イオネラはにこにこ、不気味な笑顔を見せる。

「フレイちゃんがいらないと、ロキくん、信じなかっただろうからね!」

ロキは言葉に詰まった。確かに、生きていると口で言われただけでは……。

「それともうひとつ、大事な理由があるよ。とりあえず——」

「逃げるんだな?」

「ぶー、ロキくん評価Cだね。しばらく暴れます!」

正気を疑うようなことを言う。ロキは屋上に着地して、戦場を確認した。

相棒の亡骸は既になく、激闘の痕だけが生々しく残っている。バリケードになりそうなものはない。ここでグロリアを迎え撃つのは不利に思えた。

「離脱した方がいい。この盾で高空に逃れれば、学外に脱出できる」

「まだだめ。逃げるにしても問題があるの——この子の名前、どうしよつか?」

ロキはつんのめりそうになった。だが、イオネラは大真面目だった。

「二つアイディアがあつてね、『ハシエム』か『アスモデウス』か」

「こたわるな! 名前なんてどうでもいい!」

「魔術名は大事なんだよ! この先、ロック解除コードになるんだし! その二つが気に入らないなら——ええっと、フラガラッハに對抗して『デュランダル』とか?」

そうじゃないだろう! と思っってしまった、ロキは自分自身に驚いた。

この新型に、相棒との接点はない。面影を重ねることも、同じ役目を押しつけることも、正しいとは言えない。だが、もし新たに名付けるなら——

「……ガブリエルでも、ジブリールでも、好きにしろ」

「あつ、それいい!」

イオネラが反応してくれる。イオネラは嬉しそうに、盾の装甲を撫でた。

「正規のエンジェルタイプじゃないから、ガブリエルの異形がいいよ。だからジブリー——異端者の剣ジブリー！」

盾がきらめき、一瞬で姿を変えた。

装甲板の噛み合いがゆるみ、再び閉じたときには、鳥の翼のようなハンドガードを持つ、優美な大剣になっていた。ケルビムよりふた回りも小ぶりだが、密度を増した精緻さが、かえって凄みを増している。刀身の根元が開き、どんでん返しの要領で頭部がのぞく。顔つきはケルビムよりも人間に近く、養父が用いたルシファーに似ていた。

「う……盾から、剣に変わった……！」

仕様を知らない姉が驚く。仕組みを知っていたロキも、そのスムーズな形態変化には目を奪われた。恐ろしいのは、この変形は「おまけ」のようなもので——イオネラの意図はまったく別のところにある、ということだ。

大剣は切っ先を下に向け、コンクリートに突き刺さる。イオネラが支配権を手放すのを待ち、ロキは大剣の柄を握った。

「オレがわかるか、ジブリー？」

「Yes, Master, I'm ready」

ロキのあざが外れる。イオネラは得意げに笑った。

「使い慣れたOSの方がいいでしょ？ だいぶ賢くなってるけどね」

「……本当に、他人の傷口をえぐるのが好きな女だ」

だが、応にも、思い出させる。何一つ、忘れさせてくれない。

己の弱さから、逃げてはいけない。ロキ自身、名前に込めたのは、その想いだ。

「飛んでみろ、ジブリー」

ごっ、と灼熱の噴射音を響かせ、大剣がスムーズに浮き上がった。

ロキが細かな噴射制御をせずとも、翼を構成する羽の一枚一枚が整流板の役目を果たし、意図した通りに飛翔する。ケルビムとは雲泥の違いだ。

「う!? ロキ……この自動人形！」

フレイが驚いた声を出す。鈍臭い姉も、さすがにひと目で気付いたか。

「何と見事な機巧よ……誠に、素晴らしい……！」

——予期した通り、グロリアの声がする。

やはり、追ってきた。グロリアは恍惚として、ジブリーに見惚れていた。

「もう一度だけ確認しましょう。その人形ともども、投降するつもりは？」

姉を背中のかばい、ロキは王妃をにらみつけた。

「ない！」



Chapter 10 周到に謀る



1

狂士郎の葬儀が済んで間もなく、大勢の部下を引き連れて、榊が屋敷にやってきた。

囚人服の男女を七人、担架で部下に運び入れさせる。彼らはいずれも深い眠りに落ちていて、死んだように動かない。

不吉な予感におののきながら、硝子はたずねた。

「……ここは病院じゃないわよ。この人たちは何？」

「死刑囚だ。先ほど、死刑が執行された」

そういうことになっている、という意味だ。

「これを材料に〈はぐれ人形〉を——禁忌人形を造れ」

硝子は錯乱しそうになった。生きた人間から部品を取り出せと……!?

「それは……殺人だわ……!」

「今さら何を言う。うぬが本土で安らいでいるとき、我ら軍人は大陸の戦場にいた」

「それは……違うでしょう! だって、これは……同じ、日本人——」

「国が違えば何だと言うのだ!」

硝子の甘えた言葉を、榊は一蹴した。硝子を揺さぶり、強硬に迫る。

「この者らは既に法律が殺した。それでも気がとがめると言うなら、とどめは俺が刺してやる。だから、人形を造れ!」

狂士郎がなぜ軍への協力を拒否したのか、やっとわかった。

「……帰って頂戴。そんな外道なふるまい、あの人に頼まれたって御免だわ」

「頼んでなどいない。誰もな」

がちやり、と物騒な音が聞こえ、撃鉄が起きる。

榊が手にした拳銃が、硝子の心臓に狙いをつけていた。

「これは命令だ。うぬに拒否権はない」

「……おあいにく。私に命令できる人間なんて、もうこの世には存在しないの」

「いい加減にしろ! 狂士郎が築き上げたものを、このまま投げ捨てる気か!」

硝子の肩をつかみ、榊は粘り強く論ずる。

「よく考えろ。今の俺にうぬを護ってやれるだけの力はない、ここは早晩、彼奴らの手に

落ちる。書物も、知識も、技術も、すべて葬り去られるか——奪われる。狂士郎とうぬの

業が、軍の息がかかった、別の人形師のものになるのだ!」

顔面に水を叩きつけられたような気がした。

あの人のものが、奪われる? あの人を殺した連中に?

「させない！　させないわ！　あの人のものよ！　全部！」

「そうだ！　だから護る！　俺と、うぬとで、護るのだ！」

そう、横取りされてたまるものか。そんなことは許さない。だが――

「だけど……人を殺すなんて……私には……っ」

「やれ！　うぬが狂士郎の後継者を名乗るには、力を示すしかない！」

「禁忌にこだわらなくたって……私の人形で……！」

「うぬの人形で？　こんな玩具でか!?」

櫛の眉間から念動の砲弾が飛び、人形の乙女を弾き飛ばした。

どんなに高性能能と言っても、やはり使い手に依存する。魔術嫌いの上層部を納得させるには、誰が使っても強力な、本当の意味で〈兵器〉となる自動人形が必要だ。

景色がぐるぐると回る。櫛の顔が十数人ぶんのそれになり、口々に攻め立てた。

「造れ！」「復讐したくはないのか！」「力を示せ！」「うぬの価値を！」「狂士郎に報いるときだぞ！」「さあ――」

「硝子！」

ふっと、心の中が静かになった。

すべてが死に絶えたような、何もかもを焼き尽くされたような、そんな静寂。

「――わかったわ」

からっぽの心で、硝子は答える。

「造りましょう――人間の肉で」

そうして、禁忌人形（バンドール 魔富士）の製造が始まった。

死刑囚の胸から心臓を摘出し、かりそめのボディで保存する。

硝子は人を殺したことがない。だが、禁忌の研究自体は初めてではなく、過去にも経験がある。精瑠の扱いも熟知しているの、臓器の移設はわけなくできた。

持てる力のすべてを注ぎ、禁忌人形造りに没頭する。

些細な失敗も許されない、難しい仕事だ。だが、人形師とは業の深い生き物で、困難を乗り越えるのは楽しかったし、新たな創造は刺激的な作業だった。

搭載する魔術回路は、亡き狂士郎の集大成（天手力）。死刑囚の心臓、精瑠のボディ、

究極の魔術回路を持つ人形は、抜群の魔力親和性と運動性能、半永久的に単独行動が可能
な自律性を備え、何より領域支配が可能な殺戮兵器として完成した。

富士演習場でのお披露目で、軍の高官たちは一様に言葉を失った。

山を切り崩し、地盤を砕き、砲兵隊を容易に蹴散らす。人の心を持たず、命令には極めて従順。人形使いがいなくても、独自の判断で行動する。

軍は硝子を気に入り、最高の待遇を保証した。硝子はつかの間の安寧を手にし――

私は一体……何ということをしてしまったのか。

するべきではなかった。失敗だった。私は誤った！

柵の尽力で、轟富士は本土防衛に回された。だが、いつ戦線に投入されてもおかしくはない。そうなれば、あれは人を殺す。何千、何万という人間を、あれは殺せる！

硝子は泣いた。狂土郎が死んだときでさえ、こんなに泣かなかった。

死刑囚から心臓を取り出した瞬間の、肉の手触りが手に残っている。

指にこびりついた血の臭いが消えない。洗っても、洗っても！

どうすればよかったのだろうか？ これから、どこに向かえばいいのだろうか？

教えて。教えてください。先生――

暗闇の中に、その姿が浮かび上がる。幻影だとわかってはいたが、硝子は怒鳴った。

「何とか言ってよ！ 人でなし！」

だが、男は答えない。皮肉げに硝子を見ているだけだ。

硝子はますます猛り、泣きじゃくりながら、男を責めた。

貴方が衣食に事欠かず、あたたかいお布団で眠れたのは、誰のおかげ？

どうして黙っているの？ 何か言ってくれてもいいじゃない！

私は貴方のために修行に耐えた！ 耐えて業を受け継いだのよ！

「誉めてくれても、いいじゃない……っ」

たった、ひと言でいい。

すまなかったでも、ありがとうでも、よくやったでもいい。そのひと言で、私の人生は十分すぎるほど報われた。闇を背負って生きていくことにも、きっと我慢できる。



闇の中で嗚咽を殺し、硝子は己を抱きしめる。

いつからこの屋敷は、こんなに静かになったのか。

——闇が深い。誰も、私を救えない。

だって私は、生まれたときから呪われているのだ。

2

その話を、雷真は榊中将本人の口から聞いた。

——と言っても、電話越しだ。機巧都市のはずれ、古びた教会のロビーで受話器を握りしめている。かたわらには、モコモコのコートをかぶった小紫もいる。

「……本当なのか、今の話？」

沈黙がいやに長く感じられる。地球の反対側なので、遅延するのは当然だが……。

『事実だ。麗富士は俺が硝子を脅して造らせたもの。先代花柳斎の名義でな』

つまり、榊と硝子は一蓮托生の共犯者。硝子が榊にわがまを言えたのも、単に優秀な人形師である以上の、「共犯」というつながりがあったのだ。

「硝子さんは……何で結社に合流したんだ？」

『結社に——』

榊は何か言いかけたが、途中でやめ、おそらくは別のことを言った。

「うぬの直感に正鵠を射ている。情報部の頭——菅生少将に〈石〉が渡るのを怖れたのだろう。あやつは俺とは相容れぬ、岩清水大将の懐刀だ。ふん……俺自らが英吉利に向いておれば、かような面倒は避けられたものを」

機巧都市を歩く榊の姿を、雷真は夢想した。

榊は巨漢だ。還暦も近いというのに筋骨隆々、歩けば巨象のような地響きが立つ。密偵の指揮官にはまったく向いていない。雷真は苦笑しつつ、さらに訊いた。

「〈石〉ってのは、俺が盗ってきたアレだよな？ 何なんだ、あれは？」

『実物を見ぬうちは何とも言えぬわ。だが、聞く限りでは靈魂精製の要石——そうだな、狂士郎が永らく求めたもの、とだけ言っておく』

「靈魂？ 要？ 詳しく教えてくれ」

「餓鬼の知ったことではない！」

理不尽な雷が落ちる。まあ、日本にいた頃から慣れっこだ。

「全然わからねえ——けど、硝子さんが抱えてるものは……わかった気がするよ。お手間を取らせて悪かったな、中将閣下」

「うぬ……言葉遣いは学んでおらぬようだな……」

「むしろ忘れたぜ、日本語なんざ」

軽口を叩く。怒鳴られると思って受話器から耳を離すと、笑い声が聞こえた。教会の薄暗い廊下に榊の哄笑が響く。いっそ、不気味な現象だ。

「あのあばずれも、さすがに窮しておるだろう。うぬが力になってやれ」

「ああ。やるなと命令されても、やるつもりだ」

互いに挨拶もなく、無言で受話器を置く。見計らったように、廊下の奥からヒールの音が響いてきて、黒コート姿のキンバリーが姿を見せた。

「済んだようだな。知りたかったことは、知れたかね？」

「ああ、助かった。恩に着るぜ、キンバリー先生」

「新しい恩を着る前に、着込んだぶんを脱ぎたまえ」

雷真は酸っぱい顔になった。確かに、着ぶくれた恩義がひどく重たい。キンバリーは雷真の肩に腕を回し、なぶるように言った。

「そもそも、礼より謝罪が先だろう？」

一生忘れないだろうな。老婆心からの忠告を無視した上、私の任務を妨害し、あまつさえ走行中の列車から叩き落としてくれたんだ」

「そ、その節はその……スミマセンデシタ……」

「ごめんで人が生き返るなら、世界大戦など起こらないだろうよ」

「悪かったって！　つか、叩き落としたのは俺じゃねえだろ！　それに、あんたたちなら簡単には死なないって信じてたんだ」

「我々はな。だが、ロンドンの軍人たちはどうだ？　死傷者が出ただろう？」

言葉に詰まる。確かに、雷真がエドモンドと王城を襲撃した際、犠牲が出ている。雷真

が直接殺したわけではないが——それは言い訳にすぎない。

小紫がしょんぼりと肩を落とす。彼女の八重霞は、襲撃の役に立った。

哀れに思ったのか、キンバリーは少し声の調子をやわらげて、

「君たちに責任を押しつけるのは酷だな。我々がきつちり務めを果たしていればよかったのだし、花柳斎殿を追いつめたのも協会側の落ち度と言える。ただし——」

そこだけは譲れないとばかり、駄目を押す。

「君に手を貸すのは私のリスクだ。それは覚えておけ、〈魔王殺し〉くん」

本来ならば、雷真は今すぐ拘束され、英国に突き出されても文句は言えない。

「ひとまず、協会は監視——の名目で、君の行動を黙認する。せいぜい感謝することだ。君と同じくらい悪知恵の回る、あのお嬢さまに」

「アリスに比べりゃ、俺なんか素直な方だよ」

「根性のひねくれ具合なら、いい勝負だと思うがね。君が持ち込んだ〈ライコネン生存の証拠〉——どうせでっちあげなんだろうが、こちらとしても誤認逮捕は勘弁だ。君が自発的に出頭してきた以上、まずは真偽を確認しなければならぬ」

まさにアクロバット。情報断片を集めた日輪と、それを生かしたアリスの力だ。
(こりゃ、ますますあいつらが頭が上がらねえな……)

最近の二人はやたらと積極的なので、正直悩ましい。ここで夜々が復帰したら、本気の修羅場に入らそうな予感がした。

そんな明るい未来予想図を描けるようになったのも、いい兆候だと自分で思う。

「今後は行動に気をつけたまえ。君が何かやらかせば、私が処分されるんだ」

「……わかった。気をつける」

至極真面目に言ったのに、キンバリーは噴き出した。

「なるほど！ やはり君には、こういうやり方が一番効果的らしい」

「ぐぐ……まあ……な」

「せいぜい私を大事にしてくれ。そうすれば、少しは便宜もはかってやれる」

どこからかメモ紙を取り出して、指で弾く。

「日付とアドレス？ ゼムリン市……って、どこだ？」

「オーストリア南端の街だ。その時刻、その広場で、オーストリア皇太子の閱兵式がある。おそらくそこで、花柳斎殿が皇太子暗殺を企てるだろう」

小紫の肩が、びくつとはねた。雷真も啞然としてキンバリーを見る。

「本当……なのか？ そんな、でたらめなことが……」

「忠誠心を試すため、最初に過酷なミッションを与える——結社ではありがちなことだ。

今回は足抜け予防の意味もあるんだろう。そこまでやらかした御仁は協会も保護できない。本当に実行されてしまえば、花柳斎殿は二度と太陽の下を歩けまい」

試すような視線を寄越す。小紫もさすがのように雷真を見た。

雷真はさして気負わず、自然体で言った。

「そんな真似はさせない。もちろん止めに行く」

「いいのかね？ 行けば、学院奪還作戦に参加できないぞ？」

キンバリーは厳しい口調で、さらに踏み込んでたずねた。

「王妃が即位すれば、名実ともにこの国の最高権力者だ。おそらく親政を布く」

「そうはさせない。そっちは、俺の仲間が邪魔をする」

確信を持って言い切る。キンバリーは疑わしげに眉をひそめた。

「今回ばかりは面子が足りんだろう。ゼルダは教授会のもとで療養中——と言えば聞こえはいいが、実質は拘禁されている。剣帝も、その姉も、はねつかえりの恐竜娘も、どこを

ほつきき歩いているのか——生きているのかすら」

「あいつらは絶対生きてる。そして、間に合う」

「……なぜ、そうまで言い切れる？」

「俺が信じているからさ」

「答えになってないな」

「なら、こう言おう。魔術師の直感ってやつだ」

とほけて答える。キンバリーの口元が、ふっとゆるんだ。

「一人前の口をきくようになったものだ。だが、学院が取り戻せるとして——花柳斎殿をどうやって連れ戻す？ 護衛のサムライ・ソードマンは超人と聞いたが」

「真つ向からやるさ。慣れたもんだよ。毎日ポコポコにされてたんだから」
 「私はバカが嫌いだ。あちらには金薔薇もいるんだぞ？」

「——ま、そうだよな」

「東欧は金薔薇の本拠地だ。あれは糞に群がる銀蠅のような女でね、世界大戦の引き金が引かれる瞬間はかぶりつきで見物したがるだろう……」

「一瞬、キンバリーの瞳の奥に、冷たい炎が閃いたような気がした。」

「奴は必ずくる。花柳斎殿を取り戻すということは、金薔薇を倒すということだ」

「大丈夫だ。俺には世界最高の自動人形が——二人もついでる」

キンバリーは表情を曇らせ、小さくため息をついた。

「せめて、三体いればな……」

小紫がかぶりつき。キンバリーはかぶりを振って、

「まあ、好きにやりましたま。君が無能だったときは、私と老兵で何とかする」

「老兵——って誰だ？　つか、あんたも……ついてきてくれるのか？」

「魔王殺しの容疑が晴れるまで、別行動ができとは思わないことだ。それに、引率の教師がいれば何かと心強いだろう？　私は君の担任だぞ、（下から）「番目」？」

初めてキンバリーと挨拶を交わした、あの日のことがフラッシュバックした。

「お互いに残念だが、君の担任になった」

（……残念、どころか）

じんわりあたたかいものが胸に広がる。くすぐったくなつて、雷真は笑った。

「あんたが担任でよかったよ。おかげですつと、楽ができた」

「ああ、おかげで私は苦労続きだった。手間のかかる劣等生だよ、君は」

「今はもう劣等生じゃない。そうだろう？」

「今の雷真が劣等なのは、筆記試験の成績だけだよね！」

小紫がからかう。雷真はひどく情けない顔になったが、キンバリーは珍しく相好を崩し、可笑しそうに笑っていた。

黒コート of 魔術師に先導されて、雷真と小紫が廊下の奥に消える。

見送るキンバリーの背後に、金色の瞳の男が立った。

キンバリーの上司に相当する人物だ。男は雷真の背中を眺め、感慨深そうに言った。

「ますます、いい面構えになったな、彼は」

「そうでしょうか。相変わらずの阿呆面ですよ」

「かつての彼は、己を捨てていた」

——よく視ている。男の言う通り、雷真は常に捨て身で行動してきた。

男は眼光をやわらげ、慈しむような目をした。

「献身と自棄は違うものだ。本人が大切に思うものを捧げると、塵芥のように思うものを押しつけるのでは、自ずと結果に違いが出る」

夜々を失くして、雷真も学ぶところがあつたのだろう。それはひよつとしたら、天眼を開いたこと以上に、大きな収穫だったかもしれない。

「先の楽しみな男だよ。——我々も出立の準備をしよう。バルカンはずいぶん遠い」

何気なく言われた言葉に、キンバリーは目を見張る。

男は片目をつむり、笑つて言つた。

「君の執念深さに神父が折れたのだ。これで勝手に行くことはできなくなつたな？」

「折れた？ そんな可能性があると……ひよつとして、貴方が何か……？」

「意見具申が認められただけだ。この短時間に論文九通——経済、政情、人道、歴史の各方面から金薔薇を非難する事実上の陳情書。枢機卿たちもほだされたようだね、世界大戦はどうあれ、金薔薇の介入は阻止すべし、という結論に至つた」

「……ありがとうございます、山鳩の同胞」

「礼は私が言うべきかも知れない。大戦を回避できたなら、それは君の功績だ」

先月の葛藤が嘘のように、気持ち晴れる。珍しく口が軽くなり——長らく気になつていたことを、ついに誤りてしまう。

「山鳩の同胞、貴方のその瞳のことですが」

肩越しに黄金の瞳がこちらを向く。キンバリーは続けて、

「機巧医学の定義ではステージCの魔力焼け——に相当すると思います。魔力に焼けた瞳は紅くなるのが常ですが、度を越した運用をすると、そんな色になるとか」

ちらりと宿敵の姿が脳裏をよぎる。魔女アストリッドもまた、その特徴を持つ。

「私の教え子に、そういう瞳をした男がいるのです。常時ではなく、魔力を高めたときにのみ、その色になるようですが」

「そういうこともあるだろう。何が気になる？」

「彼はまだ学生です。瘴気に触れたわけでもなく、貴方や金薔薇に比べれば、実戦経験はるかに浅い。紅を飛び越して黄金に変色するとは、とても……。ですから、私は異能の一族の特徴ではないかと考えました。赤羽一門のような」

「なるほど。それで？」

「……（シユメルの民）では、ありませんか？」

もしもそうなら、それは忌まわしい記憶を呼び覚ます単語だろう。

沈黙が重い。キンバリーはさらに言葉を足した。

「インドのはるか西方、バビロニアに起源を持つ一族です。人体の（門）を解放すること、最終的には百人ぶんの魔力を発揮するという……人より神に近い存在。聖書に現れる悪魔の名も、彼らの猛威を今に伝えるものだから」

男は普段通りの穏やかな表情で、ぼん、とキンバリーの肩を叩いた。

「そんな名の一族は、もうこの世に存在しない」

「……そうでしょうとも。大英帝国が減ばしたのです」

彼らの末裔がインド大反乱に手を貸したため、大英帝国には激震が走つた。その脅威は

高官たちの心胆を寒からしめ、執拗な残党狩りの動機となった。

大反乱から半世紀を経た今も、シユメル^{シユメル}の恐怖は語り草になっている。

「協会は生き残りを密かに保護したと聞きます。できれば、彼の保護を……」

「気の毒だが、それは不可能だ。その彼が本当にシユメル王^{シユメル王}シヤラダ^{シヤラダ}の末裔^{末裔}ならば、協会は抹殺しなければならぬ」

「……………!?」

「それが大英帝国と魔術師協会の取り決めなのだ。——仕事に戻ろう。教父のお気持ちが変わらぬうちに、我らは世界大戦を阻止しなければ」

腑に落ちないものを感じながら、キンバリーは大人しくうなずいた。

3

グローリアの胸を、あふれるほどの興奮が満たす。

あるいは戴冠式以上に心躍るものが、目の前にある。大剣型自動人形——先ほどまでは盾の姿をしていたもの。可変機構も精緻だが、それ以上に機能が素晴らしい。

(かような奇跡が機巧で可能ならば、ジャガーノートにも大火力を搭載できる……！)
解析のためにも、これは無傷で手に入れた。何としても。

「アンリエット。きなさい」

グローリアの声に応え、アンリが転移してきた。それだけで、フレイはもちろん、ロキとイオネラにも躊躇^{ちゅうちゆ}が生まれる。

「う……アンリ、様子おかしい……」

「ああ。どういうわけか、王妃の操り人形だ」

「精神操作系かな？ ロボトミー^{ロボトミー}手術じゃないよね……？」

少年少女の不安を感じ取り、グローリアは含み笑いを漏らした。

「さあ、子どもたち。これ以上、この娘を傷つけたくはないでしょう？」

「だからジブリールを渡せと？ 反吐^{へど}が出る提案だ。王の言葉とも思えない」

ロキは取り合わず、せせら笑った。

「そんなにジブリールが気になるなら、性能を直に体験させてや——」

「ロキくん！ 逃げよう！」

イオネラがロキの腕を引っ張る。ロキはぽかんとした。

「……ここで退く？ 暴れると言ったくせに……バカな！」

アンリに視線をやる。だが、イオネラは譲らず、

「ここで取り戻すのは無理だよ！ 今は私を信じて、退いて！」

「……わかった」

ロキはジブリールを盾に変形させ、姉とイオネラを抱えて、跳び乗った。
屋上から虚空へ飛び出す。完全統制振動の速度にはグローリアも目を見張った。あれで

は魔女にも追えない——が、そのくらいは計算に入っている。ストラトキヤスターに魔力を蓄え、斬撃と同時に解放する。

刀身から撃ち出された衝撃波が、ロキの頭上をかすめ、盾をおった。

強烈な加重がかかり、両腕の少女が「こふっ——」と苦しい息を吐く。ロキはとつさに高度を落とし、木立ちに逃げ込もうとした。

「それが甘いと言うのです——撃ち方はじめ——」

火球がロキの顔をかすめ、近くの枯れ木を炎上させる。

炎の照り返しで周囲が見える。木々の陰から続々と現れるのは、軍の機械犬だ。

無論、グロリアの仕込みだ。ロキが現れた直後から、公卿とゲートの中間地点に兵を伏せ、射撃ポジションを確保させている。

これが兵を指揮する者の思考。魔術師としての腕ならば、ロキは歴戦の勇士にも劣らぬだろうが、用兵の読み合いでグロリアに敵うはずもない。

ロキが舌打ちするのがわかった。両手を少女に塞がれ、三人乗りで動きも鈍い。

「くそ！ どうする!?」

「もうちょつとだよ。あと少し。そろそろ——きた——」

イオネラが歓声をあげる。土煙を上げ、何かがストリートを駆けてきた。

「みんな！ 吠えて——」

フレイが叫ぶ。直後、音の砲弾が飛んできて、機械犬にぶち当たった。

次々にスクラップに変えていく。砲弾の発生源はどんどん近付き、ついには肉眼で確認できるようにになった。痩せ犬の集団——ガラム犬だ！

ガラムは衰弱していたが、表情は生き生きしている。その中の一頭、セントバーナードの背中に、和装の乙女が凛々しくまたがっていた。

「どどど土門日輪っ、お、お、お迎えに上がりましたあ——」

——訂正、まったく凛々しくない。犬が怖いのか、失神寸前だがみついている。

ここで、グロリアは敵方の意図を悟った。イオネラがただちに逃げず、ロッカー屋上に留まったのは、学院中枢に耳目を惹きつけるため……。

（ガラム回収の時間稼ぎ？ それほどの価値が、あの安価な人形にあると……？）
理解に苦しむ。考えているうちに、ガラムとフレイが合流した。

痩せて毛艶が悪くなった大たち。とても清潔とは言えない彼らを、フレイは全身で受け止める。主の顔を舐め回すラビの眼にも、日差しを弾く水玉があった。

——犬も泣くのだ。おんおんと声をあげて、全身で想いをぶつけてくる。

もらい泣きしている日輪の横で、イオネラが叫んだ。

「足を止めないで！ 突破するよ！」

それで、グロリアも我に返った。このまま離脱を許すわけにはいかない。

フレイがラビの背中にまたがる。巨体のオオカミ犬は誇らしげに顔を上げ、猛烈な勢いで走り出した。ほかのガラム犬と、イオネラを抱えたロキも続く。

速い。彼らの進路上にアンリを転移させる——と奪回される危険がある。そんなリスクを犯さずとも、交戦中の報せを受け、市街地から兵が戻ってきていた。

既に城壁が存在しないので、道路を封鎖する動きがよく見えた。プロの職業軍人たちが、包み込むように展開し、正門付近を封鎖している。

「突破は無理だ！　ここからどうする！」

「大丈夫、ちゃんと考えがあるよ——エヴァー！」

ゲート跡地、そこだけ遺跡のように残った門の上に指示を飛ばす。

乙女型自動人形が両手を広げて立ち上がり——唐突な美声が空間を満たした。

ぐおっ、とのしかかるような魔力の波動が広がる。暴力的な何かが、透明な旋律に乗り、学院の敷地全体に広がっていく。耳に心地よいハイトーンのソプラノは、響きのよさとは裏腹に、自動人形にひどい悪影響を及ぼす。

道路を封鎖していた隊からも、追撃していた隊からも、困惑の声が聞こえてきた。

「稼働停止……？」「おい、動け——」「制御不能——」

機巧師団に配備されているのは、量産規格品の機械人形ばかり。たちまち
《絶対王権》
に思考を食い荒らされ、いいように操られてしまう。

攻撃魔術が飛び交い、同士討ちが始まった。

兵は自動人形を放棄し、小火器に武装を切り替えようとする。しかし、一手遅い。既にあたりは、魔術の霧に覆われつつあった。

どこから漂ってくるのか、霧で見通しがきかなくなる。発砲はすぐにやんだ。

「……適切な判断です。友軍に誤射など、笑えませんかね」

こちらの魔術は封じられているのに、あちらは魔術を使っている。この不利を無視して力技に訴えるような、無能な指揮官は機巧師団にはいない。

（まさか、そこまで見越して……のことですか？）

だとしたら、これは誰の考えなのか。実に周到な魔術運用ではないか。

（あちらの指揮官は、剣帝が動くことも計算に入れている……）

霧をかきわけ、念動で慎重に着地。将校たちがこちらに気付き、駆け寄ってくる。

「ご無事ですか、殿下——」この状況、どうなれますっ」

「愚問です。ただちに追いなさい。……いや、待て」

怪訝そうな将校の前で、グローリアはひたいに手をやり、考え込んだ。

「……いえ、やはり追いなさい。本隊の半数を市街搜索に回します」

将校は復唱し、伝令のために戻って行った。

「ふふ……小癪なこと」

菌嚙みしたい心境だった。この状況——追わぬ選択肢がない。

彼らをつり出すために、グローリアは唐突な式典予告という奇手を打った。彼らは見事に食いついてきた。それはもう、待ち構えていたかのよう。

すべて、グローリアの思惑通り。だからこそ、鮮やか過ぎる撤収が不気味だ。戦術家の

グローリアには、戦術家の思考がわかる。

（これは、あちらが誘っている……？）

機巧師団を市街に引つ張り出すのが目的かもしれない。それがわかっている、追撃しないわけにはいかない。相手の誘いに乗りたくないという、それだけの理由で動かぬなど、兵の士気に関わる。まして、あの人数の学生を恐れて籠城など……。

そもそも、こちらが動かなければ、あちらは逃げおこせて駒得だ。

「……面白い。このグローリアとチェスで張り合うつもりですか」

緒戦は形勢不明ながら、気持ちの上では出し抜かれた感がある。それでも——否、それゆえに、グローリアの胸は躍っていた。

どちらの読みが勝り、どちらが相手を詰めるのか、試してみたい。

グローリアは挑戦を受けて立つことに決め、幕僚に指示を飛ばした。

「不審者への警戒を厳になさい。明日の戴冠式に向け、必ず工作を仕掛けてきます」

その読みはもう、既に二重に外していたのだが——このときのグローリアには知るべくもなかった。

4

機巧都市きこうとしの市街は、お祭り騒ぎだった。

今朝の号外——グローリア即位の話でもちきりなのだ。

あまりに急な告知のため、ストリートはてんやわんやの大騒ぎ。記者や名士、見物客が市外から詰め掛け、交通網もパンクしている。ただし、内々には知られた話だったようで、各国の大使や使節は既に機巧都市入りを果たしていた。

市民たちは大喜びで喝采かつさいを送る。この半年、この都市は何度も脅威にさらされた。女王が学院を治めてくれれば、平穏な日常を取り戻せる——と考える市民は少なくない。

国王崩御の悲しみは、グローリアの女王即位が埋め合わせる。

ロンドンでは安定を取り戻し、叛逆者はんぎやく者はとらえられ、帝国の栄華は続く。そうした期待を持つ者には、いまだ学院を占拠する機巧師団も、頼もしき存在に映るだろう。

そのおめでたい空気に冷や汗を浴びせるように——魔術の濃霧が襲いかかった。

「この霧、何かな？」「プロッケンに似てない？」

双子がひそひそとささやき合う。シャルはびくつきながら、小声で注意した。

「少し黙って。姿は隠れても、声は届くのよ」

視界は極めて悪く、油断すると立ち往生中の機巧師団と出くわしそうになる。

先ほど、誰かがグローリアと戦っていた。遠目に確認したところでは、無事に脱出できたようだ。仲間の誰かだろうか。イオネラの姿もあったようだ……。

「シャル、大丈夫？」「緊張してる？」顔まっさおー」

「だ、大丈夫よ……」

「しゃんとして！ 作戦の成否はシャルの肩にかかっているんだよ！」

「シャルが失敗したら、私たちも死んじやうんだよ！」

「わかつてるつたら！ ブレッシュヤーかけないで——っていうか、私だけが問題じゃないでしょう。貴女たちが失敗しても、そろって全滅よ！」

「ブレッシュヤーかけないで！」

見事にシンクロした動きで怯える。その仕草に和み、シャルも少し落ち着いて。

——大丈夫、きつと上手くやれる。

やがて、公邸がおぼろげに見えてくる。

がらんとしているが、警備は詰めているだろう。扉に窓、通風孔など、すべての開口部に警備がありそうだ。シャルは魔力を高め、己の内側に耳を澄ました。

（ロツテ、いけそう？）

もう一人の自分に呼びかける。守護精霊は気だるげに返事をした。

「ぶっつけ本番だけど……まあ、いけると思うわよ。今の貴女なら」
嬉しいことを言ってくれる。シャルは勇気を得て、公邸の前庭に飛び込んだ。

「——止まれ！」

さすがは機巧師団。たった数歩で発見された。屋上に身を潜めていたらしい見張りが、こちらに大型自動人形の顔を向ける。

警告を無視すると、容赦なくファイアボールが飛んできた。

風の精霊を集め、盾にする。そのまま竜巻にまで発達させ、門にぶち当てた。

竜巻が門を吹き飛ばし、進路を開く。

銃撃に身をさらして、駆け抜ける。危険なはずだが、きわどいと思う瞬間はなかった。

双子の操る騎士二体が、攻撃を受け止め、弾き返し、シャルを護ってくれる。

双子の呼吸は怖いくらいに合っている。それと同じ特徴を騎士二体も備えていた。

「風よ！ 石よ！ 鉄よ！ 道を開いて！」

シャルの呼びかけで、公邸内の精霊が支配下に入る。ごっそり魔力を奪われたが、その甲斐あって、屋内の様子が手に取るようになった。警備の配置、仕掛けられたトラップ、目的地への経路——そういったものがすべて。

壁を変形させて敵を阻み、床を盛り上げてバリケードを築く。最短ルートで廊下を駆け抜け、弾薬庫から未使用の銃弾を箱ごと強奪。騎士たちに運んでもらって、精霊の支配が及ばない、魔抗金属で護られた部屋に到着した。

——王妃の寝室だ。騎士の体当たりで、強引に扉を破る。転がり込んだ部屋の中央に、床と天井をつなぐ柱のような、巨大な金属塊があった。

樹木に似ている。幹に相当する部分に鳥かごがあり、その中で、仔竜が丸くなっていた。眠りこけるその姿を見て、シャルの眼に涙の玉が盛り上がった。

「シグムント……！」

「シャルー」「急いでー」

双子が悲鳴をあげる。廊下に警備兵が迫り、銃を撃ってくる。騎士はびくともしないが、弾丸を受けるたびに魔力を削られるため、長時間の放置は危険だ。

「ロッテー やるわー」

「ちゃんと制御しなさいよっ？」

言われるまでもない。シャルは銃弾のケースをこじ開け、風の精霊を呼び寄せた。

極限まで魔力をしほり、強くイメージする。密度を増した空気の圧力で《筒》を形成。

それから、《葉室》を形成。《撃鉄》、《撃針》、《糾弾ベルト》を形成した。

銃弾ケースに空想上の《糾弾ベルト》を接続し——想念のトリガーを引く。

銃弾は整然と空中に舞い上がり、次々と射出された。銃弾が室内を飛びまわり、火薬の臭気が室内を埋め尽くす。咳き込み、涙をこぼしながら、それでもシャルは銃撃を止めない。金属の檻の一点、封印のルーンがある部分を狙い続ける。

数百発の銃弾が命中してもなお、魔封じの檻は破壊されない。だが、ルーンが刻印された部分が衝撃で熱を持ち、徐々に赤熱し始めた。

「今！」

双子の命令で、騎士が槍をふるう。軟化した金属は簡単にひん曲がり、ルーンの刻印がつぶれてしまう。ルーンが効果を失い、封印が弱化した——ときにはもう、シャルは魔力のありつたけを、騎士に向けて放っている。

騎士の一体がそれを受け止め、もう一体がバクトルを整える。制御された魔力の奔流は、針の穴を通すような正確さで、魔鉱の鉄格子をすり抜け、仔竜に流れ込んだ。

「起きて！ シグムントー」

願いを込めて叫ぶ。果たして、どろりと粘りつくような闇が生じた。

濃密な闇だ。シャルは《鏡》を屋外に設置して、室外から光を呼び込んだ。

霧のせいでは足りない。不足ぶんを魔力で補うと、シャルの魔力は見る間に枯渇した。だが、その甲斐はあった。闇はますます大きくなり、やがて室内を覆ってしまふ。

（逆転の発想よ！ その頑丈な檻だって、内側から破れば……！）

やがて巨大な腕が、脚が、闇から飛び出して、公邸の屋根を突き破った。

いつしか、そこには巨竜が立っている。

一二〇年に渡り、プリュー家を護り続けた魔の山の竜——

「シグムントー」

シャルは気力を振りしほり、風の精を己に集めて、竜の首へと飛んだ。

5

突如として機巧都市を包んだ霧は、ロキの方向感覚を狂わせた。

魔術の霧は天眼を妨げる。鼓膜が破れているため、聴覚も働かない。ロキはガルトたち

のしっぱを頼りに霧中を進み、運河近くの倉庫にたどり着いた。緊張から解放された様子で、イオネラがほっとした声を出す。

「ここまでくれば大丈夫。第一段階、成功だね！」

第一段階、とは何だろう？　そこも気になったが、ロキは別のことを訊いた。

「いっしょに合流しているエヴァを示し、

「こいつの歌を使ってしまったて、よかったのか？　切り札になり得ただろう？」

イオネラはすべてわかっているという顔で、得意げに胸をそらした。

「ふっふーん。ぜんぶ、考えあつてのことだよ」

「ま、僕の考えだけだね」

倉庫の奥から声がかかる。暗がりには、輝く銀髪の乙女が現れた。

一緒にコリー犬が飛び出してきて、フレイに尾を振る。

（リビエラ——生きていたのか）

姉の生存を確認したときには及ばないが、安堵した。これで姉の涙を見ずに済む。

アリスはロキの内心を透かし見るような眼をした。

「思ったより元気そうだね、剣帝。それとも、『急に元気が出ちゃった』かな？」

「……何言いたい」

「お姉ちゃんとの感動の再会はどうだった？　ま、さ、か、嬉し泣きしちゃったわけじゃないよね？　泣く子も黙る剣帝閣下がさ？」

あやうく赤面しそうになる。とっさにジブリールを差し向けようとしたが、姉が必死にしがみついていたので、それはさすがに思いとどまった。

「ふん……この途方もない霧の海、おまえの魔術だろう。どうやった？」

「一か月ぶんの魔力を突っ込んだのさ。当然、二度目はないよ」

「一か月……《魔素貯蓄》の儀式か？」

この潜伏生活中、儀式魔術で日々魔力を蓄え、一度に解放したということだろう。

「そんな切り札を……オレたちを逃がすために、使ってしまったのか」

「まさか。僕みたいな悪党のやることだよ？　君とガラムを救うため——なんて、そんな

ちっぽけな理由で、乙女の一か月を注ぐわけがないだろう？」

カンに障る言い方だが、助けられた手前、文句も言えない。

「ともかく、奥へどうぞ。時間がないから手短に行こう」

アリスに導かれるまま、日輪、フレイ、イオネラとともに奥へと進む。

突き当たりの壁は魔具のパネルになっている。三色魔石の粒を隙間なく並べた《光学式

モニター》で、工学に強いロキにはなじみのある装置だ。

「みすばらしくて悪いけど、ここが学院奪還作戦の司令部だ。回線は《梟》隊と《狼》隊

につながるよ。——先に面子を紹介しよう」

モニターに明かりがともり、見覚えのある顔ぶれを映し出す。

右のパネルに昴と六連。左のパネルには仏頂面の少女——死霊使いのドロシーだ。

なぜ、ドロシーがここに……いや、その前に。

「この通信、どうやっている？ 魔力も電波も軍に傍受されるだろう」

「だろうね。そこで有線の回線を張り巡らせてある」

「……どうやって」

「わたくしが式で地中を掘り進みました。ロキさまの足取りを追うついでに」

日輪がさらりと答えた。簡単そうに言っているが、軍の監視をかいぐつてそれを実現するのは、決して簡単ではないだろう。

この一か月、ロキが学院潜入の下調べをしていたように、彼女たちもまた、それぞれに牙を研ぎ、準備を整えていたらしい。しかし――

「シャルロットはどうした。それに、一番胸糞の悪いバカがいないぞ」

「ロキ！ そんな言い方しちゃ、めー」

姉に怒られる。久しぶりのせいとか、無性にくすぐつたい。

「おう、ボケ雷真やつたら、ケツまくつて逃げよつたえ。あの腰抜け！」

モニターの向こうで弟が言った。画像は不鮮明だが、怒っているのがわかる。

「あははー、こんなん言うてますけど、ほんまはごつつ心配しててん」

「阿呆ぬかせ六連！ あんの馬鹿、殺しても死なんわ！」

雷真は不参加のようだ。ロキはアリスを振り向き、確認した。

「帰国したのか？」

「いや、ここにいないだけで、彼には彼の役目があるんだ」

「……何をさせる。オレたちはこちらで手一杯だ」

「へえ、助けに行くつもりなんだ？ 剣帝は彼とお姉ちゃんには優しいね」

「黙れ。殺すぞ」

「心配する気持ちはわかるよ。いくら僕のライシンが不死身の怪物だと言っても――」

「わたくしの雷真さまですつ」

普段控えめな日輪が割り込んでくる。――そこだけは譲れなかったらしい。

一瞬、火花が散ったが、アリスはわざとらしく言い直した。

「僕の未来の旦那が怪物だと言っても、限度がある」

「ひうつ！ わたくしの……うつ……つ」

「そこで、こちらの問題が片付き次第、増援を送る計画だ」

「……後回しか。到着に何日かかる？」

「一瞬で到達するさ。結社の連中、ご丁寧にも《道》を残してくれたからね」

「転移魔法陣？ そんなものが……」

――ある！ 先日の結社襲撃の際、金薔薇が大講堂に構築していた！

幸い、講堂一階の修繕は終わっていない。プリンセスが復元できるそうだ
日輪に視線を送る。日輪は涙目になっていたが、うなずいて肯定した。

復元に成功すれば、東欧にあるという金薔薇の本拠地へ飛べる。

「……状況はわかった。だが、こちらに大義はあるのか？」

「大義は、ある。掲げる役は、私が担うでしょう」

左のモニターから声がする。ドロシーが腰を浮かせ、弾かれたように振り向いた。

長身の若者に支えられ、麗しい女子学生が入ってくる。蜂蜜色の金髪がきらきら輝き、

画面が明るくなったような気がした。

ドロシーが嬌声をあげ、モニターの奥へすっ飛んで行く。

「あはーんっ、オルガお姉さまー！ お会いしたかった——！」

よく懐いた猫のように飛びつこうとして——その直前で凍りつく。

オルガを支えるヴェイロンと、距離をたもってにらみ合う。……謎の敵対関係だ。

ヴェイロンの両腕が機械義手になっているのを見て、アリスがため息をついた。

「思いきったね、ヴェイロン。君の腕は治し方があったはず……」

「半年かかると言われたからな。治療も、リハビリも、面倒くせえ」

「後悔するよ。機械の腕なんて、決していいもんじゃない」

先輩としての言葉だ。だが、ヴェイロンは凄絶な笑みを見せ、端的に答えた。

「必要なのは、今このとき——だろう？」

躊躇のない言葉。ロキの中に親しみのようなものが芽生える。オルガのためとあれば、彼は手段を選ばない。それはどこか、自分のあり方に似ている気がした。

「——話を戻そう。こちらの大義についてだが」

オルガはしれっとした顔で、こんなことを言った。

「私の任期はまだ終わっていない。つまり、私はまだ学生総代だ」

ロキは眉をひそめた。こいつ、何を言い出した？

「解任には不信任決議が必要だ。選挙管理委員会も機能せず、副総代の繰り上がりもない。アスラの抜擢は不正な選任であるばかりか、軍による脅迫も考えられる。先日、学院には過激な内部抗争があったばかりだ」

なるほど、ここで先の白赤騒動を持ち出すのか。相手の策略を逆手に取り、世間が抱く印象を「同レベルのゴタゴタ」にまで引きずり落とす腹だ。

「……学生と市民は納得するかも知れないが、軍に盾突く理由としては弱すぎる」

たとえば王妃を打倒し、機巧師団を撤退に追い込めたとしても、こちらが無罪放免となり、学院がこの先も存続してくれなければ、やる意味がない。

アリスは色っぽく髪をかき上げ、もったいぶるように笑った。

「まあ安心しなよ。王妃さまを黙らせる手段は講じてある。要は、あちらの正当性に疑問符をつきつけばいいんだ。君たち姉弟には察しがつくかな？」

ロキの脳髓に電流が走り、一瞬、ヘイゼルの顔が思い浮かんだ。

「さて、納得がいったところで実務に移ろう」

「明日の準備だな？」

「やれやれ……僕がいつ『明日の戴冠式を邪魔する』なんて言ったんだい？」

「なに——？」

そのとき、ずどん……、と重々しい地響きが響いた。それはモニターの向こう、二つの拠点にも届いたようで、あちらの面々も警戒心をあらわにする。

「きたね。画面に映してあげよう——ほら」

アリスが指を弾く。モニターの映像が切り替わり、学院の遠景を映し出した。濃霧を吹き飛ばし、巨体がそびえ立っている。

長く、たくましい首。雄々しく広げた翼。校舎と比較する限り、高さは五十メートルを上回っている。あれだけ巨大な怪物は……見間違えようがない。

不敵に笑いながら、アリスが巨竜を指差した。

「ずいぶん気をもませてくれたけど、これでキャストがそろったね」

ここでようやく、イオネラが学院でモタついていた、本当の理由がわかった。

シャルに対する密かな支援——つまりは陽動だったのか！

今の台詞から察するに、アリスは今すぐ仕掛けるつもりのようなのだ。だとすれば、先ほどの派手な撤退劇も、機巧師団を学院から引つ張り出すため……。

ロキは半ば呆れて、しげしげとアリスを眺めた。実に、油断ならない女だ。たった一度の襲撃で、いくつの〈得〉を取ったのか。

「こちらの沈黙に耐えかねて、王妃が誘ってくるのはわかっていた。それに乗っちゃう死にたがりや、乗らざるを得ない血気盛んなお嬢さまがいることもね」

前者はロキ、後者はシャルだ。

……危険な賭けだ。二人が動くとは限らないし、動いたとしても、軍に敗北した可能性もある。心理を読んでいるだけでは、こんな計画は立てられない。

「信じていたのか……。オレやシャルロットがやつてのけると」

さつとアリスの頬に赤みが差した。オルガが目ざとく気付き、茶化しにかかる。

「おや、顔に出たな。千里眼の策略家も、図星を指さされては動揺するようだ」

「黙りなよオルガ。てんで見当違いだね。幸せボケして頭のネジがゆるんだのかい」

誰からともなく笑いが漏れる。これ以上は墓穴を掘るだけだ。アリスは忌まじき顔に顔を背け、聞こえよがしの舌打ちをした。

「無駄話はいいんだよ。とにかく、これで勝算は五分五分だ」

——一同が沈黙する。さすがにそれは言いすぎではないか？

機巧師団は人機合わせて一万二千。戦力比は大きく偏っている。装備の充実度を計算に入れば、いっそ千対一と言っている。にもかかわらず、五分五分とは。

一同を代表し、ロキがたずねた。

「数では到底、勝ち目がないだろう。数的不利をどうひっくり返す？」

「ああ、向こうもそう思ってるだろうね。だから、数で圧倒しようと思う」

アリスをのぞく全員が、虚を突かれた顔をした。それは一体、どういう意味だろう？

アリスは自信たっぷりに、人の悪そうな微笑を見せた。

6

「僕の指揮で踊ってもらおうよ。君たちにも、機巧師団にもね」

冷えきった地下室は、まるで牢獄のようだ。

（いや、実際、牢獄だな。閣下などと呼ばれた者が……屈辱的なことだ）
自嘲が浮かぶ。（焼却の魔王）ともあろう者が、ストローブもない地下室で、粗末な寝台に凍えながら横たわっている。

ここは学院長公邸の地下。壁という壁に魔術式が描き込まれた、魔封じの空間だ。手足にからんだ点滴導入管は特別製で、腕から引き抜こうとすると、猛毒が注入される。皮肉にも、ライコネン自身が開発を命じたものだった。

（銀薔薇め……俺をいのように利用する）

グロリアは赤羽雷真を（魔王殺し）と呼び、協会を巻き込んだ上で、学院に引き渡しを命じた。従って、ライコネンが無事であることは公にできない。

（魔王を失うのは国家の損失。いずれは復帰させるのだろうが……）

失った信用と名声は取り戻せまい。学生に敗北した魔王など、軍の面汚しだ。

そつと胸の傷に触れる。幸か不幸か、経過は良好だ。相手が凄腕であり、確実に急所を狙ってくれたおかげで、とっさに致命傷を避けることができた。

思わずこぶしに力が入る。まさか、刃物で深手を負わされるとは。

刀剣や銃器の必要性は師に叩き込まれていた。優れた魔術師の戦いでは、魔術が決定打にならないことが往々にしてある。ゆえに、弟子のグリゼルダにもその技法を教えた。

だが、その自分でさえ、どこかで剣を侮っていた。あるいは、フリスヴェルグという超兵器を与えられて、知らず知らず、気がゆるんでいたか。

認識を改めなければならない。広く世界に目を向ければ、危険な武芸がまだまだ存在している。軍に居場所がないのなら、そちらを探究してみるのも面白いか……。

などと、早くも余生のことに想いを馳せているとき。

「久しいな、ライコネンくん。術後の経過はどうだね？」

ライコネンは内心で舌を巻く。どんな手品を使って、ここに侵入したというのだ。

「……久しい？ 先目お目にかかったばかりですよ——ラザフォード学院院长」

かすかな笑い声とともに、見事な口ひげの偉丈夫が壁をすり抜けてくる。

「先日お会いしたのはライコネン中将。今の君は、かつてこの学院で頂点を極めた、あの聡明なネイサン・ライコネンくんだよ」

「ふ……確かに。今は部下もなく、武装もなく、階級章もはぎ取られた」

「信じがたいな。君ほどの魔術師が、これほどの深手を負わされたのかね？」

「皮肉にしか聞こえない。左様、俺ほどの者がフリスヴェルグを連れていてなお、一刀で斬り伏せられたのだ。炎化は間に合っていたのにな」

「……過信したかな？ 私にも好敵手と呼べる男がいた。（疎）と（密）の相転移を極めた彼も、若者に不意を打たれて命を落とした。古来、かわすより防ぐ方がはるかに確実で効率的だと、幾度か忠告したのだが」

「鉄壁の向こうで引きこもっているだけでは攻撃の機を逃す——チェスとは相手のキングを詰める芸術だ。効率を言うなら、軽くさばいて攻めつづぶす方がいい」

「その言いさま、やはりグレンダンの弟子だな」

ラザフォードは痛快そうに笑った。

「君は狂犬に尽くすと決めたようだが——それはなぜだ？」

ライコネンは沈黙した。ラザフォードはさらに図に乗って、

「二十世紀は戦争の世紀、大戦に参加しなければすべてを失う——そんな『まやかし』が大手を振ってまかり通る、悪夢のような時代だよ。この英国とて例外ではない。インドを失うと脅してやれば、世論はたやすく開戦に傾くだろう。大衆は愚かなものだ」

「……その通りだとも。軍人が戦争を望むのではない。大衆が望むのだ。ゆえに私は愛国者として、この国のため、もつとも利口な手段を選択する」

「その手段が、狂王子だと言うのかね？」

口を閉ざす。ラザフォードは満足げにうなずき、口ひげを持ち上げた。

「このまま女王が誕生すれば、彼の霸道は断たれ、命運も尽きるだろうな？」

ライコネンは顔を背けた。甘言に乗るつもりはない。

「軍と保守党は女王の味方だ。彼を死なせたくなひだらう？」

「——叛逆しろと言うのか？ いみじくも師団のひとつを預かる俺に？」

「まさか。私も愛国者だよ。私はジョージ陛下を敬愛していた」

ライコネンは苦笑した。狸親父め！

「これはかつての教授から教え子への提案だ。同じイギリス人として、この国を愛する者として、手を携えるべきではないかね？ ん？」

「……俺は先日、貴殿を拘束し、レメゲトンを奪い、あわよくば抹殺しようとした」

「わかつてる」

「俺が好きに動けたのも、金薔薇さまと、銀薔薇さまの庇護があればこそ……」

「わかつてる」とも。君が結社の賛同者だということとは」

「ならばなぜ、手を組もうなどと言える？」

「その筋ではこう言われているそうだ。エドワード・ラザフォードには血も涙もなく——相手が善人であれ、悪人であれ、敵であれ、味方であれ、娘であれ、それを理由に価値を決めはしない。判断の基準は『己にとって利となるか否か』のみだとね」

好々爺然とした風貌が、ほんの一瞬、魔性の凄みを帯びた。

「学院は英国の介入を断固阻止する。先日、君たちの介入を退けたように。そして君たちも今、英国によって追い詰められている。ならば、古きことわざに言うように、昨日の敵は今日の友——となり得るのではないかな？」

ライコネンは顔を歪めた。とても清々しい気分で、ひどく苦々しく笑う。
「喰えない男だ……」

「皆がそう言うよ」

「勝算はあるのか？ 王妃に牙をむけば、キングスフォートやグランビルはもちろん、リ
ツチモンドもソールズベリーも学院殲滅に動く。貴族院は実質、王妃の傀儡——」

言っているうちに、自分で気付く。ラザフォードが狙っているのは、その逆——
貴族院を引きはがすつもりか。だとすれば、こちらが担ぎ上げる人物は。

興入れしてきた王妃より、玉座を継承するに相応しい人物。

「気付いたかね。さすがに聡い。かつてのネイサンくんを思い出す」

「……今も昔も、俺は聡いつもりですよ、ラザフォード先生」
ゆえに——と続ける。

「今は、悪い魔法使いの誘いに乗りましょう」

二人は笑みを交わした。ただし、決して握手はかわさない。

「では、ゆこう。まずは君の拘束を解除する」

「待て。この拘束は、そう簡単に——」

言い終わる前に、手足の拘束帯がほどけ、点滴導入管も解除された。

いともたやすく、ベッドから解放される。毒針は作動せず、警報装置も働かない。

ラザフォードは得意げに片目をつむって見せた。

「こちらには機巧医学の権威がついている」

「……パシヴァルか。この拘束具、開発に時間を要したのだから」

「文句は直接言うといい。——そうそう、途中、別の房に寄り道をさせてもらうよ」

「寄り道？ 誰の房だ？」

「久しぶりに娘に会うのだ。気の利いたプレゼントのひとつも用意せねば」
そう言ったラザフォードは、塩辛い笑顔を浮かべていた。

7

「おーおー、いるわいるわ、莫大なイバラの魔術師どもが」
双眼鏡で外の様子をうかがいながら、クルーエルがつぶやいた。

ここは東欧、オーストリア国境に近い街だ。土地の所有権が不安定で、民族も入り乱れ、治安は少々物騒。現在はクロアチア系が優勢とされている。

その街の至るところに、結社の魔術師が溶け込んでいる——らしい。さすがにこの距離では魔力を感じず、キンバリーでも判別は難しい。

クルーエルは気楽な調子で、大口径のマシンライフルを抱え上げた。

「おつ、どうしたダーリン。ちょいと重いな。太ったんじゃないのかい？」

「君の筋力が落ちたんだ。銃のせいにしては、機嫌が悪くなるぞ」

「おあいにく。俺とダーリンの関係は、そんなヤワなものじゃないのよ♡」

「なら結婚するがいい。ケツにぶっ挿してやろうか？」

「危険なプレイだな！ それが教授さまの言うことか！」

軽口を叩き合う。クルーエルは安全装置を解除、装填と弾抜きを繰り返す、ガタつきがないのを確認しながら、

「……おまえさんはどうした？ 何を考えてる？」

顔を見るまでもなく、気配でわかるのが昔馴染みだ。キンバリーはしんみりと、

「あきれた時代錯誤だと思ったのさ。そんなデカイ糞一丁で人形使いに挑むなど……自動人形は迫撃砲なみの攻撃力を持っているというのに」

「おいおい、台所事情を考えてくれよ。俺たちは民兵だったんだぜ？」

高価な自動人形をそろえている余裕などなかった。魔術師を抱えている余裕も。

「……一度も試いたことはなかったな。君はなぜ、あの戦場に行った？」

「言わなかったか？ つか、そんなことも知らずに、俺にラブレターを書いたの——」
 ざいいん、と不穏な音を立てて、壁にダガーが突き刺さる。

「……人生の汚点を消し去りたいと思うのは、実に自然なことではないかね？」

「き、記憶から消します……サー——」

クルーエルは冷や汗をぬぐい、眼鏡を直して、何事もなかったかのように続けた。

「別に俺がいたっておかしかねえだろ。喜望峰周辺にや、欧州人もわんさといた」

「……私は孤児も同然だった。だが、君は……医学生だったんだらう？」

「まあな。ちょうど座学に飽きる頃合いだね」

「教えてくれないかね。名門大に通う医者のおや、何を好き好んで志願したのか」

「そりゃ、おまえさん、医者ってものが——」

言いかけた言葉をのみ込み、クルーエルは自嘲して、銃を壁に立てかけた。

「ま、いつかな。そう言うおまえさんは、何で教授になったんだ？」

「決まっている。機巧魔術を心底から憎んだからさ」

キンバリーもまた、自嘲の笑みを浮かべた。

「初めはただ……自動人形を叩きのめす方法が知れたかった。気付いたときにはこの通り、超一流の魔術師となっていた」

「大きく出たな。ご出世されたところを見ると、実際そうなんだらうけどよ」
 キンバリーの胸に、少女時代の記憶が蘇る。

砂と泥まみれになって、駆け回っていた日々。大人に交じって薬莖や食料を運搬し、銃や刃物の扱いを学んだ。

文字を教えたくれたのは、部隊の大人たちであり、この男だった。

本を読むことを教えたくれたのも——少女らしい感情を教えたくれたのも。

「もしあのとき、今の半分でも知識と力があつたなら……」

「……あいつらを死なせずに済んだんじゃないか、ってか？」

何がカンに障ったのか、クルーエルは足を投げ出し、腹立たしげに言った。

「やれやれ、人間ってのは傲慢だな。ちよいと知恵をつけりゃ、自分が偉くなったと思ひ込む。それでもって、自分を神さまみたいに思うんだ」

「何を怒っている？ 私がいいたいのは――」

――否、怒ってはいない。眼鏡の向こうの目は、優しく細められていた。

「連中はちゃんと幸せだったし、ちゃんと戦って、ちゃんと死んだ。こんなもんは自然の摂理だ。いい奴はみんな死んで、ロクデナシが残る。俺や、おまえさんみたいな」

だから、氣に病むことはない。

後悔を背負う必要はないと、そう言っているのだ。

乾ききった心に、ふと通り雨がよぎったような、そんな気がした。

「ふ……その理屈でいくと、君は世界の終わりで生き残るだろうよ」

「よく言えるよなそういうこと！ つか、金薔薇をぶつ倒せたらよ――あの話、考え直しちゃくれないかね？ ほら、おまえさんが俺の手をぶつた切ったときの話」

「……そんなことがあったか？」

「見ろこれ！ 傷が残ってるだろうが！」

右手を見せる。親指から手首にかけて、細い切り傷が走っている。

協会の番犬などやめて、自分の幸せを求めろ――俺の給金を当てにしろと、この男がガラにもなく口走った、あのときだ。キンバリーは意地悪く笑って、

「考え直すということは、考えるだけでいいんだな？ わかった、考えておこう」

「おい！ 考えるかどうか考えておくってどういうことだ！」

「つまり、その程度の男ということだ」

そっけなく背を向ける。これ以上は、溺れてしまいたいそうになるから。

部屋を出て行くとして、気付く。いつからか、廊下に雷真が立っていた。
（こいつ――この間合いで悟らせないと）

警報結界をすり抜けた。八重霞にも、ずいぶん磨きかけたようだ。

雷真もこちらに気付き、にやつと笑って近付いてきた。

「悪いな、先生。邪魔したか？」

「師弟そろって、言うことが同じだな。入れたまえ」

苦笑しつつ、雷真と人形の姉妹を招き入れる。

「間もなく作戦開始だ。昨晚はよく眠れたかね？」

「それがなかなか。寝つきが悪くてさ」

「昨夜の雷真、ずいぶん激しかったもんね。私たち二人と、未明まで！」

「こここれ小紫！ そそそのようなこと、ひとさまに漏らすなっ」

「漏らすって何だ！ やらしいことはしてねえだろ！？」

「ある意味、とつてもいやらしいことだけどね♡」

首尾は上々のようだ。安心すると同時に、キンバリーは少し気の毒になった。

「やはり夜々^{やや}がいないと締まらないな、君たちは」
 姉妹の表情が曇る。その人間そっくりの反応が、以前は不快に思えたものだが――
 キンバリーは姉妹の背後に回り、そっと、二人の肩に手を置いた。

「そんな顔をするな。それとも、もうあきらめてしまったのか？」
 姉妹はすぐに顔を上げ、ともに唇を引き結ぶ。

（……滑稽^{こっけい}だな。人形嫌いのキンバリー教授が）

この姉妹には肩入れしたくなる。そして、そんな自分が嫌いではない。

キンバリーは姉妹から離れ、雷真^{らいまこと}の顔をのぞき込んだ。

「やれそうか？」

「細工は流々、仕上げをご覧しろだ」

「よろしい。その瞬間にだけ、気をつけてくれ」

「テストは苦手だが、帳尻を合わせるのは得意な方だよ」

室内に全員ぶんの気迫が満ちる。

「では、行こう。――今より、金薔薇^{ばら}を狩る」

かくして、危険な狩りが始まった。



Chapter II

魔女と女王



1

ひどく寒^{ふさ}い気分^{ふん}で、硝子^{しょうこ}は窓の外を眺めていた。

古都の街並みは美しいが、厚^あぼったい曇天の下では寒々しく思える。日本の冬はもっと、色彩に満ちていたような気がするのだが。

（――郷愁^{きゆうしゆ}？ この私が？）

笑ってしまう。そんな人間らしい感情が、まだ残っているなんて。金薔薇の言いなりにあって、これから世界に災厄をもたらそうと言うのに。

膝の上で、くるるー、と鳩が鳴いた。――硝子がメッセンジャーに使う鳩型自動人形^{オートマテマシ}だ。メモリーをのぞいたところ、機巧都市の方も、状況は何一つ好転していない。

夜々もまだ修復されていないようだ。焦燥が硝子の胸に込み上げる。

ふと、黒薔薇セフィラと交わした言葉を思い出した。

『あの金色ババアに味方するつもりなら、わたくし、貴女^{あなた}を許しませんことよ？』

『ご心配なく。私は誰の味方でもないわ。……それに、黒薔薇には恩義も感じているの。』

薔薇の師団に誘ってくださったこと、渡りに船だったわ」

黒薔薇は皮肉げに唇をゆがめ、白手袋をはめた手でそれを隠した。
「極東一の人形師でも拾わなければ、出向いた甲斐がありませんわ。ですが、薔薇の棘は硬く、鋭いもの。誘いに乗ったこと、じきに後悔しますわよ——」

硝子はため息をついた。結局、その予言の通りになった。

「……何もかも、今さらね」

「いやはやまったく、息が詰まりますね」

となりで言われ、硝子は煙草を取り落としそうになった。

正直言って、かなり驚いた。いつの間に現れたのか、雲雀がそこに立っている。

——この男は得味が知れない。あるいは、底が知れないと言うべきか。

「ありや、驚かせてすみません。存外、可愛い悲鳴をあげますね？」

……殴ってやりたい。

「足音も立てずに女の背後を取るなんて、お行儀の悪い坊やね」

「いやあ、坊や呼ばわりは心外です。貴女の方がよっぽどお若く見えますが」

「いい女が見た目通りの歳だと思う？」

「私も若く見られる方ですよ。歳の当てっこでもします？」

硝子はげんがりした。この男、本当につかみどころがない。

「貴方は、とても息が詰まっているようにには見えないけれど」

「いやいや詰まっていますよ。気晴らしに散歩でもどうですか」

「本当にあきれた坊や。これから大事な仕事があるでしょう？」

そう——間もなく閱兵式が始まる。世界の行く末を変えるかもしれない式典が。

「ああ、そうでしたね。では、散歩はそのときに。護衛はお任せください」

「……ずいぶん付き合いいいね。いつ殺されてもおかしくないのに」

「ついてくるな、と言われるまでは、どこまでもおとしますよ。例の〈引き金〉を引く

役——つまり皇太子さまの暗殺ですが、私がやっても構いませんし」

「簡単に言わないで頂戴。世界大戦が始まれば、何万という人が——」

雲雀は唇の前で指を立て、「それ以上は言うな」という仕草をした。

ここは金薔薇が用意した隠れ家。誰か聞いているか、わからない。

「私は貴女の用心棒ですから。最大限、お役に立ちますよ」

「……神中將の言いなり？」

「いやいや、私をご指名なすつたのは貴女ご自身でしょう。なぜ私だったんです？」

「帝都で一番腕が立つ、と聞いたからよ」

「私が雷真の師だから、ですよ？」

いつも細められているような目が、わずかに開く。

空気が張り詰める。雲雀の腰で、二本の刀が強烈な存在感を放ち始めた。

「私のところに話がきたのは夏はじめ——ずいぶん前です。そのときの雷真は、今よりも

「つと未熟だったのでしょうか？」

「……よくしゃべる坊や。ええ、そう。うちの坊やを鍛えてもらおうと思ったの。だって坊やが生き延びてくれなくちゃ、私の望みも叶わ^{かな}ないもの」

冷やかに笑う。そう、
師弟そろって利用しただけだ。
うんじやく

そう言ったはずなのに、雲雀は緊張を解き、くすくす笑い出した。

「……何が可笑しいの」

「うちの坊やときましたか」
(しょうご)

赤面しそうになる。硝子しょうこはとつさに舌を噛み、無表情を取り繕った。

「いやー、私はですね。間が悪いのと空気を読めないのとおしやべりなのが欠点なんです
が、さらに言いますと、どうしようもなくおせっかいなんです」

「……それが何？」

「こんな街までお付き合ひしている理由ですよ。貴女^{あなた}におせっかいの虫が騒ぎましてね。貴女、いざとなれば、自分が死ぬばいと思つていらつしやる」

「――私は最後まで生き残るつもりよ。(神さまの子)の誕生を見届けるまでは、決して死ぬわけにはいかないの。たとえ、世界を敵に回してもね」

悪徳にまみれた魔術結社にも、平気でくだる。私はそういう女だ。

「死なぬとおっしゃるなら結構。用心棒としては、雇い主に死なれちゃこまります」

「……ふざけた男」

「私は真剣ですよ。もちろん雷真のことも。私は彼の親代わりですからね」

「それを言うなら……」

「おや——つて、あちち！」

硝子に煙草の灰を落とされ、雲雀がばたばたと手を振る。

「勘の鈍い男は嫌いだけれど、よすぎるのも考えものだわ」

「花柳斎よ」

廊下からアストリッドの声が響く。

姿を見せた魔女は、外の寒さをものともせず、露出度の高い衣装をまとうていた。

今日も護衛に連れていない。よほど自分の技量に自信があるらしく、金薔薇は基本的に無用心だ。高度な魔術を身の内に隠しているのだろう。

「出るぞ。もろもろの支度は済んでおるのかえ？」

「ご心配なく。――疑うわけではないけれど、本当に王族一人を討つたくらいで、世界が戦火に見舞われるのかしら？」

「教会の数秘術で導き出した結論よ。教父の予見にも劣りはせぬ」
自慢げに胸をそらす。十代の娘のようで、可愛らしい仕草だ。

「すごいね。なら、その秘術とやらで神性機巧のこともわからない？」

金薔薇は肩をすくめ、面白くもなさそうに言った。

「因果の流れは潮目に近い。所詮は確率の話にすぎぬが、落ち行く方は決まっておるのよ。」

「因果の流れは潮目に近い。所詮は確率の話にすぎぬが、落ち行く方は決まっておるのよ。」

時空は収束するようにできておるからの。数秘術はその潮を読むもので——」

「ざっくり言えば、細かいことはわからない、ってことかしら？」

「それはざっくりすぎる」

苦笑する。だが、否定はしない。

「世界大戦に至る道筋はいくつもある。中でも実現可能性が高く、発生確率が高いのが、ここで皇太子を殺すこと——というわけじゃな」

「参考になったわ。……それじゃ、その潮を呼び込みに行きましょうか」

「その前に聞け。銀薔薇が女王になると宣言した」

冷たい氷を背中に落とされたような気がした。

一方、金薔薇は子どもの悪戯をとがめるような表情で、

「あきれたうつけよ。薔薇が王となろうとは。傀儡を立てればよいものを」

「……なぜ、そのお話を私に？」

「学院は英国のものとなる。あの小僧にももう、還る場所がない」

金薔薇は可憐に、そして悪魔的に微笑んだ。

「小僧が可愛いと思うなら、薔薇に引き入れることじゃよ。——行こう」

小さな尻を振りながら、悠然と部屋を出て行く。硝子は吸いかけの煙草を取り落とし、

しばし放心した。感情の糸がもつれて、思考が整理できない。

「ささ、まいりましょう。金薔薇さまをお待たせしちゃいけません」

雲雀にうながされ、ようやく椅子から立ち上がる。

渡されるまま黒地のコートを羽織り、階下に入りて、ストリートに出る。

通りでは、魔女が獅子人形を連れて待っていた。人目をばかるつもりはないらしい。

硝子と雲雀を先導し、広場から一キロほど離れた老舗ホテルに向かう。

際立つて背が高いというわけではないが、阅兵式の様子が一望できる。硝子が狙撃すると言ったので、絶好の狙撃スポットを用意してくれたのだ。

四階の食堂からバルコニーに出て、冬景色の街を見下ろす。

「やあ、あちらは盛り上がってますね」

雲雀が手びさしをつくり、緊張感のない声で言った。その言葉通り、広場には国境警備隊が整然と並び、既然大勢の市民が詰め掛けていた。

「よい眺めじゃろ？　ここからならよう狙える——おお、兎がきたわ」

広場で歓声が上がリ、皇太子夫妻を乗せた自動車が入ってきた。

硝子は袖に手を入れ、短銃に触れる。

弱者を殺すしかできないそれを、そっと慈しむように撫でる。

かつて、あの子たちの頬を撫でた手で。

「シグムント！」

風に乗って飛びながら、シャルは叫んだ。

兵たちが銃弾の集中砲火を浴びせてくる。霧の中に無数の兆弾が閃くが、小銃ではびくともしないほど、シグムントは巨体になっていた。

竜が咆哮する。大気がびりびり震え、一瞬、攻撃がやんだ。

「シグムント！ シグムント！ 私よ！」

その鼻先にしがみつき、必死に呼びかける。状況が理解できていないのか、シグムントは巨大なまぶたをゆっくり上下させた。

「シャル……？ すまない、どうやら、私は……？」

「いいの！ 何も言わないで！ 私の方こそ——」

「こらシャルっ！」「そんな場合じゃないよっ」

騎士に抱えられて、双子が宙を飛んでくる。シグムントの眼に警戒の色が浮かんだ。

「この娘たち、ドイツの——」

「大丈夫、友達なの。私たちを助けてくれたのよ」

シグムントは意外そうにまばたきした。だが、そこは年の功。すぐに思考を切り替え、当面の脅威に意識を向ける。



巨大化したシグムントがいるのは、学院のと真ん中だ。ひっきりなしの銃撃と攻撃魔術がわずらわしいことこの上ない。

「……どうやら、軍から私を強奪したらしいな。無茶をする……王妃はどうした？」

「すぐにいらっしやるわ。だから飛んで！ 高く！」

「わかった——」

「タンク」がくる！ 道をあけろ！ 踏み潰されるぞ！」

シグムントが跳躍する前に、黒々とした煙が流れてきて、あの機械式ゴーレムが現れた。前回、ラスターカノンが無効化し、巨竜を叩きのめした怪物だ。

「相手にする必要はないわ。飛んで！」

シグムントが大きく羽ばたく。それだけで爆風が地面を打ち、歩兵をなぎ倒した。

巨人の突進は、間一髪、間に合わない。巨大な鉄拳がシグムントの尾をかすめ、崩れかけの公邸を倒壊させた。巨竜はそのまま風を裂き、霧の上に飛び出す。

「どこへ向かう？ 君も魔力を減じている。長時間の飛行は無理だ！」

「みんなと合流したいわ。捜して！」

「そうは言っても、霧が邪魔——」

「ねえ、あれ何？」「戦闘？ さっきの続き？」

騎士につかまり、双子が怪訝そうに正門を示した。霧の下で戦闘が起きている。黒い影が兵にのしかかり、打ち倒す。何か得体の知れない集団が、敷地外から攻め寄せ

ているようだ。それも、一体、二体の話ではなく……。

「何て数！ 千——二千はいるわよ……!？」

遠目には黒い狼のように見えるその存在を、シャルは知っている。

「ヒノワの式神よ！ 大隊規模！」

式神の軍勢が霧にまぎれて突撃し、機巧師団と交戦状態に入った。霧で発見が遅れた上、式神は銃器で足を止められない。たちまち白兵戦になってしまふ。

隊列が崩れ、師団の混乱が加速していく。北門側を護る部隊がそれに気付き、正門支援に向かうとした……が、その瞬間に、背後から別の何かが襲いかかった。

突如として湧き出したように見えた。こちらは霧に溶け込む白い体の——骸骨！

スケルトン兵、およそ千が一気呵成に襲い掛かる。銃で撃たれようが、炎で焼かれようが、不死の軍勢は止まらない。背面から強襲されて、軍の陣形が乱れた。

——上手い。師団は合流できず、南北に足止めされている。明らかに浮き足立ち、指揮の混乱が見て取れた。右往左往するばかりで、機能していない隊が多い。

呆気に取られていた双子が、不思議そうに首をひねった。

「ちょっと、変じゃない？」「機巧師団、自動人形が全然……ないよ？」

「……使えないのよ、怖くて」

シャルの首筋に冷や汗が伝う。今やっと、攻め手の周到さに気付いた。

「私たちが動き出す前——正門のあたりで《絶対王権》の歌が聞こえたでしょう？」

誰かが軍相手に使ったのだ。仲間の退却を助けるためだろうが、その真意は別にある。あれは、こちらには絶対王権があるぞと警告する意図！

「この街は一度、〈絶対王権〉で支配されているのよ。その脅威は、身に染みてわかっているはず……軍の機械人形を、この状況で動かせるわけがない……！」

動かせば、操られる。敵に〈駒〉を奪われるのだ。

だから、もしものときに抑え込める程度の、最低限の数しか人形を出さない。

人機一万二千のうち、半数が市街を搜索中。六千のうち、人形が使えないなら三千。霧で分断され、身動きの取れない部隊を計算に入れると、実質二千もないだろう。

つまり、あの機巧師団が——「数で負ける」事態になっている。

（このやり口……貴女なのね、アリス……！）

もつとも、この優勢は一時のものだ。霧が晴れ、指揮系統が回復すれば、すぐさま立て直してくるだろう。何と言っても、あちらは英国の精鋭だ。

「その前にケリをつけなきゃ……。貴女たちは逃げて。私は参加するわ！」

「ええーっ!？」

双子の声が裏返った。

「危ないよシャル!」「もう魔力がないくせに!」「上げ底なんだよ!？」

「宇宙の塵になりたいの!? 偽乳も盛りも関係ない! 私ほ女王陛下から一角獣の紋章を賜ったブリュー伯爵家のシャルロット——国難を前にして退けないわよ!」

シャルが竜の角をつかむ。竜は主の意図を汲み、降下を開始した。

シャルの足の下で、シグムントが感慨深げにつぶやく。

「君は、友人を作るのが上手くなったのだな」

「そ、そうかしら? もともとでしょ?」

「ほんの半年前には、学院の鼻つまみ者だったのにな」

「それは言わないで……」

「まるで子どもの頃に戻ったような——いや、あの頃とは違うな。今の君は、痛みを知り、孤独を知り、決して美しいばかりではない、人の心を知った」

虐げられる者の気持ちも、素直になれない者の気持ちも、今はわかる。

シグムントの洪い声に、ぬくもりが宿った。

「君はこの先、もつと多くの者を惹きつけるだろう」

「……本当にそうなら、嬉しいわ。だけど」

シャルは顔を上げ、戦場をにらみつけた。

「だったらなおさら、学生の学院を取り戻さなきゃ!」

シャルの宣言で、シグムントの五体に力がみなぎる。シャルもまた、磨耗していた精神が再び研ぎ澄まされ、尽きかけていた魔力が戻ってくるような気がした。

あの戦場に飛び込み、仲間の力になる!

決意とともに、シグムントの速力を上げようとした、そのとき——

「シャル！王妃がこっちにくるわ！」

脳裏にロッテの警告が響く。直後、人影が進路を塞いだ。

王妃グローリア。上空の風がぬるく思えるほどの寒気を感じ、シャルは震えた。

「シャルロット。愚かな娘よ」

王妃は虚空に静止したまま、怒りをおし殺した声で冷たく言った。

「女王の寝所に忍び込んだばかりか、英国の宝を盗み出すとはね。誉れも高きブリュウの娘が、かくも下賤のあるまい……見下げ果てましたよ」

「お言葉ですが、王妃殿下。私はいささかも恥じるところがありません」

「異なことを。恥じるべきです」

「すつと宝剣——ストラトキヤスターを抜き放ち、シャルに突きつける。」

「首を出すか、魔剣を返すか、選ぶがよい」

シグムントが牙を向く。シャルは萎える膝を叱咤して、毅然として言った。

「ブリュウは二二〇年、魔剣とともにありました」

「それで？」

「家族を売るくらいなら首を出すわ！ラスターカノン！」

竜のあざとから光の奔流があふれ、グローリアをのみ込んだ。

3

「ここはわたくしどもにお任せを！いざなぎ一門の意地を見せます！」

日輪が凛々しく吠え、さらに多数の呪符をまいた。彼女の二人の供もまた、次々に式神を召喚し、戦線を押上げていく。

その後方で、ロキとフレイが移動を開始した。

ガラム、ジブリールを連れ、正門を迂回するルートで学院に潜入する。

「頼むぞ、姉貴。学生連中の動きを探れ」

姉がうなずき、指笛を吹き鳴らす。大たちは一斉に散開し、周辺を探り始めた。

フレイもガラムも病み上がりと言っている体だが、気力だけは十分で、問題なく魔術を行使している。フレイが目を開け、犬たちと感覚を同調させた。

ロキはケルビムのブレードを肩に担ぎ、ジブリールに魔力を渡して、敵の接近に備える。幸い、軍は大混乱に陥っていて、まだこちらに勘付く素振りはない。

「う……学生みんな、避難……始めたみたい。あっちの方」

姉が西を示す。正門との位置関係を頭に描き、ロキは避難先を推測した。

「コロセウムの方角だな……避難所にはおあつらえ向きだ。行こう！」

姉が指笛でガラムたちを呼び戻し、ラビにまたがる。枯れ木の隙間を縫うように駆け、数百メートルほど行ったら、小走りに駆ける学生の一団を見つけた。

少し遅れて、黒刀をぶら下げた少女が走っている。

「あいつは実戦に参加しないのか……。好都合だ」

先につぶしておこう。ロキは背後から近付き、「ヘイゼル」と呼びかけた。

振り返ったヘイゼルが、ぎくつとして飛びずさる。

「……いい度胸。そっちらから顔を見せるなんて」

「アンリエットはどこだ。それから、アスラは？」

「……教えるわけはない。父なる王の声を聞け——犬どもは互いに殺し合う！」

黒刀をかざし、^{コウケン}《勅命詔書》の魔術を使う。強烈な支配の魔術が飛んできて、ガラム犬に襲い掛かった。意志の弱いガラム犬に抵抗の術はない。

……はずだったが、ぐつと前脚を踏ん張っただけで、ヘイゼルの命令に従わない。

驚愕するヘイゼルの横つ面を、激しい突風が引っぱたく。

ガラムが放つ音の砲弾。直撃ではなく、空気をかき混ぜただけだ。コリー犬のリビエラが、おんつ、おんつ、と仲間に向かって吠えている。

何とも単純な対処法。風が耳元で騒ぐとき、声など聞き取れないものだ。

魔術のタネが割れるというのは、つまりこういうことだ。まるつきり悪役の台詞だなど思いつつ、ロキはもう一度ヘイゼルに言った。

「今のおまえでは百年かかってもオレたちを殺せない。痛い目に遭う前に、質問に答えろ。アンリエットと、アスラはどこだ？」

ヘイゼルは無言のまま、青ざめた顔で姉弟をにらんでいる。

「しゃべる気がないなら、失せろ。見逃してやる」

「な……親を殺されて……黙ってられるわけ、ない！」

ヘイゼルは挑発に乗って逆上し、黒刀一本で斬りかかってきた。

魔術が効かずとも、魔剣で強化された刃物は十分脅威だ。学生離れた魔力と言えるし、本人の剣技も卓越している。だが、ジブリールの盾には傷もつけられない。

ヘイゼルはめったやたらに刀をふるう。やがて魔力が尽き、魔剣が乱れ、刃が欠けた。それでもヘイゼルは手を止めない。悔し涙がこぼれ落ち、ひと振りごとに宙を舞った。

（親を殺されて……か）

うつすら事情を察する。ヘイゼルは、ブロンソンの実娘だったのだ。

ほかの孤児たちとヘイゼルは立ち位置が違う。だから、ホームにいなかった。

娘を実験材料にするなど、養父の人間性は腐っている。だが、ひよっとしたら——

ほかの被験体には見せていない、父親の顔を見せたことも、あったのだろうか？

「ロキ……もう……」

姉が懇願するようにつぶやく。自分を殺したも同然の相手なのに、可哀相になったのか。ロキがジブリールを退くと、フレイはヘイゼルの前に進み出て、

「う……ヘイゼル、あのね……私たちの……」

——姉の胸中には、どんな想いがよぎったのだろうか？

フレイは何か言いかけたが、結局は言わなかった。

それが姉の優しさだ。不器用で鈍臭い姉だが、こういうところは、気が回る。だから、代わりに言ってやる。ロキは背後から姉を支え、

「おまえだけが親を殺されたなどとは、思わないことだ」

「……どういう、意味？」

答える必要はない。ヘイゼルから姉を引きはがし、その場を立ち去る。姉弟の背後で、泣き叫ぶ声があったが、ロキはもう振り返らなかった。

再びコロセウムに向かう。本立ちを行くことしばし、古代の闘技場を思わせる、石造りの建造物が見えてきた。〈手袋持ち〉のロキにとっては、思い入れのある場所だ。

「上から行くぞ、ジブリール」

跳び乗って、高度を上げる。あわてる姉を見下ろし、ロキは一方的に告げた。

「オレ一人でやる。あんたは隠れていろ」

「う!? ロキ、だめ!」

「もう前回のようなヘマはしない。——生きて戻るよ」

気持ちは通じたのか、フレイは少しだけ表情をやわらげ、うなずいた。

外壁を超え、闘技場の中へ。既に五百人超の学生が集まり、ほとんど人数が増えていた。上から見ると、ここが避難所に選ばれた理由に納得がいく。外壁が流れ弾から護ってくれし、延焼の危険もない。そして、戦略的価値に乏しい。

アスラの考えか。ロキは感心しながら、舞台のと真真中に降り立った。

「剣帝!」「えっ、本物!?」「や——やる気か!」

アスラの同志たちが口々に声をあげる。ロキは彼らを睥睨し、敢えて殺気をまき散らした。思った通り、彼らは大人しくなり——

「そこまでだ、剣帝。僕の同志たちを脅かさなでくれ」

——その親玉が現れる。

自動人形インドラを連れた、浅黒い肌の男子学生。悠然とした立ち居ふるまいに指導者の風格が備わっている。顔つきは相変わらず凜々しいが、少しやつれて見えた。

宙に浮く盾を見て、アスラはわずかに眉を上げた。

「完全統制振動を積んだのか。新型は調子がよさそうだ」

「ああ、これは見た目以上に出来物だ。真の姿を見せてやれ、ジブリール」

ロキの命を受け、盾が割れる。各部が移動して、人間に近いシルエットになった。

ケルビムは上半身が鋭利だったが、こちらはディガンマ同様に足が鋭い。一方、腕部は角張り、自動拳銃のスライドに似た形だ。背中にリボルバーの弾倉を思わせる部位があり、シリンダー状の突起が三本、突き出している。

腰からは二枚の翼が生えている。翼は多く的小羽で構成されていて、一枚一枚が整流板であり、熱交換用のフィンであり、短剣状の刃だった。手持ち武器は小ぶりの剣一本——ケルビムやディガンマより貧弱だが、存在の凄みはその二体以上だ。

「……君がここへ〈避難〉してきたのなら、我々は受け入れようと思う」

「親切だな。だが、そんなつもりは毛頭ない」

「……投降の意志があるなら、それも受け入れる」

「そんなつもりも、毛頭ない」

視線と視線がぶつかる。それだけで突風が吹き荒れ、学生たちが一斉に身を引いた。勘のいい者は不穏な気配を察し、急いで舞台から遠ざかる。

アスラは魔力を高め、インドラに右手を向けながら、ささやいた。

「今さら说得できるとも思えないが、紳士として警告する。命を粗末にするな。君は次の時代に必要な人間だ。せつかくの新型も、破壊されては無駄になる」

「同じことをあなたに言おう。愚かな真似はやめろ。女王の干渉を否定し、学院の自治を維持すると誓え。そうすれば、オレたちが戦う理由はなくなる」

アスラは黙殺した。ロキの言ったことは、あり得ない提案だ。

「こちらにつけ、アスラ。学生全員が裏切れば、師団への痛撃となり得る」

「……残念だが、君とは意見が合わないようだ」

「ずいぶん見切りが早いな。オレの知っているアスラ・オーエンは、弁舌に自信を持っていた。奴ならきつと、相手が納得するまで言葉を尽くしただろう」

アスラがインドラに送る魔力を増大させる。——もう言葉は不要ということだ。

魔力の閃光が飛び散り、二体の自動人形が同時に動いた。

稲妻と斬撃が交錯する。かすめてすれ違い、位置を入れ替えたとき、ふと見えたアスラ

の横顔は、先ほどよりも晴れやかに見えた。

4

閱兵式が始まった。

市民には盛大な拍手で、国境警備隊には敬礼で迎えられ、皇太子が壇上に立つ。

広場は大騒ぎだが、市街は全体に静かだ。誰も硝子の方には向かってこない。ここには雲雀と、金薔薇と、獅子型自動人形がいるだけだ。

硝子はため息をつき、そして自嘲した。

「……どうしたの、硝子。まさか、期待していたわけでもないでしょう?」

「ふふっ、お楽しみの始まりじゃー」

金薔薇の熱い視線の先で、皇太子がスピーチを始めた。

『我と我が伯父の誇り、帝国の最前線を護る精鋭たちよ。今、諸君らの気高きかんばせに、勇猛なる魂に、輝かしき忠誠に、かくも私の心は満たされている』

拍手と大歓声が沸きあがる。その熱気に反比例して、硝子の心は冷えていく。

——神に死刑囚の解体を迫られた、あのときの気持ちを思い出している。

なぜ、私は今日まで生きながらえてしまったのか。もっと早く死ぬべきだったのに。
(……おまえのせいよ、夜々。それから坊やの粗忽のせい)

夜々はまだ生きている。黒薔薇の助力で、この世に踏みとどまった。私なら生かしてやれるかもしれない。ここを切り抜けることができれば。魔女を口八丁で騙し、機巧都市に戻れば。そう思い続けて——死に時を誤った。

思った以上に、金薔薇に隙はなかった。……いや、逆か。あまりに隙だらけで、誘っているように見えたから、行動できなかった。

スピーチが佳境に入り、聴衆が盛り上がる。どうやら、ここらが——潮時だ。

袖に手を差し入れ、最期の手段に訴えようとしたとき、

「のう、花柳斎。ぬしはなぜ、薔薇の師団に参じた？」

不意に問われ、硝子は面食らった。なぜ今、そんなことを訊く？

「捜しておるのかえ？ 今なお」

「……誰を？」

「先日（の）《茶会》のおり——ぬしは落胆したのではないかえ？ あの中に、ぬしの求める顔が——日本人の顔がなかったから」

「……何をおっしゃっているのか、わからないわ」

「知っておるのか。かつて極東に、それは腕のいい人形師がいた。飲み代を踏み倒し、利き腕を奪られた大うつけよ」

——どうして、その話を知っている？

「実に、残念よの。《生き人形》の業を応用すれば、瘴気を無限に生み出せるかと思うて、

わしも胸躍させたのじゃが……。とまれ、わしと紫薔薇の利害は一致した。紫薔薇は常々、人形使いを邪魔に思うておったしの」

——櫛の見立ては、誤りだ。いや、真実かもしれないが、決定的に足りていない。狂士郎は軍の内紛で死んだのではない。裏で傀儡の糸を引く者がいたのだ！

金薔薇が微笑む。麗しい微笑の奥に、むせ返るような死の臭気が漂った。

「さあ、花柳斎。見極めさせておくれ。ぬしを——薔薇の師団への忠誠を——」

広場を示す。己が仇も同然だと明かした上で、なおそれを迫る。どこまでも硝子を試してくる。あるいは、遊んでいるのか。なぶりものにして……馬鹿にして！

硝子は荒い呼吸を繰り返して、己の中の炎を鎮めた。

袖から《切り札》を取り出し、そっと掲げる。

灰色の冬に鮮やかな紅色が映える。林檎は美しく色づき、炸裂寸前の状態だった。

金薔薇が造り上げた超兵器。《融合爆裂》の究極形、金の林檎。

——を映した、水晶玉だ。

「水晶玉……？ 映っておるのは……本物か！」

金薔薇の声が上ずる。ただし、表情は嬉しそうに見える。

「もう食べ頃に熟れておる。いつの間にくすねて……。それに、起爆の腐毒はどこで調達したの——いや、ぬしならば、やるか。わしが発散する瘴気を集める手もある」

金薔薇は楽しげに笑いながら、獅子型自動人形のたてがみを撫でた。

「わしには万物^{ばんぶつ}流^{りゅう}転^{てん}がある。炸裂で倒せはせぬぞ?」

「逃^{にげ}げた先に林檎^{りんご}がなければいいわね」

「……どこに隠した」

「どうぞ捜して頂戴な。色々教えてくれてありがとう。これで未練なく逝けるわ」

視線がぶつかり、火花を散らす。そうするあいだにも、林檎の赤みが増していく。爆発の予感がそうさせるのか、あたりの空気が凍りついたように冷たくなった。

金薔薇は見定めるように硝子を見た。水晶玉に映る林檎は、どこに隠されているのか。

金薔薇を倒すつもりなら、そう遠くない位置だろうが……

「近くにあれば、この街は地図から消える。皇太子も死ぬるぞ?」

「おあいにく。私は他人の命なんて考えないの」

「鍔金^{めづき}がはがれたの。つまり、わしに背向かうのじゃな?」

「ええ、そう。さあ、どうなさるの? あちらが終わってしまいうわよ?」

演説はまともに入っている。硝子は暗虐的な気分で、金薔薇を見下ろした。

せいぜい、悩むがいい。そうして時間を無為にして、私とともに死ねばいい。

金薔薇は半眼になり、面白くなさそうに広場を振り向いた。

「……暗殺が『結社の仕業』とされては、戦争にならぬ。あくまで民族紛争でなければの。従って、林檎でやらせるわけにはいかず——引き金はわしが引くわえ」

亀裂のような笑み。金薔薇の手に硝子の短銃が出現した。

時間を停めて、奪ったようだ。躊躇^{ちゅうちう}なく引き金を引き、皇太子に発砲する。

その展開は予想していなかったので、硝子は肝を潰した。ただの銃弾なら当たるはずもない距離だが、魔女が念動制御した弾丸だ。弾丸は微妙に軌道を修正しつつ、皇太子へと飛んでいく。硝子の目には、それはひどくゆっくり、そしてちっぽけに見えた。

世界を破壊に向かわせるのは、こんなちっぽけな、たった一発の弾丸なのだ。永遠にも思える一瞬の後、弾丸は皇太子の胸に吸い込まれ——

——すり抜けた。貫通し、背後の壁を欠けさせる。血しぶきも飛ばなければ、打ち倒しもしない。皇太子はこぶしを振って、まだ熱弁をふるっていた。

ほんの一瞬、市民が怪訝^{けげん}そうにしたが、それだけだ。銃声も聞こえていないらしい。「まったく大したもんだぜ。あんたが造った(八重霞^{やえがすみ})は」

聞き覚えのある声。振り向きたくなかったのに、反射的に振り向いてしまう。ホテルの屋根に腰掛けて、彼とはけた顔で笑っていた。

「よう、硝子さん。久しぶりだな」

「坊——」

現れたのは雷真^{かみまこと}だけではない。青みがかった髪^{かみ}の乙女と、紅葉色の髪^{かみ}の乙女——二体の乙女型自動人形^{おんながたしやうどうにんぎやう}が、ともに泣きそうな顔をして、彼の背後に控えている。

雲雀^{うさぎ}が刀を一閃させる。斬撃が延長され、屋根に大きな亀裂を生んだ。

だが、雷真には当たらない。——視えている場所にはないのだ。

このバルコニー全体が、既に八重葎の支配下にある。金薔薇は感心した様子で、「やるの。わしの靈感を欺くばかりか、かくも間近に転移して、気配を悟らせぬ……いや、まさか……ずっと待ってあったの……か？」

「大事な人とのデートなんだ。先にきて待つくらい甲斐性はあるさ」
こともなげに肯定する。金薔薇は面白がるような目をした。

「なるほどの……。ようこがわかったの？」

「腕利きの狙撃手——とやらが言うには、広場を狙うなら、ここなんだとよ」

「大した小僧よ。何をしにきた？ 少々、立て込んでおるのじゃがな？」

「ああ、聞いてた。忙しい理由はこれだろ、ばーさん」

背中から丸い物体を引っ張り出す。それは、鎖でぐるぐる巻きにされた球で——
外しちゃうだめ、と硝子が叫ぶ前に、雷真は封印の鎖を解いてしまう。威力制限の封印を
失い、本当に危険な大量破壊兵器となった林檎を、雷真は手でもてあそんだ。

「見つけるのは苦労したぜ。おかげで今日は寝不足だ——ほらよ」

ひょいと放り投げる。金薔薇がそれを腐毒で迎え撃ち、消滅させた。

かくして、硝子の計画はあつてなくついていた。

「坊や……自分が何をしたかわかっている？ それは本当に、最期の……手立て」

「最期なら、なおさら認めるわけにはいかねえよ」

雷真は硝子を見つめ、そつと言った。

「力尽きて連れ帰る、なんて野暮はもう言わない。俺たちは硝子さんを助ける。そして、
一緒に帰ると言ってくれるのを待つ」

弾丸のように放たれた言葉が、硝子の胸を貫いた。

……何て迷いのない瞳だろう。磨き上げられた日本刀のように、静かで、強い。

硝子をまるで疑っていない。こんな私を——助けると言ってくれる。

愚かな子。その愚かしさを、愛しいと思う。

だからこそ、腹立たしくもあるのだ。

林檎を失った今、硝子が金薔薇を倒す手段はない。どうやって金薔薇から逃れるという
のか。それに、硝子をかまくまえば、雷真と三姉妹にまで軍の捜査が及ぶ。硝子が己の心を
殺し、憎まれ役に徹し、ようやく整えたお膳立てが、すべて台無しだ。

硝子は眉を吊り上げ、雷真をなじった。

「あきれるわね……さんざん教えてあげたのに、ちっとも血肉になっていない。そうやって
すべてを背負おうと言うの？ この世の全員の重荷を？」

「色んな人に言われたよ、それ。今までも」

まったくこたえていないのか。雷真は悪びれもしない。

「俺は自分勝手な人間だし、神さまの真似事なんて無理だ。けど、俺は自分の足で歩いて
いるし、倒れそうになったときは、支えてくれるやつらがいる」

いろいろと小紫を振り返る。二人は微笑み、うなずいた。

「俺の背中にや、まだ余裕があると思うんだ。なら、背負うのをやめることはできない。まして、硝子さんの荷物なら、なおさらな」

ゆつくりと立ち上がる。いつの間に、彼はこんなに大きくなったのだろうか？

硝子知らないうちに——気付かないうちに。

「つまりは小僧、わしから花柳齋を奪おうと言うのじゃな？」

全身に瘴気をまとわりつかせ、金薔薇が雷真を見上げる。雷真は肩をすくめ、

「そうだな。そうなりや理想的だ」

「かまわぬよ。ぬしには、林檎を見つけた功がある」

「え、マジか？ 返してくれるって？」

アストリッドは長い爪をくねらせ、雷真に手を差し伸べた。

「ぬしが、わしの息子になるなら。ぬしならば、薔薇の席を与えてもよい」

「断る」

「——迷え。せめて驚け。張り合いがないわ」

「それも断る。あんたのやり口は仲間から聞いてんだ」

「残念じゃの。では、この取引——折り合わぬ」

金薔薇が瘴気の狼煙をあげる。その途端、広場で見物中の市民たちに異変が起こった。紙が水に溶けるように姿が崩れ——下から、黒いマントが現れる。

結社の魔術師だ。市民にまぎれ込ませていたらしい。



駆け込んできた大型自動人形が融合爆裂の魔術を放つ。爆炎と粉塵が広場を埋め尽くし、皇太子がのみ込まれてしまった。

「そう……私が失敗しても、何の問題もなかったというわけ……」

硝子は絶望的な気分ですぶやく。雷真も冷や汗をぬぐい、

「やっぱ、そうかよ……。そっちは頼むぜ、先生！」

「!?」

広場に別の団が出現する。壇上を護って立つ、黒コートの魔術師たち。襲撃側とよく似た装束だが、役割が決定的に違う。彼らは皇太子を護っているのだ。

この阅兵式、何と言う茶番だろう。駆けつけた市民にはテロリストがまぎれ、国境警備隊には協会の戦士がまぎれ込んでいた。

たちまち魔術の応酬が始まる。無関係の市民が度肝を抜かれ、逃げ惑った。

金薔薇はあきれ顔で雷真を見た。

「何と節操のないことよ。ぬしは〈魔王殺し〉——協会に追われる身の上じゃろ?」

俺は札付きの不良学生でね、手配されるような悪行は年中行事さ。大体、俺が殺したつという魔王さま——今頃、倫敦で大暴れしてるつてよ」

ついに、金薔薇は声をあげて笑った。高らかに。痛快そうに。

「銀薔薇め……子飼いの魔王に出し抜かれようとは……気の毒にな、ははは！」
涙をぬぐい、笑いながら雷真を見る。

「実に面白い小僧よ。よからう、花柳斎ともども、わしが落とし前をつけてやる」
「あー、すみません、金薔薇さま」
それまで黙っていた者が、申し訳なさそうに割り込んだ。

軽い口調とは裏腹に、重たい死の予感が、その場の全員にのし掛かる。

「私がやります。で、その彼を討ち取り、皇太子さまを暗殺できたら、花柳斎先生を救していただませんか。さっきの——爆弾? あおるまい、なかったことに」

「……胡乱じやの、サムライ。ぬしはこちらにつきたいと申すか」

「私は花柳斎先生の護衛です。彼女が生き残る——その可能性が高い方につきます」
金薔薇はにまつ、と愉悅の笑みを浮かべた。

「よからう。やって見せよ」

「——待って! 雲雀さん、待ちなさい!」

「いやあ、それはできませんねー」

雲雀の親指が鯉口を切る。ちきりと、剣呑に鰐音が響いた。

「先ほどから血が騒いで——どうにも、止まらないのです」

にらんだだけで空気が裂け、雷真の頬が実際に切れた。八重霞の幻影が崩れ去り、雷真と姉妹の本当の位置が明らかになる。立っていた場所から、数メートルとなりだ。

「さあ雷真。私を倒せたら、〈山王一刀流〉〈古賀無心流〉免許皆伝としますよ」

「……ありがたい話だが、そりゃ遠慮するよ」

うっすら血をにじませ、雷真もまた凄絶な笑みを浮かべた。
「俺はもう、剣を捨てた！」

5

学院で起こっている戦闘の様子は、運河沿いの〈隠れ家〉にも伝わってきていた。
火薬の爆発が地響きを生み、閃光と騒音が不穏な気配をおおる。

天井の塗料がはがれ落ちるのを見て、エヴァは口を開いた。

「あちらは激戦のようですね、イオネラさま」

イオネラは機巧式のゴーグルをかけて、ピーカー内の液体をいじっている。

「みんなの無事を祈るしかないね……ああ、やっぱりだめだ！ この水の中では、魔術回路がつかない……！」

イオネラがピーカーを放り出し、くしゃくしゃと頭をかきむしった。

「だってしょーがないじゃないっ、私が造ったものじゃないし！ あーもうっ、何で私ってこんなに頭悪いの!?」

「落ち着いてください。イオネラさまはちゃんと天才です。天才とバカは紙一重です」

「最後のは言わなくていいんだよ!?」

「あの魔女の誘いに乗ったこと、後悔されているのですか？」

イオネラは口をつぐんだ。きゅつと両手の指を握り込む。

「一か月前——夜々の手術を試みたとき、イオネラは一度、失敗している。

人間で言う〈免疫力〉を低下させ、精瑠の自己修復を阻害しようとした。それで少しは時間を稼げる目算だったのだが、イオネラがかつて著作で学んだものより、夜々の精瑠は能力が高く、抑制できなかったのだ。

刻一刻と死に近づく夜々を、イオネラは見ていることしかできなかった。だが、手術室に奈落の穴があき——

「君の判断は正しかったよ」

二人の背後、モニターの前でアリスが言った。

「あの状況なら、悪魔とだって契約するさ。僕が現場に居合わせたなら、黒薔薇に土下座してでも、その水を貸してもらっただろうね」

不機嫌な顔で画面をにらむ。画面にはワイヤーフレームの地図が浮かび上がっている。戦況を投影したもので、リアルタイムで情報を取得しているのだ。

アリスの策は見事にはまり、痛撃を加えている。だが、アリスの表情は冴えない。

「あの役立たず、飛び出してきたでもいいだろう。……本当にクビにしてやろうか」

学院は現在、大混乱に陥っている。囚われた者が脱出するなら、今こそ好機だ。だが、彼女の自動人形は一向に姿を見せる気配がなかった。

「あ……すみません。完全統制振動の人形ではないようですが——」

エヴァの唐突な言葉に、アリスとイオネラが同時に振り向いた。
 「動体センサーに感あり。誰かがきます。数は五。女一、男四。自動人形^{オートマド人}三体と、小火器
 多数をコンテナで輸送——ここに運び入れる模様です」

「きたね。じゃあ僕が迎えに行こう。いや、気の早い彼女のことだ、もうとっくに入つて
 きて——いるようだね、ソーネチカ？」

入り口に呼びかける。ばーん、と大きく扉が開き、縦巻き髪の淑女^{ルビィ}が現れた。

ふくらませたスカートのすそをつまみ、しずしずと歩いてくる。屈強そうな黒服が四人、
 台車でコンテナを運んでいた。

「遅いお着きだね。ぎりぎりじゃないか」

アリスが親しげに嫌みを言う。ソーネチカは扇を取り出し、口元を隠して笑った。

「呼びつけておいて、ずいぶん言い過ぎますこと」

「呼んで欲しいんだと思つてね。いつまでもバルト海あたりでモタモタしてるから」

「舞踏会の招待状が届かないのは腹立たしいものですわ。それに、遅きに失した……と
 いうほどではありませんでしょうか？ 宴はたけなわと見受けました」

ソーネチカは生き生きと——いっそ『うきうき』として、黒服たちに合図を送る。黒服
 たちがコンテナを開けると、中には機械式ゴーレム三体と、ロシア製の自動小銃、拳銃に
 弾薬、爆薬などが詰め込まれていた。家の事情もありますし」

「再入国だけでもひと苦勞でしたわ。家の事情もありますし」

「助かるよ。例のものはちゃんと持つてきてくれただろうね？」

「無論です。——あれを」

黒服の一人が機敏に動き、コンテナから化粧箱を取り出す。

慎重な手つきで梱包^{梱包}を解き、ソーネチカに差し出す。箱の中には直径二センチの金属球
 が収まっていた。球には見た瞬間に感じるほどの魔力があった。

イオネラが真つ先に反応し、ソーネチカの手元に顔を寄せる。

「見せて！ これって、まさか……!?」

「ええ。そうは見えない外見ですが、まぎれもなく魔術回路です。〈下から二番目〉——
 今^{フッド}は〈魔王殺し〉ですか——の人形が搭載すべきもので、ではありませんか？」

金剛力の魔術回路、ということだ。

イオネラは見た瞬間にわかつたらしく、興奮と緊張で青ざめていた。

「あとは貴女^{あなた}しだいだ、エリアーデ教授」

アリスがイオネラに託す。イオネラは怖じ気づき、尻込みした。

「ま、待つて……これ……もし……組み込みに失敗したら……?」

「あまり気負わないで。無理にやれとは言わない。実は君以外にもう一人、保険をかけて
 あるんだ。……このことを知つたら、愛しの彼は僕を殺すかもしれないけどね」

瞳を翳らせて、微笑む。だが、アリスにも信念があるのだろう。毅然とした顔で、

「ソーネチカ。出撃前に、頼みがあるんだけど」

「何ですの？ わたくしもう、我慢の限界ですのよっ」

悩ましげにアリスをにらむ。だいぶん、フラストレーションを溜め込んでいるらしい。アリスは苦笑して、歩きながら言った。

「僕を前線まで護衛してくれ。うちの無能執事を迎えに行きたいんだ」

「前線ですって？ あらあらまあまあ、でしたら、お安い御用ですわ！」

全員が早足になって、アリスとソーネチカ、黒服たちが出て行った。後には、イオネラとエヴァだけが残る。

イオネラは青ざめたまま、金剛力の箱を大事そうに抱えていた。普段の彼女なら、好奇心に目を輝かせ、すぐにも観察を始めるところだが……。

「……こんなとき、自分が凄腕の魔術師だったらいのにつて思う。一マイクロミリ単位の精度で工作ができて、お城を持ち上げるくらい出力があつて、オーケストラを独りで演奏できるような、すごい念動の才能があつたら」

「それは……もう人間ではありません」

記憶のデータベースを検索する。脳内に浮かんだのは千手観音像だ。

「イオネラさまにできないのなら、応援を頼んではいかがですか？」

イオネラは少しだけ彼女らしさを取り戻し、前向きに検討を始めた。

「うん……？ そっか、ゼルダちゃんにやつてもらえば……人体にも通じてるし。でも回路の把握はエイミーちゃんの方が適任……つてゆか、二人ともここにいないよ！」

テーブルに倒れ込み、頭を抱える。

「だめだー！ こんなことが一人でやれる人間なんて、絶対あっち側の人！」

「どちら側でしょうか？」

「神さまだよ！」

私くらい生体機巧に詳しくて、ゼルダちゃんくらい高出力の魔力が飛ばせて、人形師造りの経験も豊富つていう、とんでもない魔術師がいれば……！」

それはおそらく、ラザフォードをも凌駕する魔術師だろう。

エヴァのデータベースには、一人、可能性のある人物が登録されていた。

そのとき、イオネラが頓狂な声を出した。

「——あれっ、何だろ？ 夜々ちゃん……今、動かなかった？」

夜々は静かに眠っている。一応、エヴァは水質を確認してみた。

「……誤差の範囲ですが、魔力の乱れを検知しました。しかし拍動は……しました！」

ドクン、と心臓が脈打ち、水槽に血液が漏れ出した。

「何でっ？ 霊薬が劣化してる……!? だって、この水、一年はもつて——」

イオネラが言い終わる前に、夜々がごぼつと息を吐く。

ぎよつとする二人の前で、夜々は胸をかきむしった。どこにそんな力があるのか、凄まじい魔力がみなぎり、霊薬の魔術的拘束を断ち切っていく。

「夜々ちゃん……どうして……!?」

夜々が暴れるたび、ますます血液が漏れ出し、霊薬の性能を侵していく。回路は失われ

ているのに、夜々の血液にはまだ金剛力の特徴が残っているらしい。魔活性不協和の原理により、霊薬はどんどん劣化していった。

なぜ今、夜々が再起動してしまったのか。

その回答——あふれ出した魔力が夜々のひたいに収束し、結晶化していく。

「そっか……夜々ちゃんには……わかるんだね……」

イオネラは涙を浮かべ、もがき苦しむ夜々を見つめた。

「雷真くんの身に、危機が迫ってるって——!」

今や、夜々のひたいには角がきらめいている。

エヴァのセンサーが焼き切れそうな、強烈な魔力の発現。それは霊薬を完全に無効化し、ついには夜々を解放した。水槽が弾け飛び、ざあっと水があふれ出す。

「夜々ちゃんっ!」

イオネラの悲鳴が裏返るのと、エヴァがそれを感知したのは、ほとんど同時だった。

「警報結界に反応——誰か——きますす——」

最悪のタイミングで、侵入者がやってきたようだ。すつ、すつ、と衣擦れの音を立てて、六つの影が二人の背後に立つ。

やがて、あふれたレーテの水を踏みながら、一人の若者が入ってきた。

「……貴方は」

先ほどエヴァのデータベースがはじき出した、「可能性のある」魔術師だった。



Chapter 12 あなたが愛した人形 #2



1

夢とも知れない夢の中に、夜々はいた。

それはいつのことなのか——夢の中で、夜々は硝子になっ

暗い屋敷の研究室の片隅で、硝子はガラスの容器を眺めていた。

水の中に着いた光がきらめき、美しい。その表面に、ふと、荒くれ者のような白髭の男が映った。硝子は振り向かず、容器越しに笑いかける。

「甕富士献呈の功で、また昇進されたんですってね。おめでとう」

硝子の顔がゆがむ。硝子に腹を立てている？ それとも、自分自身に？

「……駄々をこねるな。ひとたび力を見せた者が、次を望まれぬと思うのか」

「もつと頂戴、もつと頂戴って、ゴネる方が駄々っ子じゃない?」

「うぬは才を見つけた。軍は色めき立った。もはや勝手は許されぬ。なおも拒むと言う」

のなら……俺おれももう、うぬを護まもつてやることができぬ」

「まあ、薄情だこと。私たちは一蓮いちれん托生たくしょうでしよう？」

「そうだ。俺が失脚して困るのはうぬも同じはず」

「なら、上にはこう伝えて頂戴な。『花柳かやう斎さいは隼おぼろ富士ふじをはるかに上回る新兵器（雪月花）』
にかかりきりで、隼富士にまで手が回らない」とね」

背後で、榊さかきが身を乗り出すのがわかった。

「その雪月花とやら——実在するのか？ 俺は聞いておらぬ！」

「だって内緒にしていたもの。驚かせてあげようと思つてね」

悪戯いたづらっぽい笑み。榊の瞳に野心の炎が閃いた。

「……それは、いかなる人形だ？」

「そうね……私が造る最後の人形になるかもしれない」

「聞き捨てならんな。狂士郎の業を誰が継ぐ」

「後のことなんて知ったことじゃないわ。だけど、（神さまの子）は私が造つて見せる。
あの人が本当に望んでいたもの、夢見たものを、この世に顕現させる」

視線と視線、意地と意地がぶつかつて、もみ合った。

「……雪月花の完成まで、どのくらいかかる？」

「成育に四、五年。仕上げには一年といったところね」

「予見」のことは教えたはずだ。あの夜や会かいに間に合うか？」

「一間に合わせるわ。仕上げは夜会でやるつもり——これなら、上も納得しそう？」
「納得させる」

榊は力強く請け合い、工房を出て行った。

榊が去ると、硝子しょうしは再びガラスの容器をうつとりと眺めた。

今はまだ生まれたての——否、生まれる以前の、魔力と有機物の集積に過ぎない。
だが、これがいずれ（命）になることを、硝子は知っている。

「ねえ、おまえたち。創造主の勝手で生み出されるのは気の毒ね？」

まだ耳も目もない相手に、硝子は語りかける。

「人はきつと、おまえたちを蔑むでしょう。人とも人形ともつかぬ化け物として忌み嫌う。
おまえたちも私を恨む。どうして造つたのかと、なじられるのが目に見えるよう」
心を持たない隼富士なら、そんな心配はいらなかった。

「だけどね、お天道さまのもとと、自分で生まれてくる命なんて存在しない。すべては親の
勝手で生み落とされるのよ。だから、私を恨むのはお門違い」
歌うように、優しく告げる。

「その代わり、とびつきの体をあげる。誰もが目を奪われるような美しさを。それから、
隼富士を単機で負かす——三体そろえば一個師団も殲滅できる、そんな力をね」
だから、姉妹で仲良くなさい。ともに支え合い、互いを大事になさい。
ときには喧嘩けんかしてもいい。だけど、決別けつべつしてはいけな。

ぶつかつても、離れない。それが姉妹であり、家族であり——人間だ。三つの心臓を眺めながら、硝子は生まれてくる子たちに想いをはせる。「おまえたちは私の血と肉を享けた。『お腹を痛めて』生んだもの同じよ。だから、誇りを持ちなさい。たとえ、人に蔑まれることがあっても——」

おまえたちは、私の〈子ども〉なのだから。

2

雪がちらちらと舞うバルコニーで、雷真は雲雀と向き合っていた。吐く息すら凍りそうな冷気の中、冷や汗が背中を伝い落ちる。

——かつてない確実さで、死を予感している。鼓動が速まり、胸を突き破りそうだ。

この男は、雷真を殺さないのではないか？

それが甘い期待であると、生存本能が告げている。

いつも笑っているような雲雀の顔が、今は険しい。嘘のない本物の殺気を発散している。

その雲雀の後ろでは、アストリッドが屋根に腰掛け、高みの見物と洒落込んでいた。硝子は雷真を挟んで反対側、手すりに近い位置から成り行きを見守っている。

そしてアストリッドの足もと、石壁の陰に、獅子型自動人形が伏せていた。

（あれが〈万物流転〉——）

注意がそれた瞬間、眼前に白刃が迫っていた。

のけぞってかわし、後方転回しながら蹴り上げる。雲雀は最小の動きで見切り、返す刀で雷真の足を落とそうとした——が、そうせず、後ろへ跳躍する。

「雷真殿、魔力を！」

請われるまま、いろりに魔力を渡す。次の瞬間、一帯の空気が氷結した。

足場や壁など、至るところから氷柱が生え、機関銃のごとく雲雀を襲う。だが、雲雀はこのレベルの認識力を持つ相手は、直線的な攻撃ではとらえにくい。

だが、いろりの狙いもまた、別のところにある。砕けた槍が風に溶け、いつしかあたりは、深い氷霧に覆われていた。

「囚獄殺し——霜曇り」

しゃきんっ、と涼やかな音が響き、氷塊が雲雀を閉じ込めた。

だが、氷に閉じ込められた雲雀は——笑っていた。

凍っていない！ 刀で氷の棺を砕き、いろりに飛びかかる——

「花」がおらぬぞ！ 剣士よ！」

魔女から余計な警告が飛んだ。雷真も、いろりも、たぶん小紫も、ぎくつとした。

視えない誰かが雲雀の背中に降ってくる。長い髪がひとふさ切れて、首筋から赤い血の糸が飛んだ。奇襲は成功——だが、事前に察知されたため、絶望的に浅い。

小紫が着地した瞬間の隙を、雲雀は見逃さない。小紫の技量では、防げない！だから、雷真が雲雀の背後を取っていた。

小紫は陽動、こちらが本命だ。八重霞にまぎれ、水平に回転しながらの蹴りを見舞う。連続でくるとは思わなかったようで、蹴りは見事に師の側頭部をとらえた。

バルコニーから叩き出され、四階下へと落ちて行く。

仕留めたのではない。淡い期待を胸に、下をのぞき込む。雲雀は下の通りで足を折って——いるはずもなく、刀を下段に構え、こちらを見上げていた。

ぞっとして飛び退く雷真の鼻先を、青白い烈風が吹き抜ける。

まさに天を衝く斬撃。太刀筋は『ひさいだ』ように建材を圧潰し、幅一メートルほどの亀裂を生んだ。これぞ本家、ひさぎ太刀影。はた迷惑極まりない威力だ。

崩れた壁をひよいひよい蹴って、雲雀が駆け上がってくる。

「……さっきの蹴り、効いてねえのか？」

「効きましたよ。ちよいと力みすぎまして。生きていれば、明日は筋肉痛です」

コキコキと首を鳴らす。ほかにどうしようもなく、雷真は笑った。

（どんな怪物だよ……この人といい、お師匠さまといい……）

雲雀の強さは超一流の魔術師たちの強さと似ている。グリゼルダやラザフォード、魔女

やマゲナス——彼らと同種の理不尽な強さだ。雲雀は魔術に頼らないがゆえに、かえって穴らしい穴が見つからず、勝手手立てがわからない。

思っても詮ないかわかっていながら、思わずにはいられない。

（ここに夜々がいてくれたら……！）

金剛力がここにあれば、先ほどの蹴りで決まっていたのではないか。まして、夜々とはこの三年、ずっと一緒に戦ってきた。互いの呼吸は夫婦のように把握している。

今になってわかる。雷真がこれまで、無茶を続けてこられたのは。

（おまえが、となりに、いてくれたからだ……！）

「どうしました、雷真。長考ですね？」

雲雀が刀を握り直し、鐔を鳴らす。それだけで、いろりと小紫が気圧された。

「機巧都市で言ったはずですよ。私に勝てぬようなら、誰も護れはしません。魔女も、魔王も、そして君の仇敵も、私の上を歩きますよ」

「……そりゃ、何とも憂鬱だな」

「雷真殿……どうでしょう……？」

殺した声でいろりがたずねる。少し、弱気になっているようだ。

水面鏡の威力は驚異的だが、どういうわけか防がれる。八重霞もまた、この敵相手では頼りにならない。攻撃の瞬間に察知され、反撃を受けてしまう。

雲雀はただ己の身体——攻撃と防御にのみ魔力を注いでいる。そのシンプルさが超人的

な強さの秘密だ。そこにつけ入る隙がある——

ある！ 見つけた、師の弱点！

だが、確実に諸刃の剣だ。下手をすると、雷真が先に死ぬ……。

——それでも。

「いろり、街を氷漬けにしろ」

「えっ!? ほ……本当に、やるのですか?」

「何ビビってんだ。普段、おまえが考えなしに言ってるだろ」

「で、ですが、市民に甚大な被害が……協会の方や、硝子にもっ!」

「いいから。頼んだぞ!」

「——どうなっても、知りません!」

いろりが冷気を解き放ち、地表から熱を奪い取った。

生きとし生ける者すべてが、一瞬、活動を止める。

視界すべてに霜が降りる。これは想像以上に寒い……動けない!

体力を奪われ、五感を奪われ、体の自由を奪われる。かじかむ手足を無理やり動かし、

雷真は魔力を小紫に放った。小紫は八重霞に身を潜め、不可視の状態から銀剣をふるう。

疾風のごとく吹き抜けた刃を——師はかわした。

まだ動けるのか! かわしざま手首を返し、小紫の胴体を切り上げようとする。雷真はとつさに紅翼陣の糸をつむぎ、師に向かって放った。

刹那、しんと凍った静謐な風景の向こうに、信じられないものを見る。
(あいつは——!)

撃ち出された魔力の糸はたやすくかわされ、師をとらえることはできなかった。

だが、それでいいのだ。糸は師の向こう、黒髪の乙女へと伸びていくから。

相棒は屋根を蹴り、稲妻のような速さで跳んでくる。魔力の糸が互いを結びつけ、彼女の魔術回路に火を入れた。

猛烈な冷気の影響で、雲雀の動きと感覚は鈍い。彼が対応できない鋭さで——
夜々の蹴りが、雲雀の首筋に突き刺さった。

3

シグムントが吐き出した光茫は、見事グローリアを包み込んだ。

だが、グローリアは傷も負われない。黒い扉——のようなものが生じ、ラスターカノンをささぎってしまう。高い精霊力を感じて、シャルは目を見張った。

(これは、物理現象を司る上位精霊……? それとも、誰かの……守護精霊?)

いずれにしても、驚くべき存在だ。万物を消滅させる滅元素を、たやすく防ぐ。

吹き返ししの爆風にあおられながら、シャルは目をこらし、そして仰天した。
目の前に、アンリが浮いている!

巧みに風を操り、空中に静止している。いつの間に化粧を覚えたのか、貴婦人然とした面差しは見違えたように美しい。足はもう治ったらしく、ギプスも外れていた。

——雰囲気が違う。シャルを見る眼に、まったく親しみがこもっていない。

「どうやら、君がわからないようだな」

普段以上に抑制の効いた声で、シグムントがつぶやく。

「精神に人為的な変更を加えられた……かも知れん」

グロリーアはアンリの肩を抱き、愛おしげに頬を撫でた。

「この通り、アンリエットはわたくしの保護下にあります。貴女もですよ、シャルロット。今からでも魔剣を返しなさい。プリュー家を再興したいのなら」

「——！」

「わたくしは明日、女王となります。爵位の授与も、領地の返還も、わけはない」

シャルは絶句した。プリュー伯爵家が……再興できる？

「さあ、シャルロット。英国人なら、忠誠を尽くす相手を間違えてはなりません」

シャルは静かに息を吸い、吐き、そして怒鳴った。

「ラスターカノン！」

シグムントがあざとを開き、特大の一発を至近距離からぶつ放す。

無論、ダメージは与えない。またしても闇色の扉が生まれ、王妃を護る。

だが、大量の魔力を使わせた。アンリがふらつき、グロリーアの胸にもたれかかる。

シャルの思い切った行動に、グロリーアはばかりと口を開けた。

「そなた……実の妹を、消すつもりですか？」

「畏れながら申し上げます——プリューの誇りを舐めないで！」

シャルは金髪を肩で払い、射貫くように女王をにらんだ。

「私たちはエレインさまの魂を今に受け継ぐ者——そうよね、アンリ！」

アンリは答えない。ただ機械のように、感情の消えた眼でシャルを見ている。

「この戦いはもう、私たちだけのものじゃない。大勢の仲間が身命を賭して戦っているのよ。身内可愛さに脅迫に屈するなんて、騎士道にもとるわ！」

「……そなたの気性は、イライザに似ている。とても愛せそうにありません」

「光栄です。祖母は私の誇りですから」

「気概は認めましょう。ですが——叛逆者にすぎぬ」

左手でアンリを抱え、右手で剣を振り下ろす。

ストラトキヤスターから衝撃波が飛び、シグムントに殺到した。巨竜のうろこが割れ、翼膜が裂ける。飛行機能に障害が出て、シグムントは浮力を失った。

「ロッテ——風を——」

「無理——」

情けない悲鳴が頭に響く。それでもロッテは力をしほり、軟着陸させてくれた。ただし、そこは機巧師団のど真ん中。

スモークをかきわけ、巨人が突っ込んでくる。シグムントの巨体が軽くはね飛ばされ、殴られた部分は崩壊し、輝きながら消滅した。

「ぐっ——フォームチェンジよ！ かわすわー！」

シグムントは自らボディの大半を捨て、馬ほどのサイズに体を縮めた。強烈な発光現象が起き、周囲の目をくらませる。その光に身を隠し、機動力で巨人を振り切る考えたったが、形態変化が完了する前に、グロリアアが間に合う。

あたかも猛禽の急降下。衝撃波が降りそそぎ、シャルとシグムントを叩き伏せる。

二人は血まみれになり、もつれるように大地を転がった。

もはや魔力は尽き、肉体はボロボロ。王妃と巨人の相手など、務まるはずもない。

「ごめんね、アンリ……シグムント……！」

巨人がシャルをわしづかみにしようとする。その腕が、不意に断ち切られた。

鉄壁の《魔防》を持つ巨人を、不可視の斬撃は容易に斬り裂く。

腕を落とされてバランスを崩し、巨人が倒れる。襲撃を仕掛けた者は、さらに二撃目の刃を別の一体に浴びせた。今度はあちらも無警戒ではなく、魔防がきちんと受け止める。防衛に成功し、心なしか得意げな巨人のあごを、下から誰かが蹴り上げた。

女性だ。犬の尾のようなポニーテール。男装の麗人と言うにはあまりに攻撃的な凄みをまとう女。それは、シャルにとっても精霊術の師——

「ウェストン先生！」

信じられない。グリゼルダは生身で巨人のあごを蹴り上げ、傾かせた。弾かれて尻餅をつく巨人に、グリゼルダが死神のような眼を向ける。

「……使い手が三流だな。眠っている、木偶！」

指先を突きつける。魔力の糸が飛び、装甲の隙間を縫うようにして、巨人の内部に潜り込んだ。部品がギイギイと異音を響かせ、巨人が苦しげにもがき始める。

そうして動きを封じながら、既に魔力を頭上の機体——白い剣に注いでいる。剣が空に美しい弧を描く。爆風とともに巨人の脳天が割れ、沈黙させた。

最初の一体が立ち上がろうとする。こちらも破壊しようと、魔王が敵意を向けたとき、グロリアアがあいだに割り込み、グリゼルダの視線をさえぎった。

「……わたくしは悪い夢でも見ているようです。可愛いジャガーノートが、よもや学院の教授に傷つけられようとはね。なにゆえ、機巧師団に弓を引く？」

グリゼルダは倒した巨人の胸に降り立ち、形式的にひざまずいた。

「お目通りかない恐悦至極です、王妃殿下。覚えていらっしゃいますでしょうか。その剣——ストラトキヤスターを貴女に献上した、ウェストン男爵家の者です」

「もちろん覚えていますよ、迷宮の魔王。これはよい剣です」

「あの戦争は終わっておりません。少なくとも、あの土地に住まう者にとっては」「わたくしを恨むのは筋違いです。あれらはすべて、陛下の決定でした」

「……ああ、恨みはしない。今は感謝の言葉も述べよう」

理解できなかったのか、王妃は眉をひそめ、侮蔑的にも見える微笑を浮かべた。

「あの頃、父や、叔父や、市民の話に耳を傾けてくれる者は、この国には誰もいなかった。だが今、貴女のおかげで——栄えある王立機巧学院が私の味方だ」

グロリーアの背後で、一条の光が巨人を貫いた。

竜巻を横に倒したような、凄まじい空気の渦が生じる。石畳を巻き上げ、付近の兵たちをなぎ倒して、それは進路上のすべてを粉砕した。

あれでは死人が出たのでは？ 戦慄するシャルの上に、巨人のボディが倒れ込んでくる。

これは三階建ての建物に匹敵する大きさ——べしゃんにされる！

しかし、地面がぐねぐねと波打って、シャルを影の下から運び出してくれた。轟然たる地響きを立てて、王妃自慢の超兵器がすべて攔坐する。

巨人を一撃で屠ったのは、きらめく甲冑に身を包む、気だるげな若者だった。

「実に面倒くせえが——放っておいても面倒くせえ」
ヴェイロン！ では、シャルを助けてくれたのは——

「あきらめが早くなつたな、シャルロット。私を倒したときの威勢はどうした？」

「意地悪を言うものではありませんわ。わたくしは高く評価していますわよ。暴電は今やオルガ以上に、わたくしが挑むに相応しい相手です」

やはり、オルガだ。ソーネチカもいる。オルガはヴェイロンのかたわらに立ち、ソーネ

チカは大蛇の頭に横座りしていた。ソーネチカの大蛇の口には、気絶したアンリがぐねえられている。今のヴェイロンの一撃にまぎれ、師団からかすめ取ったに違いない。

ヴェイロンの大技——《覇者の一点》が突風を呼び込み、あたりの霧を晴らしてしまう。そうして視界がきくようになると、周辺はもう完全に包囲されていた。

機巧師団に、ではない。服装はバラバラで、白衣を着ている者もいれば、よれた背広姿の者、油にまみれた作業着の者もいる。

彼らから明らかな敵意を感じ取り、グロリーアが笑い出した。

「誉めるべき、なのでしようね。子どもにこれほどの技能を身につけさせ、師団を手玉に取らせた——学院の優秀な教授たち！」

「もったいなきお言葉。まことに光栄の至りです」

とほけた声音とともに、強烈な魔力が地を震わせた。

兵の動揺を誘いながら、大柄な魔術師が一人、秘書官を連れて歩いてくる。

ラザフォードはうやうやしく腰を折り、慇懃に挨拶した。

「ご機嫌麗しく、我らが栄光グロリーア妃殿下」

「……なぜ、そなたがここに」

「お戯れを。私はこの王立機巧学院を預かる身。学院にいるのが当然です。敢えてほかに理由をつけるなら——陛下にお見舞いを申し上げるため、ですか」

「見舞い……とは？」

「歴史を紐解けば、『三日天下』『一日天下』は数多ありますが——よもや、即位の前日に
ご破談とは、いやはや、心中お察しいたします」

すつと天を示す。タイミングをはかったかのように、敷地内のスピーカー、軍用無線、
市の公共物から、一斉に同じ音声が流れてきた。

「この声が届く全国民に告げる。我は喪服の王エドマンド」

スピーカーがなり立てた単語に、シャルも、シグムントも、ぎよつとなった。

「黒太子？ 今……『王』って言った……の？」

「黙って聞きなよ。大詰めだ」

シャルのすぐ後ろ、樹木だとばかり思っていたものが、ぐにやりと姿を変えた。
してやつたりという顔で、アリスが片目をつむっている。

「アリス……いつから——」

「君が情けなく落っこちてきたあたりからね。いいから、続きを聞いて」

「筆を執る者、またそれを読む者、皆知っているだろう。我は叛逆者とのそしりを受け、
今日まで指弾を浴び、ときには命を狙われた。身に覚えのない機巧都市占拠、父王殺しの
汚名を着せられ、苦渋を舐めてきたのだ。しかし、我はここに断言する」

叛逆者が何を言い出したのか。皆が耳を澄まし、続く言葉待つ。

「すべては我が継母グロリアの陰謀であつた」

師団の兵たちに衝撃が走った。銃声がやみ、戦闘音が都市から消える。

「しばしの時をもらい、今こそ語ろう——先日、魔術師協会に処断された罪人ブロンソン
は、王妃の情夫である」

「……世迷言を。そのような戯れ、誰が信じる」

グロリアは小馬鹿にしたように笑った。だが、語りはとうとうと続く。

「D社躍進の陰には黒い噂が絶えなかった。軍の主力コンベティションに招かれたこと、
出所不明の資金を大量に調達できたこと、機巧都市の数キロ圏で大規模な人体実験を行え
たこと、いずれも王家の関与があれば可能である。事実、〈白き子ども〉量産計画の全貌
はウインザーにて抑えた。信じがたいだろうが——今こそ、思い出して欲しい」

焦らすような間を取って、十分に溜めてから、さらに言う。

「こたびの即位騒動、画策したのは〈白〉の勢力を名乗る者たちである。その実態を皆は
知っているか？ 主導者がウオルター・キングスフォートであることは？ 彼とそのとも
がらが、機巧学院で犯した悪行は？ 皆、忘れてしまったのか？」

古傷に触れられて、シャルの胸に疼痛が走る。

「何よりも、グロリアは自ら玉座にのほろうとした！」
叩きつけるような言葉。兵たちがわずかに畏縮する。

「我がデイルランド朝の血統——従兄弟や叔父たちを差し置いて、王冠を戴こうとしたのだ。
我はこれを野心のあらわれと見る。ゆえに、我は父王に成り代わり、グロリアを叛逆者
と認め、断罪する。復讐の刃を法の裁きに変えて——彼の者をとらえよ！」

堂々たる宣言を受けて、機巧師団にどよめきが広がった。それはもう、目で見てわかるほどの、はっきりとした狼狽が、さざ波のように伝播していく。

この劣勢の戦場で、王妃の權威が揺らいだ。致命的な状況だが、グローリアには余裕があった。こちらこそ正統な王であるとはかり、威厳をたもって高笑いする。

「愚かしさも極まりますね。そのような妄言、誰が信じると——」

「畏れながら、私が証明するつもりです」

人を喰ったような顔で、ラザフォードが口を挟む。

「キングスフォートとグランビルの背後に誰がいたか、学院は証言できますからな」

この発言には、グローリア以上に、シャルが戦慄した。

学院はもう完全に、エドマンドに味方する気か……!?

「こうなると、前ウィルリントン伯ブリューの没落もまた、くさく見てまいりますな。

貴女はかつて、エドガー殿と懇意に……おっと、これは醜聞好きの下品な邪推、どうぞお聞き流してくださいませ——銀薔薇さま」

最後に爆弾を投下する。シャルはもうついて行けず、呆然とした。

銀薔薇？ 一国の王妃が結社の薔薇？ それに今、お父さまの名前を……？

「……事実無根の世迷言、よくもぬけぬけと申したものだ。証拠と申すが、ラザフォード、そなたの悪事の方がよほど証拠がそろって」

言葉の途中ではっきりとなり、ラザフォードの秘書官を見やる。

アヴリルは作法通りに目を伏せ、畏まつている。

「まさか、その者は……最初から……そなたの……」

グローリアの表情に、初めて恐れのようなものがにじんだ。

「……正気ですか、ラザフォード。あのような狂犬に……国を任すと？」

「毒にも薬にもならぬ者より、猛毒の方がよいでしょう」

「挙げ句、このグローリアを愚弄する……!」

「これは失敬。ですが、ひとまず、ヴァルブルギスの学び舎は返していただく」

ラザフォードの背後で、教授たちが魔力を高める。その向こうには、不審な目を向ける機巧師団の姿もあった。グローリアはふっと微笑み、グリゼルダに訊いた。

「迷宮の魔王よ。焼却の魔王もまた、そちらにいたのでしょうかね？」

「はあ……!? あんな男のことなど、私が知るか!」

「左様。ライコネン中將閣下は、帝都にてエドマンド王の身辺をお護りしています。——
師団の方々には朗報でしょうな。焼却の魔王はご存命ですぞ!」

ラザフォードのひと言で、機巧師団の戦意は決定的に殺がれた。

グローリアは天を仰ぎ、目を閉じた。

「……機巧都市での長逗留が裏目に出たと言うわけですね。……いえ、『逆手に取った』
と言うべきでしょうか」

もし先月、王子があのままバッキンガムを手中にしていたら、グローリアは全軍でこれ

を叩いた。だが、王子は途中で方針を変え、身を隠した。結果的に、ロンドンには叛逆者^{はんとぎやうしや}が潜む危険な場所となり――グロリアの帰還を難しくした。

こうなってみれば、何もかもが謀略だったように思える。

グロリアは長い、長いをため息をついた。聖剣を大地に突き立てて、「このグロリア、社交界では四つの形容で知られています。若く、麗しく、情熱的で、何より計算高い、とね。……今は、負けを認めましょう」

剣を手放す。戦いは決着し、ラザフォードが王妃を引き立てて行った。

遠ざかる父を、アリスが呼び止めようとする。だが、問うまでもなく、おそらくは誤^{あやま}り

たかつただろう（答え）が、目の前に立ちふさがった。

黒眼鏡をかけた男が、やつれた顔を伏せ、申し訳なさそうに一礼する。

「申し訳ありません。お嬢さま。ラザフォードの執事は優秀ですが、完全無欠というわけにはまいりません。ときには――遅刻することもあるのです」

冗談なのか、本気なのか、真顔でそんなことを言う。

アリスは何て言っているかわからない様子で、ばくばくと唇を開け閉めした。

見かねたように、遠くでラザフォードが振り返る。

「駄目な父親の手土産にしては、なかなか気が利いているだろう？」

「そうやって……自分で言っちゃうところが、駄目なんだよ……」

アリスの声が湿つたのに気付き、シャルとオルガは互いに笑みを交わした。

ソーネチカが渡してくれるアンリを、シグムントと二人で抱きしめる。

アンリは眠っている。王妃に何をされたのか、それはまだわからないが……とにかく、無事に取り戻すことができた。

気がゆるんだせいか、心地よい眠気^{ねが}が襲^{かか}ってくる。オルガやソーネチカ、アリスに支えられながら、シャルは目を閉じた。

シャル、シャルロットさまつ、と、そんなふうと呼ぶ声が、遠くに聞こえる。母がくれた名前を誇らしく思いながら、シャルは安心して気を失った。

4

アスラとロキの攻防は、腕を上げたフレイから見ても、別次元だった。

雷撃がスタンドを直撃し、フィンブレードが残像の尾を曳く。無数の稲妻と剣の軌跡が走る戦場は、目まぐるしいことこの上ない。

天使と甲冑^{かぶと}が斬り結ぶたび、舞台のあちこちが碎け、学生たちの悲鳴が飛んだ。ガルドたちも怖^{おそ}じ気づき、うろろとフレイの周りを歩き回る。

「縫いつけろ、ジブリール」

ロキが命じた途端、羽が消えた。フィンブレードが透明に――いや、消えたのではなく、転移したのだ。アスラを開くように実体化し、全方位から降りそそぐ。

アスラも虚を突かれたようだが、射線を読み切り、インドラに薙ぎ払わせた。ロキはあきれ顔でアスラをにらんだ。

「……あんたのその知覚と認識、普通じゃないな。(心眼) というものか?」

だが、驚いていたのはむしろ、アスラの方だった。

「今のは(風の剣舞)——その自動人形……なぜ……!?」

座席に隠れて観戦中の学生も、にわかに騒がしくなる。

「おい、今……!」「どうして……?」「魔活性不協和の原理はどうした!?」

誰かが発した問いこそ、皆に共通する思い。

絶縁が確実ならば、複数の魔術回路を格納できる。魔術喰いがそうしていたように。

しかし、絶縁が厳重であればあるほど、実戦中の再接続が難しくなる。魔力が漏れれば即座に打ち消し合ってしまうため、信頼性の低いシステムになる。

そんなものを使うくらいなら、人形を二体用意した方が早いし、運用の幅も出る。それが合理的な結論であり、魔術の常識だ。そのはずなのに……。

脅威を察したのだらう。アスラは覚悟を決めた様子で、目を閉じ——見開いた。

瞳が黄金の輝きを放ち、ガラムが一齐に腰を退くほどの、凄まじい魔力が生じた。呼吸が詰まる。(約束された子ども)の姉妹ですら、総量と出力で負けている!

雷真の紅翼陣に迫るような出力が、素で生み出されている。付近の石ころが勝手に浮き上がり、逆にアスラが一步踏み出すたび、石畳が沈み、ひび割れた。

重力異常——強大な魔力の証明だ。存在そのものが、周辺の空間を乱している。

その潤沢すぎる魔力を使い、アスラはインドラの魔術回路をフル回転させた。ボディが蒼い稲妻と化し、アスラと融合——アスラ自身を雷の怪物に変える。

次の瞬間、耳をつんざくような雷鳴が轟いた。まさに神話の武器、神の雷霆だ。

もし軍の部隊が射線上にいたならば、数百人が死んだだらう。見てからでは魔防も間に合わない。人体の反射が間に合う速さではないからだ。

だから、ロキは先んじて準備していた。機械天使が大剣となり、炎を噴き上げて稲妻の体当たりをそらす。

はるか遠方でも、アスラが愕然とする。ジブリールはまた別の魔術を使った!

アスラはなおもロキを狙った。雷神と化したアスラの威力は圧倒的だった。こぶしの一振りで雷撃が落ち、駆け抜けるたびに周辺が焦げる。怯えるガラムを抱えながら、フレイは思う。アスラの力量は、既に歴代の魔王に迫っているのではないか?

その雷神の暴威の前に、ロキはまだ生き残っていた。

薄氷を踏むような戦いだ。雷撃が走るたび、ロキは炎でそれをさばく。マタドールの技を彷彿とさせる争い。当然、常に即死の危険が付きまとう。フェイント一回、一度の読み違いで串刺しにされるだらう。だが、ロキはあくまで冷静に、確実に雷をいなししていく。誰も介入できず、学生数百人が、阿呆面^{アヘマタ}で成り行きを見守るしかない。

火炎と稲妻のダンスを眺めるうち、フレイは決定的な違和感に気付いた。
無尽蔵に思えたアスラの魔力が、少しずつ減退していく。

——そうか。インドラのあの魔術は、並みの人間に扱えるものではないのだ。

アスラのあの圧倒的な魔力を持っても、長時間の運用には耐えられない。威力相応と言えはその通り、軍の量産回路の数百倍の消耗を強いる……様子だ。

稲妻が生じるまでの感覚が、しだいに長くなる。一方、大剣ジブリールはますます炎を噴き上げ、ロキの意のままに宙を舞い続ける。

なぜ、ロキの魔力が尽きないか。その答えに、アスラが気付いた。

『その剣の魔術……（熱風操作）じゃない……！』

『ご名答。（永劫の火）だ』

ロキは魔具のブレードをふるい、大剣に大量の火炎を送り込んで見せた。ケルビムの炎を浴びて、ジブリールは爆炎をまとい、天を焦がす。

アスラの動きが止まる。さすがに気力が萎えたようだ。フェニックスが伝説通りのものなら、雷が持つ桁外れのエネルギーを、交叉のたびに奪い取っていたはず……。

『（心眼）に届いた者を、あなたの国では（悟り）と言うそうだな？』

ふと、ロキがそんなことを言った。

アスラは怪訝そうにしたが、呼吸を整えるのに好都合と判断したか、会話に乗った。

『……順番が逆だ。でも、悟りを開いた高僧が（心眼）を得るのは間違いない』

フレイは記憶をまさぐり、東洋思想史の講義を思い出した。悟りは仏教用語だ。宇宙の真理を直観的に掌握することで、その領域に達する魔術師は極めて稀とされる。

「オレが受けた講義では、悟った者は俗世の煩惱から解放されるという話だった。だが、今のあなたはむしろ、迷っているように見える」

おぼろげに、フレイはロキの意図を察した。——アスラを説得するつもりなのだ。

ロキはこれまで、躊躇なく敵を斬り捨ててきた。ジブリールが搭載しているのも、そうした敵の魔術回路だ。だから、フレイはロキを「強い子」なのだと思っていた。フレイとは違い、目的のためには非情になれるのだと。

だが、ひょっとしたら——後悔したことも、あったのだろうか？

「あなたのその（金の瞳）、シメル人の特徴だろうか？」

学生たちにざわめきが広がる。シメルと言えは、一説に魔術師の起源とも言われる、真に力ある血統だ。もしそれが真実なら、アスラの膨大な魔力総量と出力にも得心がいく。そして、アスラがその力を夜会で使わなかった本当の理由も。

この英国では、シメルは存在そのものが禁忌——

「なぜ、シメルが英国に味方する」

「……なぜ？ おかしなことを言うな。僕はイギリス人だ！」

アスラが激昂する。高電圧の肉体系から、激しいスパークが飛び散った。

『シメルなど、二千年も昔に途絶えた名だろう——』

「違う。ほんの半世紀前、英国に滅ばされたんだ。インド統治のために——」

「言うな！」

「あんたと同じ目に遭った奴を、俺は知っている」

アスラの怒気がわずかにゆるむ。彼の頭にも、その姿がよぎったに違いない。

「そいつは傲慢で、利己的で、短絡的で、調子に乗っていて、自意識過剰で、おまけに頭が悪く、考えが浅く、無遠慮で、不愉快極まりないクソ野郎だ」

悪口を並べるロキの眼には、不思議と、あたかな光があった。

「あんたとはまるで逆だな。あんたは復讐に走るところか、世界平和を望み、英国に尽くしてきた。だが、あんたが今日までやってきたことは、王妃の利益にしかなくていい。」

一方あの大馬鹿は、周りの奴を護り、立ち上げらせ、幸福にしていくな」

ロキはアスラを見上げ、鋭く言った。

「あんたの逆だ」

アスラの金の瞳に、雷電が弾けた。ひよつとしたら、それは痛みの発露だったのか。

「……僕は、この世界を救うつもりだ」

「救うがいいさ。だが、やり方が間違っている」

「間違ってるなどいいない。……僕はイギリス人として、人として、正しい選択をする」

「あんたは演じているだけだ。女王の操り人形を」

「言うなと言った！」

数億ボルトに達する雷撃の矢がロキを貫く。

否、やはり火炎に誘導されて、はるか彼方へ受け流される。

遠くの空で稲妻が止まる。そのときにはもう、ジブリールが姿を変えていた。剣でも、

盾でもなく、長い筒状の——「砲」のようなものへと。

莫大な魔力が、砲の内側で圧縮される。白い装甲が銀に変色し、次いで蒼く、半透明になった。危険な予感が空間を支配し、学生たちが一斉にのけぞる。

ロキ自身の魔力総量をはるかに超える力が蓄えられている。ロキはその魔力を——

「穿て、相棒。《雷霆神器》だ」

アスラに返す。アスラは稲妻の速度で逃げた——が、砲から飛び出した稲妻は、アスラの軌跡をそのままなぞり、のみ込んでしまった。

雷に雷をぶつけると、どうなるのか。気をもみながら待つこと数秒、血だらけのアスラが落ちてきた。それを念動で減速させて、ロキが舞台に寝かせてやる。

ひどい火傷を負っている。スタンしたのか、アスラはまともに動けない様子だ。

「……肉体が雷化している……粒子間のつながりは断たれていない」

自身に失望したような、乾燥した笑みを浮かべる。

「外から力を加えて……つながりを切つてやれば……肉体の結合も解かれる……」

「ああ。《疎と密》の致命的な弱点だ」

フレイはびくっとした。その弱点を突きながら——殺さない程度に手加減した？

どれだけ精密な魔術制御があれば、そんな芸当が可能なのか。総量では圧倒していても、魔力制御ではロキが勝っていたようだ。優秀を悟り、アスラは自虐的に微笑んだ。

「世界は……不条理だな。高潔であらねばならないと……私心を捨てた僕が……苦しみにまみれ……みじめに……地べたを這いずっているのに……！」

愚痴めいた言葉を、ロキは黙って聞いている。客席も水を打ったように静まり返り、今や八百人を超える学生たちが、アスラの述懐に耳を澄ましていた。

「我欲にまみれた彼は……ますます光り輝き、人々を惹きつける……。これほどの強者が……それもそりもそって、彼に味方する！」

「……あんたは勘違いをしている。とんでもなく恥ずかしい思い違いを。あのバカが光り輝いている？ 冗談じゃない。あんな奴は、輝くバカで十分だ！」

ロキは急に不機嫌になり、フンとそっぽを向いた。

「這いずっているのはあいつの方だ。苦しみにまみれて、みじめにな。だからこそ、オレたちも——少しは手を貸してやりたくなる」

あごをしゃくって、舞台の端を示す。

「そういう意味では、あんたもい線いっている」

学生たちが舞台上がってくる。どの顔も警戒心むき出しで、ロキをにらんでいた。

——禁忌の血統たるアスラを、助けようと言うのだ。

いくら魔術師が実力主義と言っても、若い世代には偏見がないとしても、それだけでは

到底、彼らの行動は説明できない。

「希望を語った者には、相応の責任が生じる。オレは謙虚で寛大だが、口だけの男を認めてやるほど、謙虚でも寛大でもない」

そつと右手を差し伸べて、ロキは言った。

「いつか世界を救え、アスラ」

アスラはロキの手を見つめ、そして——

光る目を左手で隠し、右手でロキの手をつかんだ。

学生たちにとよめき起き、しだいにそれは歓声に変わる。敵意の視線から一転、喝采を浴びる弟を、フレイは心から誇りに思い——

その背中に飛びつくために、ガラムと一緒に駆け出したのだ。

5

あまりに現実感のない光景に、硝子は我が目を疑った。

ビリヤードの球みたいに、雲雀が対面の建物へ弾かれる。運動エネルギーを渡しきったのか、蹴った本人は軽やかに宙返りをして、雪のバルコニーに着地した。

小紫が銀剣を取り落とす。いろりは「あう……」と言ったきり、二の句が継げない。

鈍い日差しを浴び、黒髪がきらめく。着物は先の戦いで傷み、血で汚れている。だが、

本人の傷はふさがっていて、健康そうに見えた。
ちらちらと雪華が舞い散る中、ゆつくりと、雷真が乙女の背中に近付いていく。

「おまえ……よく……。夢じゃ……ねえよな？　これ……」

触れたら、壊れてしまうのではないか。そのためらいを感じさせる手つきで、そっと肩に触れる。乙女はされるがまま、肩を震わせ――

やがて我慢しきれなくなつたように、振り向いて訴えた。

「パンツを脱いでください！　すべてはそれからです！」

氷結した地面で足をすべらせ、雷真がバランスを崩した。

「おい空気読め！　そういう状況か今!?」

「今がそのときです！　夜々が眠ってるあいだ、女狐をとつかえひつかえ……っ！」

瞳から輝きが消え、真つ暗になる。夜々はうつすら微笑んで、

「一か月もあれば……平均一度ずつ排卵されるんですよ……?」

「されたから何だ！　生々しい言い方すんな！」

「いーから脱いでください！　潔白を確信せずに、夫婦の共同作業はできませんっ」

「言ってることはわからなくもないが、とりあえず結婚した覚えはねえ！　つか、こんなところで脱いだら凍傷になるだろうが！」

「大丈夫です。凍傷にならないよう、夜々が口に含みます」

「何をっ？　どこを!？」



二人は激しく言い合っていたが、やがて言葉がやわらぎ、同時に笑い出した。自然と視線が合う。雷真は夜々の頭を引き寄せ、胸に抱いた。

強く、強く。冷え切った互いの体を、あたため合うように。

「ありがとよ、相棒。よくきてくれたな」

夜々の目が潤む。夜々は雷真の肩にひたいを当て、幸せそうに目を閉じた。

「そこが地獄の果てだって、夜々はきます。雷真がいるところなら、どこでも」

「ああ。そんな気がしてた」

「女狐とイチャコラしてるベッドにも」

「そんな過去も予定もない！」

「つも~~~~~とにかくパンツを脱いでください！」

「こつ、こら夜々！ この……うつけ者！ と、時と場合をわきまえぬ……つ」

いろりが割って入ろうとしたが、涙で詰まって声にならない。素直になれない姉の背中に、小紫が体当たりして、夜々の方へと押しやった。

もつれるように団子になり、三姉妹が抱き合って——泣き笑いになる。

互いに身を寄せ合う。彼女たちが誕生する前、硝子が思い描いた通りの光景だ。

硝子の視界が不意にはやけ、過去の記憶が二重写しになった。

あるいは、春の陽だまりの中——

硝子が縁側で庭を眺めていると、小紫が仰向けに寝転がってきた。猫のように甘えながら、無邪気に訊く。

「ねー、お母さんってどんな感じ？ 硝子みたいな感じ？」

「……さあ、わからないわ。私も母を知らないから」

「そーなの？ そうなんだ……」

表情が曇る。訊いちゃいけないことを訊いたのかな、と後悔している顔だ。

硝子はそっと小紫の頬を撫で、安心させるように言った。

「でも、子どもがどんな感じかは、わかる気がするわね」

「え？ 何で？」

「手のかかる子はばかり、抱えているからよ」

ふざけてわき腹をくすぐる。小紫はきやあきやあと喜び、硝子の膝で笑っていた。

あるいは、秋の書斎で——

「主。森羅殿のお屋敷で、私は気付きました」

お遣いから戻った途端、いろりはしかつめらしい顔で切り出した。

「……いきなりご挨拶ね。どこが？」

「この墮落しきった部屋です！」

びし、びし、と室内を示す。書籍や工具が雑多に散らかり、ほこりまみれ。何年も締め切ったままの押入れは、中で菌類が繁殖しているかもしれない。

いろりは目を三角にして、厳しく続けた。

「掃除はごくまれ、食事は仕出し、洗濯物は干しっぱなし——恥ずかしながらこのいろり、人形師はそれが当然なのだと思っておりました。ですが、森羅殿のお屋敷は——」

「……よそはよそ、うちほうち」

いろりはこの世の終わりを見たような顔で、大げさに天を仰いだ。

「何と嘆かわしい……もう結構です。以後、家事はすべて私がやります！」

「気になるなら、女中を雇うわよ。おまえだって、できないでしよう？」

「学びます。私には、主がくださった知恵がありますれば」

いろりは綺麗な笑顔で言った……のだが、炭やら網やら七輪やらを大騒ぎで買い込み、悪戦苦闘の末に焼いた最初の秋刀魚は、見事に黒コゲとなった。

しよげ返るいろりと、焦げた秋刀魚を肴に飲む酒は、格別に美味だった。

あるいは、冬の終わり——

「硝子！ かくまってください！」

断りもなく障子を明け放ち、夜々が逃げ込んできた。

そのまま納戸に逃げ込み、髪をしまい終わらないうちに、いろりが追いついてくる。

「主！ 今ここに、夜々が参りませんでしたか？」

「門から飛び出して行っちゃったわよ。夜遊びでもしてるんじゃない？」

「夜遊び……っ!? どどうしましようっ、この時分、脳が春めいた男がわんさといまいます。自暴自棄になった夜々が花街などをうろつき、ごろつきどもに己を安売りしてしまつたら……私はこいら一体を真冬にしてしまいます……!」

「やめて頂戴。せつかくあたたかくなつたのに」

「あのたわけ娘……！ まったく！ 夜々は——まったく！」

普段の落ち着いた着きをつっかり失くし、気ぜわしく書斎を出て行く。いろりの足音が遠のくと、重石が取れたように、夜々が納戸から這い出してきた。

「ありがとう、ごいいます硝子。助かりました」

「叱られるようなこと、しなければいいのに」

「だって！ 夜々はそんなに悪くないのに……姉さまがやかましすぎるんですっ」

「あんなお姉ちゃん、いない方がよかった？」

意地悪をしてそう訊くと、夜々は口をつぐみ、うつむいてしまった。

わかっている。夜々がいろりに反発するのは、ちっとも認めてくれないからだ。

それは、別の気持ちの、裏返し。

「……姉さまより先に、夜々を造つてくれればよかったのに」

硝子は噴き出した。笑われて、夜々は赤くなる。

「美しく、そして強い。あれが一ダースずつあれば、わしを圧倒できたかも知れぬ」
 「そりや大層な誤解だな、ばーさんよ」
 金薔薇の言葉をささぎったのは、雷真だった。
 「こいつらは世界にたった一人——だからこんなに強えんだ」
 その言葉は、三姉妹の心にどう響いたのだろう。
 姉妹はそれぞれに目元を引き締め、彼を護るように身構えた。その瞬間、硝子が肌で感じた痛みは、臙脂七体を並べたとき以上に激しく、そして優しいものだった。
 「わかったら、とっとと帰れ。俺たちの勝ちだ」
 閔兵式の会場を示す。あちらでは、明らかに協会側が盛り返していた。
 結社の黒マントたちが押し戻され、自動人形を捨てて後退している。なぜ人形を捨てて行くかと言えば、動かないからだ。
 自動人形がギチギチと奇怪な音を立て、動作不良を訴えていた。
 「オイルが凍結している。歯車は氷結し、ともに稼働できない。
 無理もない。いろいろの仕業で、あたりは酷寒地獄だ。」
 「さむーい！」
 小紫がはしゃいで飛び跳ねる。仔犬のような仕草が、硝子の胸をあたためた。
 「なるほどの……。じゃが、勝った気になるのはまだ早い。わしの《完全なる獣》は動くようにやし——ほれ、ぬしの先達とやらも残っておる」

「お姉ちゃんだから偉いってわけじゃないでしょう。毎日お料理をしてくれるのもいろいろ、お掃除をしてくれるのもいろいろ、お洗濯をしてくれるのもいろいろよ」
 「それは、そう……ですけどっ」
 「夜々！ やっぱりここにいたのか！」
 いろいろが戻ってくる。夜々は見える見る青ざめた。
 「逃げて何も解決せぬぞ！ 今日という今日は、もう勘弁せぬ——」
 「ね、姉さまなんて嫌いですー！」
 窮鼠、猫を噛む。破れかぶれに言った言葉は、いろいろの胸を深くえぐった。
 石化したいいろいろの横を抜け、夜々はびゅうと逃げて行く。
 二人のやり取りが微笑ましく、硝子はまた、噴き出したのだった——

ゆつたりと時間が流れていた、あの日々を。

かけがえのないものだったのだと、今、痛いほどに感じている。

あんな日々は二度と訪れないだろうと覚悟していた。だが今——あの屋敷から遠く離れた、この東欧の田舎町に、この子たちはきてくれた。

硝子を取り戻そうと、硝子の代わりに戦っている。

「ふふ……何とも壮観な眺めよの」

三姉妹を見下ろして、金薔薇が機嫌よく笑った。

がこんつ、と瓦礫をはね飛ばし、向かいの建物で雲雀が立ち上がった。後頭部が血まみれだ。ただし、表面を少し切った……くらいに見える。

硝子はあきれ果てた。本当に、解剖して研究したくなるくらいの化け物だ。だが、雷真に動揺はない。むしろ余裕を得た様子で、すまなそうに言った。

「悪いな師範、そろっちまった。こっからは——十倍強えぜ？」

「それはまずまず——面白い」

雲雀が跳び、空中で刀を振る。金薔薇を巻き添えにしかねない真空の太刀風が飛び、石の手すりや砕け、水しぶきのように破片が舞った。

金薔薇が痛快そうに手を叩く。彼女の戦争好きも、雲雀の剣術馬鹿も、硝子には到底、理解できない。だが、雲雀と三姉妹の激突は、確かに見物だった。

夜々が斬撃を弾き、あるいはいなし、逆に蹴りを叩き込もうとする。その威力は雲雀も察しているし、隙あらば手足を落とそうとするのだが、紅翼陣が金剛力を格段に強化して、魔剣の刃でも切断には至らない。

のみならず、夜々は頻繁に姿を消す。襲ってきたかと思えば、それは幻。先ほどまでは軽くあしらえた八重霞も、夜々の参加で危険度が増している。畢竟、雲雀も渾身の踏み込みができず、後手に回ることになる。何せ、体勢を崩したが最後——

巨大な氷刃が生まれ、雲雀の頭上から振り下ろされた。

——このように、いろいろの特技が襲ってくるのだ。

きわどくかわす雲雀の顔は、笑ってはいたが、引きつっていた。

いつしか、姉妹と雷真の呼吸が合っている。夜々が雷真に合わせ、いろいろと小紫は夜々に合わせる。夜々が司令塔となることで、三姉妹と雷真が同調しているのだ。

十倍強い、はハツタリではなかった。周囲の冷気に体力を奪われ、雲雀の動きが鈍っていく。ついに水の刃がかすり、雪の上に鮮血が散った。

——決着のときだ。雷真の両手から傀儡糸が伸び、姉妹に莫大な魔力を供給した。

夜々の猛烈な蹴りが雲雀を襲う。飛び退く雲雀の足もとから、無数の氷筍が突き出した。雲雀は一瞥もせず見切り、小紫に備えた——が、予期した追撃はこない。

その代わり、別の者が雲雀に密着している。

「やっぱ、そうか」

雷真が雲雀に肩を寄せ、師の拳と拳のあいだ、刀の柄をつかんでいた。

「師範の（心眼）——相手に殺気がないと、反応できねーのな？」

ここまでの戦いで、それを見抜いた！

その一瞬に、師弟のあいだに流れた感情は、どのようなものだったのか。

それはたぶん——硝子と師のあいだに流れたものと、同じはず。

雷真は金剛力を用い、軽々と手首を返して、雲雀を投げ飛ばした。

雲雀を石畳に叩きつけ、同時にもぎ取った刀を、その眉間に突きつける。

「これで一本、だろ？」

破顔一笑、雲雀は両手をあげて、皓歯を見せた。

「お見事。人生初！ 苦節八年！ 十万回くらいやって！ 初めての一本勝ちですね」

「強調すんなー！ そうだけどー」

「傀儡師、侮りがたし。——私の完敗です」

三姉妹の顔に気色が浮かぶ。小紫が雷真の首に飛びつき、夜々のひたいに青筋が立ち、いろりが二人をたしなめようとしたとき、金薔薇の笑い声が響き渡った。

「いやはや、見事！ 実に見事よ！ 愉しませてくれたのう、小僧ども！」

……そう、まだ何も終わっていない。真の敵はこの魔女と、薔薇の師団だ。

金薔薇は獅子のたてがみを撫でながら、意地悪な口調で硝子に言った。

「さて、紅薔薇。ぬしは暗殺をしくじったわけじゃが。この始末をどうつける？」

「どう——って？」

「ぬしにその気があるならば、罪を問わぬと言うておる。わしはぬしが気に入った。これほどの人形を造る巨匠、ほかに渡すのも、失うのも惜しい」

硝子は三姉妹を見た。信じきった眼で硝子を見つめる彼女たちを。

硝子が金薔薇の申し出を受ければ、魔女は彼女たちを見逃してくれるだろうか。

その逡巡を感じ取ったのか、おずおずと、夜々が前に出た。

「あの、硝子……伝えたいことがあるんです」

「……なに？」

「生きるか、死ぬかるとき……夢うつつに、硝子の昔を見てしまつて——わかったんです。硝子がどんな想いをかけて、雪月花を生み出したのか……」

記憶がある？ 馬鹿な。その頃、この子たちはまだ胎児にもなっていない。

「……それが本当なら、わかったでしょう？ 私がどうやって麗富士を造ったのか」

硝子は凍える両手を冷気にさらし、自嘲した。

「この手は血に染まっている。私は本当に、協会に追われても仕方のない女なの。人形師の禁忌を犯したわ。まだ温かい人間から、部品を取り出して——」

「だけど！ それでも夜々は……姉さまたちだつて……ずっと伝えなかったんです！」

「造ってくれて……ありがとう——って！」

夜々の叫びは、降り積もる雪に吸われ、ふうわりと響いた。

——硝子は親指の腹で目尻をぬぐい、金薔薇に向き直る。

「金薔薇さま。私のお願いをきいてくださる？」

「言うてみよ」

「この紅薔薇にお暇をくださいな。そうね——人類が戦争をやめるまで」

金薔薇の眼が鋭くなる。榴弾砲で狙いをつけられたような迫力だ。

硝子は怯むことなく、薔薇の印章を指から抜き取り、金薔薇に放り投げた。

「ふむ……薔薇の名を返上したいと言ふのじゃな？ よからう、わしは心が広い。生かし

て抜けさせよう。その雪月花を一ダースずつ寄越すなら」

「お断りよ。この子たちはものじやない。そんなふうには扱う方に渡すつもりはないわ」

「……こちらが妥協しておるのに、あれも嫌、これも嫌。わがまま放題じゃの？」

「花柳斎の噂をご存知ないの？ 私って、とても気分屋なの」

「もう、日本軍には戻れぬじやろう。協会はぬしを追うぞ」

「そうね。先が思いやられるわ」

「わしを討たずに、逃げ帰るのか？ 一度は相討ちを望んだのじやろ？」

「今にして思えば、吃驚するほど愚かなことね。それに、追われる暮らしも悪くない——この子たちを悲しませるより、よっぽどましよ」

三姉妹に広がる感情の波が、背中越しにもわかった。気恥ずかしくて、振り向けない。だが、彼女たちがどんな顔をしているか、振り向かずともわかる。

今このとき、私たちの心はつながっている。

「ふふ、そうかえ、ならば、いよいよ——愛想も尽きたわ」

セトの腐毒を腕から放つ。吸えば無事では済むまいが、硝子（しやうし）がのまれることはない。

いろいろの吹雪（ふきゆき）がそれを食い止め、夜々が硝子（しやうし）を救い出す。

逃げる二人を小紫の幻覚が隠し、雷真（らいま）がさらに魔力を注ぎ込む。

相手の方が力が強い。瘴氣（しょうき）が膨れ上がり、いろいろの吹雪（ふきゆき）が押し戻された。

今さら硝子は悟る。魔女の腐毒は街を丸ごと滅ぼせる——魔術回路もなしに！

おののく硝子の眼前で、腐毒の霧が、魔力の糸に切り払われた。

紅翼陣（こうよくじん）の糸が瘴氣（しょうき）をなぎ払い、魔女と獅子（しし）を露出させたのだ。その空隙（くうげき）めがけ、雷真（らいま）はさらに紅翼陣（こうよくじん）の糸を放つ。金薔薇（きんばい）はにやりとして、万物流転（ばんぶつりゅうてん）を起動——

——できなかった。

魔女の表情が凍りつく。その一瞬が、硝子には十数秒に延長して感じられた。

万物流転（ばんぶつりゅうてん）の獅子（しし）が、いつしか宙に浮いている。

何かかが凄まじい速度でめり込み、浮かせたらしい。回転する質量にボディを砕かれ、おびたらしい破片をまき散らしながら、獅子はとりのホテルの外壁に激突した。

ずいぶん遅れて銃声が響く。長距離からの——狙撃（そげき）か？

通常の弾丸ではない。残骸を眼帯で監視してみると、〈砲弾〉と言った方がいいような魔抗銀の弾体が、着弾の衝撃でアメーバ状に広がって、内部を破壊し尽くしていた。

あるいは金薔薇（きんばい）本人が狙われたのなら、事前に脅威を察しただろうか。だが、自動人形（トマート人形）に第六感はない。獅子は鉄くずとなり、沈黙した。

（これは坊やの策……？ どこかに仲間がいたんだわ……！）

狙撃するならここだと聞いてな、と最初に言っていた。雷真にその助言をした狙撃手が、虎視眈眈（こしだんだん）と待っていたのだらう。金薔薇（きんばい）がもつとも無防備になる、その瞬間を。

金薔薇（きんばい）が舌打ちする。その頭上を、もう雷真（らいま）が取っていた。

先ほど奪い取った刀を、右上段に振りかぶっている。ゴルフクラブをぶち当てるような、

全身のひねりを加えた振りで、金薔薇の肩口から刃を叩き込んだ。
さすがの魔女も虚を突かれ、反応が遅れる。とっさに突き出した金薔薇の左手は、瞬時に瘴気に変わり、瘴気は魔力に変換されて、分厚い壁となった。

自らの肉を生贄に、魔防の壁を多重展開。あの防壁の前では、刀なんてつまようじよりも簡単に折れるはずだが、刃が青白く輝き、折れずにもちこたえている。

視界の端に雲雀が映り、会心の笑みが見えた——気がした。

雷真の背中から血の霧が飛ぶ。真紅の双翼は雪の古都に映え、艶やかで、美しい。

「雷真——！」

夜々が吠える。その声に押されるように、雷真は呼吸を溜め——

「これが、（破却水月）……だ！」

二段目の力を解放した。瞬発力のみで、力が釣り合った状態からインパクトする。魔防の盾を貫き、刃は肩口からわき腹へ抜けた。斜めの断面から臓物があふれる。

「な……!？」

既に腹腔がないのに、どうやってしゃべったのか。金薔薇の首がうめきを漏らし、頼りなく宙を飛ぶ。そのまま白目を向き——ばむっと黒い霧となって消滅した。

雷真はしばし残心、ゆっくり刀を降ろすと、刃は文字通り粉々になってしまった。

「雷真殿……？ 敵は逃げた……のでしょうか？」

あたりに目を配りながら、いろりが訊く。三姉妹の誰にも、勝利の余韻などない。

魔女が恐ろしい敵であることは、皆が把握している。誰にも確信が持てない。

「手ごたえはあったぜ。一応な」

「逃げおおせたのだとしても、近くにはいないと思いますよ」

雲雀が飄々とした口ぶりで言う。雷真は申し訳なさそうに、

「悪い、師範。借りた刀、折っちゃった」

「ふんどった刀ですけどね。折ったところか、もう砂鉄ですしね」

「威力だけなら夜々の蹴りの方が上だったな。やっぱ刀は、俺には無用の長物だ」

「それを言うのは、剣を極めてからにしてはどうです？」

雲雀は腰からもう一本の刀を外し、雷真に差し出した。

「師範……これ……?」

「貸してあげます。今度はもつと大事に、本当の正念場で使いなさい」

「……好きだったんだよな、剣術」

雷真は刀を抜き、刃を太陽にかざした。

「枯れたじーさんがとんでもない凄腕だったたり、隙だらけの構えが超強かったりしてさ。

打ち合うのも、地味な鍛錬も……楽しかった」

——好きだったから、捨てたのか。その気持ちは……硝子にも少しわかる。

もう何年が経つのだろうか。まともに三味線を触らなくなってから。

「ありがたく借りとくよ。だが、師範は？ 丸腰になっちゃうだろ」

「しばらくは洋刀でも振り回しますよ。私、素手でもかなり強いですし？」

「……それは身に染みて知ってる。ありがとよ、ずっと硝子さんを護ってくれたな」

雲雀は驚いた顔をした。

「……私に札を言うのですか？ あんな目に遭わされて？」

「あなたが本気だったら、バッキンガムで死んでるさ。——まったく、あんたって人は毎度毎度、口で言ってくれりゃいいことを、全部で教えてくれるよな」

「ありゃ？ 君が言葉で理解できたことなんて、ありましたっけ？」

雷真は口いっぱいに苦虫を押し込まれたような顔をした。

雲雀の指導方針は苛烈で常識外れだが——硝子にも、非難する気は起きなかった。この土壇場の実戦で、雷真は彼の思惑通りに、あれほどの力を発揮したのだから。

「私の話はもう結構。花柳斎先生と、積もる話があるでしょう？」

「……いや、俺にはねえよ」

雷真が三姉妹の背中を押す。姉妹たちはしばらくためらっていたが、互いにうなずき合い、こちらに駆けてきた。

しかし、途中で怖じ気づき、立ち止まってしまふ。

不安げに硝子を見上げる。硝子もまた、何と言っているのか、わからない。

この子たちに、どんな言葉をかけてやればいいのかの、だろうか？

一度は裏切り、捨てようとした私が、今さらどんな顔をすれば……？

ただ——不思議なこともあるものだ。

ひと言の言葉もないままに、硝子の眼にも、三姉妹の眼にも、同じく光るものがあり、まわりの雪と一緒に、日差しをキラキラ弾いているのだ。

「……主」

いろりが半歩、前に出た。何度もまばたきしながら、涙声で言う。

「も……申し訳ありません。いらぬと言われたのに……きてしまいましたっ」

「本当に……おまえたちは……っ」

胸が詰まる。もうこらえきれず、硝子は顔を覆った。

まったくもって、あり得ないことだ。この花柳斎が、こんなふうに——

「言うことをきかない……きかん坊ばかり！」

——ひと目ははばかりず、泣いているなんて。

硝子は声をあげて泣く。三姉妹が我先に、その胸に飛び込んできた。しがみつく娘たちを両手で抱きとめ、胸にかきいだく。

もう二度と、離してしまわないように。



Epilogue

相棒 #1



「葉餓鬼め……尻から手突っ込んで……聖丸を引き出してやる……！」

呪詛の言葉を吐きながら、魔女アストリッドは床に転がっていた。

再生の始まった上半身で這う。ふらつとめまいがして、意識が遠くなった。

「さすがに……命が危ういわ……。しかし……ここは……？」

眼だけで見回す。天井には近代的な鉄骨の梁が走り、壁には鮮やかな色ガラス。聖堂を思わせる空間だが、現代美術の影響が濃い。——無論、知っている場所だ。

「水晶宮か……糞！」

「へえ、大した魔術だな。本当に戻ってきやがった」

不意に声がかかる。背後の椅子に、エドマンドがふんぞり返っていた。

「遅発魔術の転移応用……か。大陸からすつ飛んできるとはたまげたが、行き先の変更ができないらしい。本拠地から遠くなっちゃまって、お気の毒に！」

その通り、あらかじめ儀式で指定した場所にしか飛べない。世界大戦を始めた後、すぐにも戻ってこられるよう、英国に設定したのが裏目に出た。

「ふん……よいところにおったわ……。ぬしの部下で、瘴気を作っ——」

思い切り頭を踏まれ、言葉が止まった。

不遜にも、エドマンドがアストリッドを踏みつけている。

「いやはや、今日は人生最良の日だな。心強い味方を得て、公式に玉座を奪い、そして今、目の上のたんこぶをひねりつぶそうとしている」

エドマンドはアストリッドの指を引きちぎり、薔薇の印章を奪い取った。

「これでめでたく、俺が金薔薇さまってわけだ」

冷たく、酷薄な笑み。だが、明らかに高揚している。

「もっと友達を大事にしとくんだったなあ、婆さま。調子づいて薔薇の数を減らしちまうから、誰も助けにきてくれない」

「不忠者め……ロクな死に方を……せぬぞ……！」

「ははっ、そりや三下の台詞だ。最期は少々しまらなかったが——あはよ！」

かかとを踏み抜き、頭をつぶす。
アストリッドは原形を失い、黒い液体になって、べしゃべしゃと床に広がった。
ちょこちょこと麗富士が駆けてきて、エドマンドの前にひざまずく。

「お祝いを申し上げます、〈黒衣帝〉陛下——」

「ああ、悪くない気分だ。おまけに銀薔薇の継母上は失脚、俺は正式に国王さまときた。結社も、英国も、俺のもの同然——そろそろ天下取りを始めるぜ」

「素敵です陛下！ であれば私の下半身も征服してください——」

「こんなふうにか？」

下腹部に膝蹴りを叩き込む。臙富士は体を（く）の字に折り、うつとりとした。
「あぐっ……！　ありがとうございます、陛下……♡」びくんびくん。

エドマンドは気味悪そうにそうに後ずさり、そのまま早足で立ち去った。その背中を、臙富士が鴨の雛のように追いかけていく。

二人が去った後も、冷たい石の床には、黒い染みがこびりついていった。

国王をたぶらかし、挙げ句に謀殺した、稀代の悪女グロリア——
彼女を打倒し、学院を奪還した英雄として、ラザフォードは学院に凱旋した。

その動きを胡散臭いと思う者も多いだろうが、ひとまずこの帰還は好意的に受け止められた。ラザフォードが戻ったなら、これ以上、夜会が混乱することはあるまい、と。

そうした空気を敏感に感じ取り、市民や学生たちにも戦勝ムードが漂っている。
「節操のないことだ。女王のために用意した祝杯を、私のために上げるとは」

廃墟と化した学院長公邸で、ラザフォードは皮肉げに口ひげを持ち上げた。その視線の先では、寒さにもめげず、学生たちが大騒ぎしている。

「まあ、そう言ってやるな。彼らも内心は複雑であろうよ」

老教授パーシヴァルがしわがれた声で言う。ラザフォードは軽く頭を下げ、
「老人たちとの折衝、任せてすまなかった。おかげでまた学院長と呼ばれる身分だ」

「二度とごめんだがね。この老いばれには薬臭い研究室が向いている」

「そう言った意味では、朗報だ。このようなことは、もう起こるまい」

「なぜ断言できる？　またおまえさんの直感——」

「そのときが近い」

執務室を沈黙が支配する。外の喧騒すら遠のき、静寂が満ちた。

ややあって、パーシヴァルはかすれたため息をついた。

「ギユネスの縮退反応が本格化したのだな？」

「ああ。……マグナスくんだけでは、手が足りなかったかな？」

「ほかの者では王妃に感づかれていただろう。あやつはこの一か月、よう踏ん張ったよ。

魔女殿を欺き、ギユネスを護り続けたのだから——縮退プロセスは？」

「半ば、と言ったところだ。はみ出た化け物がわんさとわいている。肝心の残り時間だが

——サンジェルマンの見立てでは、十日と少々」

パーシヴァルの仙人眉の下、落ち窪んだ眼窩に怪しい光が閃いた。

「早いな。教父の予見に沿うなら、それまでに夜会の決着をつけねば」

「その通りだ。我らの関知せぬところで神性機巧が生まれては、ギユネスはただの怪物となり——人類の脅威となるやも知れぬ」

パーシヴァルはやれやれと、大儀そうに立ち上がった。

「すぐに夜会を始めるとなると、またひと悶着あるぞ。一度は王妃主導でまとまりかけて

いたものを引っくり返したのだからな。新聞も、ブックメーカーも、また騒ぐ」

「すまない。そちらは君をあてにしている」

「軽く言うな、一九世紀最大の問題児め。参加資格はどうする？」

「アスラと、それに与した者は学籍抹消——となるべきところ、学籍を残すことを条件に、参加資格を取り上げる」

「ふむ……アスラはのむだろう。ほかはどうとでもなる」

アスラがいなければ、烏合の衆に等しい連中だ。雷真一派の魔術師たちとは、実力的に開きがある。アスラが棄権すれば、やるとは言うまい。

「マグナスくんをほかの全員で叩く、という展開は避けたい。マグナスくんの実力は有識者に広く知られるところ、賭けの対象としても大本命だからな。そこで、〈挑戦者〉決定戦をやってもらおう、というのはどうだね？」

夜会^{ナイト}は同時代最強の才能を選び出すもの。世界が望んでいる公正な選出法とは、つまるところ一対一の戦いだろう。従って、誰がマグナスと戦うのか決めればいい。

「重傷者を除き、ロキ、フレイ、ヒノワ・ドモン、シャルロット・ブリュ、ソーネチカ・スニートキナ、そしてライシン・アカバネ——この六人から一人を選ぶ。こちらはバトルロワイヤルでよい。彼らはこれまでもそうしてきたのだから、文句はないだろう」

「ソーネチカには酷ではないかね。ほかの者はすべて、ライシンの一味だ」

「そうはなるまいと思うが——なつても構わぬ。この線で執行部にはかつてみよう」

「ふむ。教授会からは、異論も出まい」

「学生会はうるさそうだな。だが、そちらは学生総代がまとめてくれるだろう」方針は決まった。二人は窓の外、学生たちが焚いたかがり火を見やる。

「さて、これより十日ののち——」

「誰が魔王の玉座に座っているか、見物だな？」

果たして、神性機巧は生まれるのか。生まれるとして、誰の手に渡するのか。

二人の魔術師は無言のまま、いつまでも、揺れる炎を見下ろしていた。

学院奪還が成功したという報告を、雷真はアリスから電話で受けた。

「そうか……なら、みんな無事なんだな？ シャルとか、ロキも——」

受話器越しに、盛大なため息が鼓膜に刺さった。

「馬鹿丸出しの君に忠告してやるけど、君はまず最初に僕の安否を気遣う癖をつけた方がいいよ。生きてドーヴァー海峡を渡りたかつたらね」

「渡らせろよ!? 船沈めるとかやめろよ!?」

アリスの説明では、機巧師団は即日撤収を決め、学院の人事は一か月前の状態に戻された——とのことだ。ただし、アリスは特に重要なこと——グローリア失脚の理由を黙っていたし、どうやって夜々を修復したのかについても、

「知りたければ、機巧都市でたっぷり聞かせてあげるよ。枕を並べてね」

「というふうには、上手くはぐらかしていたのだから……。」

雷真は礼を言つて受話器を置き、背中に言つた。

「……で、おまえはいつまでそうしてるんだ？」

「夜々の気が済むまでです♡」

夜々が雷真の背中にしがみつきの、コアラのようにくっついてた。

機嫌よく笑っている。雷真がアリスと電話していたのに、とろける笑顔の垂れ流し状態。どうやら、先ほど雷真に抱きしめられたことがよほど嬉しかったようだ。

「そーいやおまえ、その……体の具合は……どうなんだ？」

「夜々はいつでも受け入れ準備OKです」

「何の受け入れだ、何の！」

「もちろん愛です♡ もう雷真ったら何を想像しちゃったんですか？」

苦笑してしまう。しょうがない奴だと思いつつ、このやり取りが愛おしいとも思う。

「回復の経緯を詳しく訊きたいところなんだが……まあ、いいか」

「あ、そのことだと思っただけで、硝子から話があるそうです」

「にわかに緊張が高まる。そう、訊かなければならないことは山積みだ。」

「こう改まると、何か身構えちまうな……って、おまえは行かないのか？」

「はい。あんまり雷真と一緒にいると、姉さまが二重にふてくされますから」

しつとりと大人びた笑顔を見せる。……夜々は少し、成長したような気がする。

「おまえ……ちよつと変わったな。大人になったって言うか」

「これが正妻の余裕です♡」

「……結婚はしてねえからな？」

「うふふ。硝子の部屋で不埒なことしたら、正妻権限で切り取っちゃいますからね？」

「冗談でもそのネタやめろ！」

夜々は手を振りながら、ばたばたと廊下の向こうに駆けて行った。

何となくものの寂しい気分になり、そんなふうを感じた自分に驚いた。

気を取り直して、螺旋階段を上がる。ここは協会が手配したゼムリン市の宿——最上

階、スイートルームが硝子の部屋だ。

硝子の部屋はほどよく暖められ、頭の芯が痺れるような、甘い香が焚かれていた。

「どうぞ。奥へいらつしやいな」

硝子の呼び声がする。雷真は眩惑されたように、ふらふらと奥へ進んだ。

寝室で待っていたのは、硝子だけだった。窓際に立ち、優雅に煙管を吸っている。月の光を背負った彼女は、そつとするほど美しく、雷真はしばし見惚れた。

硝子と目が合う。雷真は気恥ずかしくなり、とつさに視線をそらして——ベッドに枕がふたつ並べられているのに気がついた。

改めて硝子を見ると、襦袢一枚の肌着姿。これはまさか、誘われて……。いやいや。思考が夜々に毒されてるぞ

「何か飲む？」

硝子が顔を寄せる。神々しい谷間がのぞき、ふわっと甘い香りが立ちのはつてきた。

「アレ？ やつぱコレ誘って——いやいやいや！」

いい加減にしろ俺！ そう自分を叱り飛ばし、雷真は真顔をキープする。

「いや。それより本題に入ってくれ。話つてのは何だ？」

「せっかちなね。それじゃ、本題に入りましょうか」

硝子の白い手が伸びてきて——そのまま、ベッドに引き倒された。

完全に油断していたとは言え、自分でも滑稽なくらい簡単だった。こと戦闘においては武者の雲雀すらすらねじ伏せた自分が、女の細腕に抵抗もできない。

雷真はベッドに引き込まれ、硝子の胸に埋もれて、窒息した。

（な、何だこれっ……沈む!? 埋まる……溺れる!）

色々な意味で全身が強張り、色々な意味で棒のようになる。

硝子は雷真の頭を抱え込み、首筋に指を走らせた。

電流のような快感が駆けのほり、思考が麻痺する。ふとももが巧みに雷真の膝を割り、あれよあれよと言う間に、さまざまなのがなし崩しになった。

男女の情動とは、雷真が夢想していたような叙情的なものではなく、いっそ荒々しい、激しいものだったようだ。雷真はしばし、我を忘れ——

「……どうしたの？ 好きにしているのよ」

硝子が怪訝そうに訊く。雷真は丸い物体に指を沈めたまま、だらだらと冷や汗を垂らし、融けかけの水像みたになっていた。

「明るいと、恥ずかしい？」

「いや……」

「でしようね。じっくり見たいものねえ、若い子は」

「そういうことじゃねえ！」

雷真は目を閉じ、下顎を突っ張って、忍の一字で欲望に耐える。

「正直言つて……今、硝子さんに……溺れたい……」

それは、狂おしいほどの衝動だ。だが、どうしても——ちたつくののだ。

先ほど見た、相棒の顔があるいは、許婚の顔がある。いっそ、シャルの顔まで。

切り取られる切り取られないは抜きにしても、非常にまずい……気がする。

欲望と理性がせめぎ合い、どうしていいかわからなくなる。そもそも、床でのふるまいを知らないというのもある。煩悶する雷真を見て、ついに硝子が嘔き出した。

笑われて、顔から火が出る。硝子は雷真の胸を押しやり、するりと下から抜け出して、

神々しい膨らみを再び襦袢に押し込めてしまった。

「感心しないわよ、坊や。女に恥をかかせるなんて」

「め……面目ない……」

ベッドの上で正座する。どちらかと言うと、恥をかいたのはこっちなのだが。

「続きは今度にしませうか。坊やの持ち物が、もう少し立派になってからね」
あだっばい視線をくれる。雷真は赤面して、あわてて前を隠した。

「つか、何なんだよ！ 何でいきなり、こんなおかしいだらう！」

「あら。そのわりに、むしろぶりついてきたじゃない」

「!? つつついてねえ！ そんな、むしろぶりなんて、ついて——」

——なくもない。何と言うか、凄かった。ひと言で表現するならば——涅槃？

感触を思い返すとまた変な気分になる。雷真はあわてて邪念を追い散らした。

「とにかく何だ！ 話があるんじゃないのか！」

「お礼をしたいと思ったのよ。それと、お詫びを」

硝子はベッドを降り、床の上に膝をついて、首を差し出すように、こうべを垂れた。

「ちょ……何やってんだ！ やめてくれ！」

急いで引き起こそうとしたが、硝子は頑として頭を上げない。

「……覚えている？ 坊やとかわした、賭けのこと」

「雷真の脳裏に、初めて会った夜の光景が甦った。」

「赤羽天全を倒せばよし。倒せなければ、坊やの体をもらうわ」

天全に勝てなかったときは、雷真の肉体を提供する。そういう約束だった。

「初めから、賭けはいかまだったのよ。私は坊やの復讐心を利用しただけ。……夜々の体の秘密は、もう知っているわね。」

「俺の命を吸ってた——ってことか？ まあ、イオに聞いたけど」

「この三年、夜々はずっと坊やの命を吸い上げていた。修行のあいだもよ？」

「そう言われてもピンとこねえしな。命ってのは、要するに何だ？」

「魔力の源、と言ってわかるかしら。元氣とか、活力とか、そういうもののね」

硝子は顔を伏せたまま、審判を待つ受刑者のように、しおらしく語る。

「学院にきて、私が戒めを解いたときから、夜々はそれを加速させたわ。戒めというのはつまり、夜々が身のうちに飼う〈化け物〉を縛るもの」

「化け物……？」

「夜々のひたいに輝く結晶——あれが、その化け物よ」

イオネラの説明と微妙に違う。イオネラの説明では、あれは生命力を結晶化したもので、イメージとしては電池に近い印象だったのだが。

「坊やだけじゃない。夜々の肉体もいずれ、あれに食い尽くされる」

「なん……だって……？ 何で、そんな——」

「その代わり、いざってときには、坊やと夜々を守ってくれたでしょう？」

——その通りだ。そのおかげで、雷真はまだ生きている。

あの力がなかったら、魔術喰いのときに終わっていた。

「あれが夜々の魔性、性質の悪い借金取りみたいなものね。常に命を奪う。窮地には貸し付けもしてくれるけど、利子をつけての返済を要求する——そういうシステム」

「……その貸し付けで、夜々は……俺の怪我を治してくれたのか？」
硝子はうなずいた。髪が床に垂れ、さりと鳴る。

雷真は深呼吸して、静かな声で「顔を上げてくれ」と言った。

硝子が顔を上げる。瞳は静謐で、死をも受け入れようとする殉教者の面持ちだ。その顔に鉄拳を叩き込む代わりに、雷真は膝を突き合わせ、硝子を見つめた。

「今のを聞いた上で、俺が硝子さんに言いたいことは、これだけだ」

「……言って」

「ありがとう。俺がここまでこれたのは、硝子さんのおかげだ」

硝子の目尻に、じわつと涙がにじんだような気がした。

「夜々には何度も救われてんだ。命なんだ、代金としては安いくらいさ」

「……そうよ、何度も戦うなど言ったのに。ちつとも言うことをきかなくて」

「アレ!? 俺が叱られる流れか、これ?」

おどけて言うのと、ようやく、硝子の口元にも微笑みが浮かんだ。

硝子は悲しむような目をして、そつとかぶりを振った。

「もう叱る気にはなれないわ。坊やが夜々をかばったことも、夜々が坊やに命を返そうとしたことも、みんな、二人の絆の証明だもの」

硝子は居住まいを正し、三つ指をついて、改めて頭を下げた。

「ありがとう。夜々を大事にしてくれて」

「だから、顔を上げてくれて……」

「私を救ってくれたのも、坊やの無茶や」

「違う。俺はまだ、硝子さんを救えてない」

協会のこともあるし、日本軍のこともある。現状、どちらの問題も片付いてない。

だが、硝子はさばさばとした調子で、明るく言ったのだ。

「もう十分。私は天下の花柳斎、ちよつとは知恵も回るのよ。あの子たちを悲しませない方向で、知恵をしまるわ。頼りになる坊やもいることだしね?」

「……そうしてくれと、ありがたい。なら、これで一件落着だな」

硝子を立たせ、自分はベッドに腰を下ろす。

「——さっきの話だけどき、どうしてあんなことが可能だったんだ? 魔力とか命とか、

魔術師から人形には送れても、その逆は無理なんだろう?」

その問いの答えなのか、ふと、硝子は独り言のように言った。

「どこからが人形で、どこからが人間なのかしらね?」

「……線引きか? 確かに、それは難しいところ——なんだろうな」

夜々は外見的にも機能的にもほぼ人体だが、やはり人形だ。ドイツの機巧兵士は全身が人間の部品で構成され、改造人間と言うべきものだが、こちらも《イブの心臓》を内蔵しているんで、やはり人形。

人造の心臓を使っている、イブの心臓でさえなければ、話は変わる。ロキとフレイの

は間違いなく人間だし、体の半分を機巧化しているというアリスも人間。雷真自身、硝子の治療を受けた際、肉の一部を精瑠に置き換えている。

人形は魔力を放てず、ほかの自動人形を使えない。だが、もし魔力を供給する魔術回路が存在したら——既にあるような気がする——その人形は人間だろうか？

「私もずっと悩んでいたわ。人間と人形、その線引きはどこにあるのか。有名な人形師の弟子——相棒——になってからね。だけど、あるとき、ある人が言ってくれたの」

ちらり、と雷真に流し目をくれる。

「人間も人形も同じものだ」とね」

それは、ほかならぬ雷真が言った言葉だ。

雷真を見つめる硝子の視線に、熱がこもる。

「不思議ね。こだわりはとつくの昔に捨てて、気持ちの整理もついていたはずなのに——坊やが人間だと言ってくれたとき、確かに嬉しかったのよ。ちっけな悩みだと、昔の私を笑い飛ばしてくれたようで……胸がすつとしたわ」

——硝子はなぜ、こんなことを話したのだろうか？

「坊やは知っているかしら。嘘か誠か、花柳斎は本物の〈人間〉を造ったつて」

「ああ……そういうや、どつかでそんな噂を聞いたな。でも、そんなのハッタリだろ。本当に人造人間ができたつてんなら、それは神性機巧になるんだろ——硝子さん？」

気がつくと、硝子が背中を向けていた。橘袴の帯をほどき、脱ぎ捨てろ。

先ほどの続きが始まったのかと思って、雷真は大いにあわてた。とつさに自分の顔を手で覆ったが、指の隙間からのぞいてしまうくらいには、雷真も健全な男子である。

硝子は惜しげもなく裸体をさらし、背中を見せている。

呼吸が止まるくらいに美しい。優美な曲線を描く、張りのある肌。なめらかな背中には染みひとつない。くびれた腰はあまりに魅惑的で——

その存在に気付き、雷真は目をむく。

腰骨の上あたりに、墨で書いたような書体で刺青がされている。その銘は——

花柳斎、と読めた。

月光の差し込む窓辺で、硝子が妖しく微笑む。

「私が、その〈人間〉よ」

言葉が出ない。絶句する雷真の前で、硝子は急に饒舌に語り始めた。

「生体機巧の行き着く先は、ただの人間。人間を造ったところで、機巧と人体の二項対立は止揚できないの。わかる？ 人間を造るのは神の御業、だけどそれではただの模倣だわ。模倣では、人間は神さまになれない」

「ちよつと待ってくれ。もつとゆつくり——俺にわかる言葉で」

「夜々が坊やに命を返したこと、それは、人形ではあり得ないこと。こちら側の事象では



なく、あちら側の事象よ。あちらはこちらより高い次元にあり、こちらではとても難しいことが、あちらではすんなりできるの。だってあちらは、神さまの領域なんだから」

カミラツクルタメ——ふと甦った言葉は、誰の台詞だったか。

「私の身近にも、愛しい誰かを呼び戻したくて、神さまにすがった者がいる。もし神さまの子を造ることができたら、その人はきっと神の名代となるのでしょね」

硝子の語る言葉は、成績のふるわない雷真には、一割も理解できていない。

だが、論理ではなく直観で、夜々の起こした〈奇跡〉の答えを、雷真も知った。

「夜々は、もうすぐ……なるのか？」

「その可能性はある——いえ、あった」

先ほどとは別の衝撃が、雷真の全身を貫いた。

足場が崩れ落ちるような、そんな恐怖を感じながら——問う。

「夜々の残り時間は……あと……どのくらいだ……？」

「十日後」

硝子はそつとまぶたを下ろし、祈るようにつぶやいた。

「その答えは、出ているでしょう」

かくて再び、夜会の幕は上がる——

あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

というわけで後編です。もう多くは語りません。すべてはお話の中で語り尽くしました……とかカッコつけてるけどあとがき1Pしかないからあああ！

常日頃「スリムにするのは得意」とかドヤ顔うざい海冬レイジもゼロ稿四百頁超えには青ざめました。シメキリ二週間超過してたレイイ！しかし、そこは職業作家の端くれ、きつちり帳尻合わせるのが技術というもの——ならシメキリ守れ。機巧少女の関連情報は巻末に効率よくまとめていただきましたので、そちらをチェックしてくださいね。特に画集情報を！ ついに出るのよかったー！ 俺たちるろおさんファンはマストバイ！

今回もたくさんの方のお力添えで、出版まで漕ぎつけました。いつも皆さまのおかげで完走しております。そして、待ってくださった貴方に最大の感謝を。ではまた次回、いよいよ夜会最終戦——「か!?」という13巻でお目にかかれますように！

2013年8月 海冬レイジ

いよいよアニメが始まるよー観てね！ 全員が本気出した円盤特典のアレ、めっちゃ語りたいんですけど、紙幅が——OK、円盤の方のあとがきで語ります(ドヤァ)。



はい。絵の人です。

やさぐれロキさん超カッケー。悪墜ち？ アンリも超素敵。

も一駄目な方向に直球ストライクで私様大喜びでしたよ。

イラストにはなってないけどなっっ。

『機巧少女は傷つかない』 画集

2014年2月
発売決定!



大人気
イラストレーター
るろおが彩る
『機巧少女は
傷つかない』の
世界の全てが
ここに!

「機巧少女は傷つかない」
コミカライズ

月刊コミックジーン &
月刊コミック
アライブにて
2作同時
連載中!



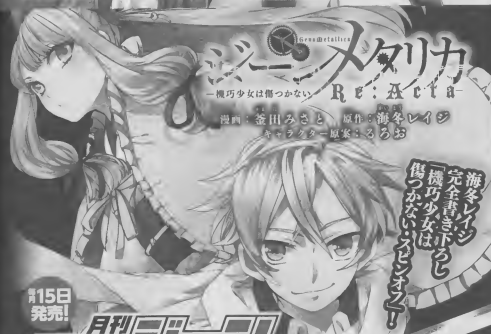
マシンドール
機巧少女は
傷つかない
Unbreakable Machine-Doll

高城 計 原作・海冬レイジ
キャラクター原案 るろお

機巧と魔術の香り立つ
正統派学園バトルファンタジー

27日
発売!

comic alive



ジーメタリカ
Re:Acta
機巧少女は傷つかない

漫画：金田みさと 原作：海冬レイジ
キャラクター原案：るろお

海冬レイジ
完全書き下ろし
『機巧少女は
傷つかない』の
ピンナップ!

15日
発売!

月刊コミック
ジーン